

NO. 44
WINTER
1974

英語展望

ELEC BULLETIN

〔特集〕 日本文化の国際性

外山滋比古・斎藤襄治・武田勝彦

貝瀬千章・R. C. Bedford

鼎談 國弘正雄・K. D. Butler・山本正

国際展望 斎藤勇・星山三郎・福田陸太郎・山岡清二

「焦点と前提」 太田 朗

「英語になった日本語(1)」 長谷川 潔

“Silence Is Not Always Golden (5)” D. Hale

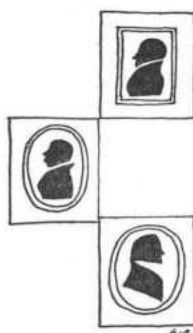
ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

英語展望

NO. 44
WINTER
1974

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima
The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

ダンテ	齋藤 勇	2
カサブランカ	星山三郎	6
リオの休日	福田陸太郎	8
国際的視野と「帰属意識」	山岡清二	10

【特集 日本文化の国際性】

鼎談・日本文化の国際性	國弘正雄・Kenneth D. Butler・山本 正	12
文化の国際性	外山滋比古	22
日本文化の国際性	齋藤 襄治	24
日本論と日本人論の明暗	武田勝彦	26
私の見たイギリスの日本語教育	貝瀬千章	30
Cultural Constraints on Communication	R. C. Bedford	34
焦点と前提	太田 朗	43
【連載】英語になった日本語 (1)	長谷川 潔	46
Silence Is Not Always Golden (5)	David Hale	51
Crossword Puzzle	C. V. Harrington	57
【新刊書評】アメリカの南部	國弘正雄	58
新刊紹介		60
新刊案内		63
展望通信		64

表紙デザイン・カット
太田英男

ダンテ

—おもに「神曲」について—

SAITO TAKESHI

齋藤 勇

欧米の文化に大きな影響を与えた大詩人は、と考えれば、ホメロス、ウェルギリウス、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテなどの名が誰の念頭にも浮かんで来るだろう。英語や英文学に関心の深い人は、ミルトンを加えるだろう。そのうちのダンテは、日本でも相当にひろく、かなり前から知られていることは、喜ばしい。私はここに、多忙な読者のため、ダンテ紹介の拙文をしたためる。

ダンテ・アリギエリ (Dante Alighieri, 1265~1321) は、青年時代までは華やかな幸福を楽しんだ。その頃は南フランスの抒情詩人たち (troubadours) の詩が、彼の故郷フィレンツェあたりの詩人たちにも愛誦されていた。そして彼は、明治初期まで我々の先祖が漢詩漢文を書いたようにラテン語を用いず、母語であるイタリア語で詩文集「新生」(*La Vita Nuova*, New Life, 1292) を創作した。それは同じ町の娘 ベアトリーチェ (Beatrice, 1266~90) を理想化して、その気高さと美しさにあこがれるところを31篇の短詩 (25 sonnets, 5 canzoni, 1 ballata) にうたい、そしてそれらを散文で説明した彼の処女作である。

ベアトリーチェに対する彼のあこがれは、中世宮廷恋愛 (courtly love) の最も倫理的な面を示すものである。そしてその特徴は巻末の第43ソネットに最も明白である。そこにダンテは自らの魂を「巡礼である靈魂」(spirito peregrino) と呼び、そしてそれが今は天上に移されているベアトリーチェのあとを慕って、地上から天上への旅を続けていること、またそれができるのは、

Intelligenza nuova...pur su lo tira (stanza 42)

新たなる智力が絶えず上に引きあげてくれる
からであることを明記している。

この「新たなる智力」は理想化された淑女に対するダンテの愛が授けたものであり、それによって彼は天上に引きあげられ、神の栄光を蒙ることができるのである。

そしてこの箇所は、ゲーテの晩年を飾る大作 *Faust* の最後の有名な2行、

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

永遠の女性たるもの、
我を引きあぐる。

このような恋愛観は、ギリシアやローマの古典詩人たちには、未知の世界であつたろう。

さて地上のベアトリーチェにあこがれた青年ダンテは、死後の彼女をしばしば「わが淑女」(mia donna) と呼んでいるが、それはカトリック教徒が聖母マリアを *madonna* として拝む気持ちに近いものであつたろう。そしてダンテは浄火の山頂からは天堂の案内者としてベアトリーチェの助けを受けることになっている。従ってベアトリーチェに対する彼の敬慕は、彼の読者にもたしかに「新しい生命」をもたらすであらう。

ただしイタリア生まれの英国詩人兼画家 Dante Gabriel Rossetti (1828~82) は、*Vita Nuova* の英訳 *New Life* を1861年に出したが、彼が絵にも詩にも書いた名作「在天の乙女」(*The Blessed Damozel*) に現われている宗教的雰囲気は、甚だ漠然たるものである。それよりも中世後期の騎士がひとりの淑女に対して忠誠を献げる宮廷恋愛または「淑女崇拜」(*Frauendienst*) に、ダンテの恋愛観との共通性が多いようである。ただし淑女崇拜が恋愛至上主義となる時、擬似宗教的雰囲気がかもし出され、「薔薇物語」後篇において非難されるようになる。ことに Arthur 王伝説における騎士 Lancelot と王妃ギネヴィアとの不倫の関係などがあるようになった。

その頃イタリアは皇帝支持派 (Guelfi, Neri) と教皇支持派 (Ghibellini, Bianchi) とが対立して紛糾していたが、ダンテはグウェルフィの一人としてベアトリーチェ他界の前年 (1289) 反対党と戦ったが、やがて彼の党派はフィレンツェ共和国から追放され、同国内で捕えられれば火あぶりの死刑に処せられることになったので、彼は流離放浪の苦難を忍び、故郷に帰ることなく、ラヴェ

1. Yeats は初期の短詩 'When You Are Old' に 'the pilgrim soul' という名句を書いているが、ダンテのこの句の訳であらう。

ソナで世を去った。

後半生を堪え難い苦境のうちに過ごしたので、ダンテの人生観は決して甘たるいものではあり得なかった。それは深刻、峻厳、時には辛辣であった。そして晩年にその信念をもって、古今の歴史または伝説中の人物をカトリック教会の宗教的・道徳的標準に照らして、きびしく批判した。それが世界文学中の大傑作「神曲」(*Divina Commedia*)を一貫する精神である。そしてこの大作は第1篇「地獄」(*Inferno*; Hell)が1304年頃から1308年まで、第2篇「浄火」または「煉獄」(*Purgatorio*, Purgatory)が1308—13年、第3篇「天堂」(*Paradiso*)が1314—21年、即ち起稿から完成までおよそ17年間にわたる苦心の結実である。

その各篇の長さはほぼ等しく、それぞれ34, 33, 33, 計100の canto (歌、または章) から成り、各歌には大体140行があり、全体は合計14, 233行と数えられている。そして3行が一つの stanza を成す三韻連 (terza rima) の形をとり、その押韻法は aba, bcb, cdc, そして第2行の韻が必ず次の連の第1, 3 両行の韻となるので、進み行くにつれて次の光景や人物が現われることを描くにふさわしい形である。この押韻法は英語ではむずかしいが、Shelley の *Ode to the West Wind* や *Triumph of Life* に用いられて、たえまなく風の吹くことや行列の長く続いていることを、極めて適切に言い表わしている。これを音楽になぞらえれば、遁走曲 (fugue) の特徴に似ている。とにかく整然たる秩序から成るこの長詩の建築術的構成 (architectonics) の美は、イタリア式庭園の幾何学的特色とよく似ている。ちなみに、イギリスの庭園は幾何学的均斉を保つよりも、できるだけ自然そのままの美を保存するように出来ている²。

イタリア語の長詩としては、「神曲」が最初の傑作である。そして当時のイタリア語は古典ラテン語から派生してあまり古くないものであったから、ラテン文学に精通している人には、たやすく学びとることのできるものであろう。従って T.S. Eliot が1929年のダンテ論冒頭に、「神曲」を「極度に読みやすい」と断言したのは、ラテン文に熟達している人にとっては、イタリア以外の中世諸国語の詩よりは読みやすいという意味ならば、妥当な断言であらう。

ただしイタリアの哲学者であり文学批評家でもある Croce (1866—1952) は、「ダンテ詩論」(1920) の中で、

2. Cf. Lander: 'Marchese Pallavicini and Walter Lander' (*Imaginary Conversations*, 1826, Vol. I, p. 189), 'We Englishmen talk of planting a garden; the modern Italians and ancient Romans talk of building one.'

用語が豊富で屢々古語があり、あまり知られていない史実への言及が多く、また古い哲学に基づいているため、ダンテは晦渋だと言っている。それは別として、ダンテの文体が端的率直であること、寓位的表現法が適切なこと、また憎悪から愛に至るまでの人間の感情の広さと深さと高さとの極みを示していることは、ひろく誰にでも認められている点であろう。まことに、この詩はカトリック教会的・道徳および信仰に基づくダンテの人生批判である。或いは彼自身の確信による「最後の審判」であるとも言えよう。ルネサンスの画家が屢々描いた「最後の審判」の構想には「神曲」から出た図案が少なくなかったのであるまいか。

この大作にダンテがつけた題は、ただ *Commedia* であつた。まず人間の心や行いのみじめさを描いた「地獄篇」は極度に悲痛または残酷であるけれども、「浄火篇」においては、悔いる心の者が罪を浄められ、そして「天堂篇」においては救われた人々と天使とが神の栄光をほめたたえている。天堂は最高の祝福を受ける者の歓喜と感謝の声とに満ちている。つまりこの大作は悲劇を経て神に感謝する最高喜劇に到達するという意味で、神の審判を示す喜劇、もっと簡潔に言えば「神曲」なのである。そしてイタリア国内における政争を超越し得ないけれども、狭隘な国民的感情に囚えられず、多くの点において普遍性を保っている。ただ宗教改革よりも2世紀も前のことであるから、紀元前に死んだためキリストの福音を聞く機会をもたなかった善意徳行の人々が置かれた埒外地獄 Limbo や、浄火の山や、聖母マリアへの祈りなど、非プロテスタント的部分のほかは、彼の神学は博大であると言ってよからう。

さて「神曲」は、50年ごとに大赦を執り行うという制度が初めて実行された「聖なる年」(Jubilee year), 1300年即ちダンテ35歳の時から始まることになっている。

人生の旅半ばにて、
われ路に迷い果て、
小暗き森に踏み入りぬ。(Inferno, 1, 1—3)

彼はベアトリーチェの好意によりローマ最大の詩人ウェルギリウスに導かれて、地獄めぐりを始める。地獄の門には、

ここ過ぎて、苦悶の市に、
ここ過ぎて、とわの苦患に、
ここ過ぎて、破滅の民に。

.....

ここに入る者は望みをすべて捨て去れ。(iii. 1—3, 9) とある。地獄に落された人々には、救われる望みが与えられない。「旧約聖書」中のアブラハム、モーセ、ダビ

デサエリソボに置かれる。ソクラテス、プラトンなどギリシアの哲人は言うまでもない。

地獄は摺鉢なりになっている。そして下におりに従い、益々罪の重い男女がうめいている。その檻の順序は、色慾、暴食、激怒、異端、虚待、自殺、冒瀆、男色、高利貸、女を欺くこと、聖職売買などの汚職、偽善、偷盗、邪悪な策謀、争いをかますこと、詐欺、郷党を売ること、そして最後に、神の恩寵に対する叛逆、という風に、下に行くほど益々重く罰られる。

「地獄篇」中最も有名な個所は、不義な恋仲となったパオロ (Paolo) とフランチェスカ (Francesca) とのあわれな話 (第5歌) および郷党を売ったウゴリーノ (Ugolino) 伯が2人の孫とともに幽閉されて、遂に餓死する悲惨な話 (第33歌) であろう。チョーサーは「カンタベリー物語」中で修道士に (cf. *The Monk's Tale*, 417—72) ウゴリーノ伯の一節を語らせている。また W. S. Landor は対話集「五日物語」(*Pentameron*) において、ウゴリーノ、餓死の場面 (46—75) をすべての詩集中のいかなる30行もこれに匹敵する個所はないと、ペトルルカに激賞させ、かつボッカッチオには、フランチェスカに関する6行 (133—8) を、罪人に対する同情としては最高なものであると解説させている。

そのほかダンテと同じくフィレンツェ出身ではあるが、彼とは正反対のギベリン党首領ファリナータ (Farnata) は、火の燃えさかる場所で棺の中に置かれている (第6歌)。彼はダンテの方言を聞いて同郷のよしみを感じたが、ダンテの先祖は誰かとたずねるその態度には敵意が現われていた。そして政治家たちがかつてフィレンツェ全市を焼き払うといきまいた時、自分だけが毅然としてそれに反対して、ゆかりの都を護りぬいたと自慢する。ファリナータはダンテの先祖の仇敵であったけれども、彼が地獄における自己の苦難よりも自党の失敗を一層痛感している彼の心事のいささか英雄らしきを認めながらも、ダンテは彼が権勢欲に駆られまた異端であることをゆるす気にはなれない。

両詩人ウェルギリウスとダンテとは更に進んで、人を虐げる者や己れを虐げて自殺した者、神を侮る者などの苦患を見たのち、彼がかねて敬意をいただいていた同郷の先輩ブルネット・ラティーニ (Brunetto Latini, c. 1210—94) が男色の罪を犯したかどで地獄に落されているのに出会い、また

われ良心の呵責なくんば、

運命のさいなみも恐れず。 (*Inferno*, 15, 92f.)

と言うのを聞いて、ダンテは感動せずには居られなかった。

「地獄篇」中もう一つの場面を見過しにすることはできない。それはホメロスが大作後篇の主人公としたオデュッセウス (ダンテの詩では *Ulysses*) がトロイエ陥落後、地中海で漂泊の10年間を過して、ようようギリシア西部の領地に帰った話である。彼は木馬をもってトロイエ軍を欺いたので、地獄で炎に包まれている。それは彼が父、子、妻への愛をも凌ぐ激情すなわち、

この世のさまをわきまえ、かつ

人々の善し悪しを見わけんとする

熱意に打ち勝ちがたきため、 (*Inferno*, 26, 94—9)

つい、好奇心に駆られて、日常生活の義務をなおざりにしたことに對する刑罰でもある。この刑罰はホメロスの詩には出ていない。ダンテ独特の審判である。

Tennyson は、オデュッセウスが再び妻子を残して地球のはてにあるという未知の世界を探しに船出する時の心境をすぐれた短詩 *Ulysses* としているが、その短詩における最後の出帆動機は、ダンテの想像に基づくものであろう。T. S. Eliot は「地獄篇」第26歌の50行とテニソンの70行とを比べて、前者は簡潔、後者は装飾的と評し、かつ後者は平凡で二つの次元しかもたないと軽んじたが、テニソンはユリシーズを地獄内の人とせず、前進してやまない英雄の精神の一典型として歌ったのである。

ダンテは地獄の奥底で、キリストを裏切ったユダ、およびローマの基礎を築いたカエサルを殺したブルトゥスやカッシウスおよび彼らの題目である「悲痛の領土の皇帝」(34・28) 即ち魔王 (Lucifero)³ が氷の海に巨大な全身を入れて震えているのを見る。すべて墮獄の者は罪を悔いることがない。そして悔いる心のない者には救がない。ダンテは尚もローマ詩人に導かれて、地中を南に下り、再び表面に出る。そこは罪を浄める火が燃えている山である。

「浄罪篇」はその山に登る人々を描く33歌から成る。その山は一つの島全体であり、地獄の底側から大地とはさかさに聳え立っている。その麓から頂上に近づくに従い段々小さくなる。それは完全に浄められる者が次第に少なくなるということである。林には臨終に罪を悔いた者や急死の時初めて悔いた者などが置かれ、そしてこの山の頂には地上樂園があり、そこでダンテはウェルギリウスに別れ、Matilda という婦人に導かれて、天堂に登る。そして天堂では「永遠の女性たる」ベアトリーチェに守られまた導かれる。

3. ミルトンは「失樂園」において、「光を放っている者」という意味の名 *Lucifero* を墮獄後の魔王には用いず、「敵」という意味の言葉 *Satan* で彼を呼ぶことにした。

この第2篇において特に注意すべき場面は、イタリアに生まれたが南仏のプロヴァンス語で詩を書き、そして数奇な運命に弄ばれた宮廷人であり *troubadour* であるソルデッロ (Sordello, c. 1200—c. 1270) がおよそ千三百年前の同郷人ウエルギリウスと問答する第6—7歌と、邪淫の罪を犯した男の例とされている南仏の抒情詩人アルノー・ダニエル (Arnaldo Daniello, 在世1180—1200) が痛悔の情を訴える第26歌とであろう。

また終りの4歌 (30—33) におけるベアトリーチェとの対面も、「新生」の零圍気が高揚され純粋化されたものとして、読者の心をも清めるであろう。彼女が「地獄篇」第2歌に現われたのは、全くダンテに対する好意からであり、彼に地獄の苦患を示すことによって覚悟を固めさせ、一歩も邪道に陥らせまいとしたためである。それで彼女はリンボにいた大詩人ウエルギリウスの理智を信頼して、キリスト教の愛の精神から、地獄めぐりの案内を頼んだのである。そのためにダンテは踏み迷うことなく、浄火の山の頂までたどりつくことができた。その時ベアトリーチェは天上から降って来て、再会の機会を喜び、母のような慈愛を胸にいだきながらも、ダンテに反省と決意とをきびしく促した。そのため彼は過去のあやまちを悟り、後悔に堪えかねて倒れた。彼女はもはや肉体の美によって彼を魅了するのではない。身にまとう物が白(信仰)、緑(希望)、赤(愛)の3色に象徴される通り、キリスト教神学を具現する気高い心の者となってダンテを助けているのである。

最後に、「天堂篇」(*Paradiso*) に歌われている人々にも、誓を果さなかった者、恋愛に熱中し過ぎた者など、人間として不完全さを免れなかった魂がある。彼らは九天のうち低い部分、即ち月、火星、水星および金星の世界に置かれ、そしてキリスト教神学に精通する神父トマス・アクイナス (c. 1227—74) や、ひとすじに信仰生活を完うした聖徒アッシジのフランチェスコなどは、燦然たる太陽天に挙げられ、また神のための戦士は火星天に、正義をもって民を治めた君主は木星天に、黙想者は土星天に、贖われた使徒(ペテロ、ヨハネなど)は恒星天に、そして諸々の天使は原動天に、おのおの然るべき所を与えられている。そのまた上の至上天 (*cielo empiero, coelum empyreum*) は、神が天使たちと聖徒たちとを従えて君臨する御座のある所になっている。ダンテが薄暗い地獄から浄火の山に出た時には、青空に星がきらめいていたが、天堂には昼夜の別がなく、いつも光明に満ちている。

「神曲」全部に有終の美をなす「天堂」第33歌は、壮厳無比の大文字である。そしてそれはクレールヴォの聖

ベルナール (Bernard de Clairvaux, 1091—1153) がダンテのため聖母に祈る言葉で始まる。この修道院長は、前進しようとして羽ばたき

しながらも、あとじさりせぬためには、
祈りによって御恵みを受くべきなり。(33・145—7)

とダンテに警告してくれた。それでダンテは、
しかと見つめて動かず、移らず、

かつ見るに従い、心いよいよ燃えたり。(33・197—9)
そして憎むべきものを痛烈に憎み、愛すべきものを切実に愛したこの大詩人は、天地が

L'amor che move il sole e l'altre stelle (33・3145)

太陽とその他諸々の星とを動かす愛

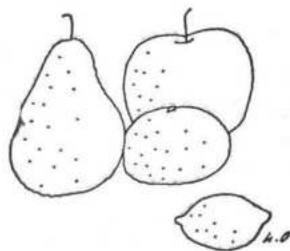
に動かされている壮大無辺の宇宙であることを知り、また真に心の平安を得ようとするならば、神の意志に服従するほかないことを体得した。極めて有名な次の一行、

E la sua ^{volontà} ^{volontate} è nostra pace. (*Paradiso*, 3・85)

しかして神の御旨こそ我らの平安

は、「新約聖書」中の「ヨハネ伝」16・33 や「エペソ書」2・14から出たものであろうが、深遠な意味を含む実に偉大な名言である。

L'amor と始まる行やこの行を基調とする「神曲」は、ヨーロッパ中世千年のしめくりをするのみならず、ルネサンス以後今日に至るまでの六百年間にも、識者の耳には朗朗として響きわたった。そして今後も心ある者の眠りを呼びさますであろう。(東京大学名誉教授)



—古いアラブと新しいアラブの都市—

カサブランカ

HOSHIYAMA SABURO

星山三郎



1. カサブランカへ飛ぶ

英語が世界各地でどのくらい通じるのか。スカンジナビア諸国のように、イギリス本国よりも、方言やスラングがないため、通じやすい国もある。同じヨーロッパにあって、ドイツのように英語がかなりよく通じる国もあるが、フランスのように、英語だけでは不自由な国もある。南アメリカでは、どこへ行っても日系人が顔を出して来るので、旅には不自由はしないが、英語だけでは、だいぶとんちんかんな事が起るに相違ない。

アフリカの場合はどうか。それをこの目と耳でたしかめたいというのが、私の願いであった。パリーのユネスコとジュネーブにある国際教育局 (International Bureau of Education) が1964年に出した世界の中等学校における近代語教育 (Modern Languages at Secondary Schools) によるとアフリカについてこう書いてある。

"In Africa, the French speaking countries learn English and the English speaking countries French for the purpose of communication between them and in order that African unity may be strengthened."— (p. XXIV)

「アフリカでは(土語以外に)英語を話す国は仏語を、仏語を話す国は英語を学ぶようにしている、その目指す所はアフリカ諸国家間のコミュニケーションのためであり、アフリカの融合統一を強化せんがためである」

このようなアフリカ、私はその一角でも見たいと思い、政情が落ちついて気楽に行けそうな国としてスペインに近い、イスラム教徒の国モロッコを選んだ。カサブランカは首府ではないが此の国最大の都市、今や(1973)人口150万を持つアフリカ最大都市(カイロ、ヨハネスブルグと共に)の一つである。大西洋に臨み、毎年国際見本市が開かれる商業の盛んな港市。ランダム・ハウスには第2次世界大戦当時(1943)、Roosevelt と Churchill の会談地とだけ記してある。

カサブランカに行くことに定めたこの6月、大使館を訪ねようとしたら、まだ大使館がなかった。そこで丸の内附近の幾つかの海外旅行社をかけめぐって見たが、欧州各都市の案内記はすぐカバン一杯にもなったのに、カ

サブランカのもの全然ない。航空路を調べても、マドリッド、パリ、ブラスセル、ロンドン、フランクフルトなど欧州から地中海を越えて飛ぶ——南北を結ぶ航路は幾つもあるけれども、アフリカの東西を結ぶ航空路は殆んどない。独立したとはいえ、旧植民地の本国とのつながりは一朝にして断ち切れないことがわかる。旅行社に頼んでホテルだけは探して貰い、あとの旅行計画は立てないままに、7月末に旅立った。

アンカレッジを経て、北廻り、パリーの空港で一休み、羽田を夜の10時に立って翌日の正午にはもう私はカサブランカの空港に降り立っていた。時差9時間、23時間めである。緑の少ない、半砂漠地帯にある空港は焼くように暑い。アラビア文字の標識が目にしみる。

2. たよりない空港の案内嬢

この国への入国手続はかんたんに済み、ゲートの外に出るまで幾分もかからなかった。空港の案内所にはピンク色の帽子、ピンク色の制服を着たこの国の娘さんたちが数名、額を寄せ合って賑やかにおしゃべりをしていた。声をかけるまで、だれひとり、ふり向こうともしない。英語で「カサブランカの地図がありますか」と聞くと「無い」という。「どこで手に入れられますか」——「わからない」という。「アンファ・ブラージュ・ホテル」へ行きたいのだというと、都心までは遠い。40キロもある。ホテルはさらにその先の海岸だ。「道順や乗物は」と重ねて聞くと「タクシーでいらっしゃい」(Take the taxi!) をくりかえすばかりである。「この町に sightseeing bus がありますか」と聞くと返事がない。

3. 曠野を飛ばすタクシー

空港前の広場には客を待つタクシーが列をなして並んでいた。真昼の太陽は額をこがすように照りつける。空港のあたりは見渡す限りうねるように続く曠野、いや半砂漠で目をさえぎるものは何一つとしてない。ただ幅広い一本の道路、これは完全に舗装されている。

中年の男が寄って来た。タクシーの案内係だ。アンフ

ア・ブラージュ・ホテルまで行きたいのだがというとき、「Take the taxi.」という。「そこまでいくらか」と聞くと「40デルハム」。

車は地平線の彼方をめざしてまっしぐらに走る。いくたびか行く手に水溜りが見えたかと思うと、それがいつしか消えて行く。かげろうだ。時折 車窓からはヤシの木が見える。所々に 牛の群・羊の群が見える。牧草は皆枯れてしまっているのか黄色い。所々に土で塗り固めた農家の壁、崩れ落ちた塀、そのまわりに数本のユーカリの木。ひとりで家畜とたわむれている子供。サボテンの実を摘んでいる老婆。道では土民の曳いて来る荷馬車や荷駄を積んだ馬とたびたびすれちがうが、行きかう自動車は殆んどない。私の車だけが時速 90 から 100 キロのスピードですいすいと飛ばしている。ちょっとした王者の気分だが、運転手に写真をとりたいたから、ゆっくりやってくれと云っても通じない。英独仏語のどれで話してもダメ。25分ほどして崩れかけた白壁の家並の間からモスク（イスラム教寺院）の塔が見えがくれしているうちに、フェニックスの並木通りに入った。ベールで顔を覆った婦人がいる。新高層ビルのスカイラインが右手に見え始めたころ、運転手はハンドルを左手に切って海岸へ出た。大西洋だ。間もなくホテルに到着。チョコレート色の屋根、白壁の平家建てで、細長く段々と重なり合って海を見下ろしている。タクシー代を払う。運転手は“tip”ということばだけは知っているらしい。チップを含めて45モロッコ・デルハム [MDH 45]、日本円に換算してみたら3,300円。これは高い！あとでホテルの従業員から、この町で車に乗るなら“プティ・タクシー”（小型）になさい、半額で済みますと教えられた。

4. 市内バス風景

あくる朝、露にぬれた龍舌蘭と夾竹桃の間を通過して海岸沿いのバス停へ降りて行った。一番バスがもやの中から大西洋の海鳴りを乗せてやって来た。差出した手の平のコインの中から運転手は大きいコインを1つ取って、小さいコインとベラベラの切符をくれた。料金は40フラン、日本円にして30円である。客は私のほか誰れもない。昨日のほこりを残したままの堅い木の椅子に坐ると、突然青年が飛び乗って来た。汗まみれのよごれたシャツを着て、彫の深いマスクの底に、アラブの目が光っていた。フェニックス・夾竹桃と続く並木路をバスは走る。清楚なワンピースの娘が乗って来た。手にした本はフランス語（？）らしい。続いてジーパン、バンタロンの娘たち、サボをは

き、時折ネーブルをのぞかせる。ノーネクタイの青年。1956年モロッコを独立させたモハメッド五世が、この国の近代化をめざし、自分の娘にベールを脱がせ、ハイヒールをはかせたというが、その近代化が定着したのであろう。この流行に関する限り東京も、パリもロンドンも変わった所はない——流行に国境なし——などと考えているうちに次のバス停にきた。うすよごれた白いターバンを巻き、額に年輪を刻んだ老人と、ベールで額を覆った婦人がぞろぞろと乗って来た。ねずみ色の服をまとった方が中年で、黒色は老婆ではないか。ブーゲンビリアの生垣、サイプラスの庭木に見える街路、フェニックスの並木を縫ってバスは都心へ、都心へと向けて走った。貧しいアラブ人、富めるアラブ人、老いたるアラブ人と若いアラブ人、新しいアラブと古いアラブを乗せて車は走った。都心——大通りの左には崩れかけた白壁の家のひしめく「古いメディナ」（貧しいアラブ人の居住地区）、右側には20階もの高層ビルの立ち並ぶ都心、「モハメッド五世広場」へと向ってバスは走った。バスはカサブランカの縮図だ。その同居する対照があまりにも強烈だ。ああカサブランカーシティ・オブ・コントラスト。

5. フランスの退潮と豪華な家屋敷

ホテルでE.V.さんというオランダ人に会った。シカゴに本店を持つある銀行のカサブランカ支店長。赴任して来たばかりで住居を探していたが、その家が今日見つかったのだという。奥さんが日本人。一緒に見に行きませんかという。星条旗のひらめくアメリカ総領事の官邸の隣りである。芝生、フェニックスの生えている庭付で約1,000平米。白亜の家は2階建て、1階が3部屋で2階

(p. 33 へつづく)



中央バザールのみやげ物店

リオの休日

FUKUDA RIKUTARO

福田 陸太郎

リオ・デ・ジャネイロは「一月の川」という意味の言葉だそうである。1502年1月ポルトガルの航海者ゴンサロ・コエーリョがこの地を発見したとき、入江を川とまちがえてこう呼んだらしいが、すぐ目の前の湾頭に、「砂糖塊山」と名づけられた円錐形の山がボコンと立っていて、ちょっと異様な感じを受ける。この風景は、コパカバーナなどの海岸の散歩道にくねくね連なる鼠色の縞模様と共に、リオのトレードマークになっているようだ。

私は去る7月7日に羽田空港を出立して以来、ヨーロッパ、カナダ、アメリカ合衆国と次々に用事を片づけながら旅したので、南アメリカで最後の目的地であるリオに着いたときは、もう“my journey's end”というわけで、のんびりした休日気分になりかけていた。といっても、リオでは、国際哲学人文科学協議会(CIPSH)と称する集まりに、近代語学文学国際連合(FILLM)の代表の一人として出席したので、全く暇だったというのではなかった。会議は9月10日から14日までの間、ホテル・グロリアという、リオで最も海の見晴らしが良いと言われるホテルで行なわれた。そこのバルコニーに立つと、冒頭にのべたような海の景色が、紫色にけむったようになって、目にとび込んでくるのであった。

CIPSHというのは、FILLMのような国際学会連合が13集まってできているもので、2年ごとに総会を開くが、その実質的な仕事は、種々の学術団体の財政面に関する議事を行うことであり、今度も1975—76年の2年間に開かれる哲学人文科学関係の国際学会に対する補助金額を決定した。平均して言うと、一つの国際会議に7,000米ドルが割当てられるのが通例であり、その他小規模の国際的シンポジウムなどにも、それ相当の援助がなされるので、各メンバーの学会連合が出してきた予算の査定も行なう。これにはユネスコ側からの補助金が大きな比重を占めていて、CIPSHの会長は、ユネスコ総会にも出席することになっている。

さて、そういうやや散文的とも思われる仕事のほかに、CIPSHの活動を盛んにするため、当然、傘下の各

組織の地域的な拡がりを促進することが大切となり、私のように東洋からきた者が発言の機会を与えられる。またアフリカの台頭も目立ってきて、私自身が会長をしているFILLM(現在は15の国際学会の連合体)にも、アフリカ近代語協会というものを設立して、メンバーに加えようとする機運が出てきている。ただアフリカの現状では、まだ学会というものが十分に組織されていないので、今後かなりの曲折を経なければならないような気がする。

FILLMの代表の一人として、現地ブラジルの大学教授にも一人出席してもらったが、もう一人チリから来る学者が私の横の席に座るはずだったのに、会議の初日に顔を見せなかった。翌日朝の会議が始まる前に、ブラジルの教授が大見出しのある写真入りの新聞をもってきて、チリでクーデタがあり、首相が自殺したと書いてあるが、本当は殺されたのかもしれない、と言う。チリから来る人は、国境が閉鎖されたので出国できなくなったのだらう、とのことであった。それにしても、近隣の国がそんなに騒いでいるのにここは何と静かなんだろう、平和すぎるのではないかと私は思った。

その前の晩に気づいたことだったが、深夜になってもホテルの下の方で笑いさざめく人声がするので、窓をあけて見おろすと、内庭のプールのそばで人が集まって何かやっていた。のんきな連中だと思って、こちらはそのまま眠ってしまったが、以後毎晩それがつづくようなので、ある夜、プールまで行ってみると、dog showをやっているのがあった。しかつめらしい顔をした審査員の前へ、犬をひっぱった婦人が代る代る出てくる。犬たちは外套を身にまとったように、きれいに刈り込んだ毛並を見せて、愛嬌をふりまく。審査員の前へくると両足で立ったりする犬もある。私の見ていた間では、いちばん愛嬌のあるのが入賞。カメラマンのレンズが、犬にポーズをとらせて得意顔の持主に向けられた。

プールわきに、主催者の団体名らしい頭文字の入った円い楕のようなものが二つおいてあった。一つにはBKCとあり、他にはFCIとあった。近づいてよく見ると、

前者には Brasil Kennel Club founded 1922とあり、後者は Fédération Cynologique Internationale のことで、BKC は FCI に affiliate していると記してあった。なるほど、下でも上でも連日、Fédération Internationals の会が行なわれているわい、と私はおかしくなった。犬の品評会でも、学会の予算会議でも、けっきょくは show みたいなのか。

ともあれ、平和であることはいいことだ。しかしブラジルでは、軍部が勢力をにぎっているという。私とその数日前サン・パウロにいたときに聞いたことだが、道路などをどんどん拡張し、住民に立ち退きを命ずることなどよくあるそうだが、皆文句も言わず、すぐ出てゆくそうだ。ゴネて居坐ろうとでもしようものなら、たちまち機関銃隊が出動してくるという。少し大げさな話だが、そういう傾向はたしかにあるようだ。発展途上国というのは、だれか大声で号令をかける人が必要なのかもしれない。それにしても、南米で唯一の左よりの民主主義国家であったチリが、軍部の圧力に屈したことは、手ばなしで喜べることでないだろう。

ブラジルは、何といっても未知数の国だ。最近も幅200メートルのアマゾン支流が見つかったと聞いた。今まで航空機からは見えなかったが、ジャングルの中にかくれていたのだそう。今朝のテレビのニュースによると、日本はブラジルと共同して大バブル工場をブラジルに作るという。そのために先ず植林をするのだそうだが、紙不足が深刻になってきている今日、明るい希望をもたせてくれる。ブラジルは鉱石の埋蔵量でも計り知れぬものがあるらしい。日本人の経済進出は、かれらにとっても脅威にちがいないだろうが、この広大な国土は無限の可能性を秘めているのだ。

ところで、ちょっと面白く思ったのは、ある日の午後、リオ市内の観光バスにのったときのことであった。各国の領事館が立っている地域を走りながら、ガイド嬢のする説明がふるっていた。ドイツの領事館のことを彼女は Volkswagen Consulate、イタリアのは Spaghetti Consulate と呼んだ。日本のは何と言うかと思っていたら Toyota Consulate と冗談めかして言った。このバスに一人の日本人の青年がのっていた。話してみると、ブラジルの会社の注文を受けて、播磨造船所で造った10万トンのタンカーに30人位のブラジル人の船員をのせ、リオまで2か月かかって運んできたのだという。彼ともう一人の日本人が、機械の操作を教えながら同乗してきた。その仲間が前日に帰国したあと、彼だけ数日間のひまをもらって、リオを見物しているとのことであった。

彼はタンカーでリオへ来る途中、イランで満載した石

油をチリのサンチャゴでおろし、リオの港へきて盛大な受け渡し式をやったばかりだと言う。日本食をたべたいという彼に、私は自分の新しい知識で、コパカバーナ海岸のはずれに赤坂という店のあることを教えた。私はその日本料理のレストランへ一度行ったのだが、とても豪華な店であった。そこで中年の日本人客と出会って、話したことを、今思い出すままに書いておく。その人は、リオがのんびりした街なので、すっかり気に入って、この間まで勤めていた会社をやめ、自分で独立してささやかな仕事を始めた。そして余生をここで送る決心がついたのだ、と言った。現在リオにはサン・パウロのようにおびたしい数の日本人はいない。一般にリオの人はサン・パウロの人とは気が合わない。かれらはリオの住民をデレデレしていると批評する。たしかにそういう面もあるかもしれないが、リオの人たちは余りあくせくしない。自分は時々日本へ帰って見たが、だれもかれもイライラした顔つきをしているので、リオの方が好きになった。けれど最近では日本人旅行者がふえて、買占めなどをするために、当地の宝石類の値段をつり上げてしまったのは、日本人だという説がある、などと彼は語った。

私はついでに、有名なリオのカーニバルのことを聞いてみた。あれは日本の阿波おどりを大規模にしたものだ、と彼は言い、3月ごろ、当地の夏の盛りに行なわれ、1グループ2,000人から3,000人のもあり、おどりながら街をねり歩く。やはり審査があって、優秀なグループには、米貨にして何千ドルにもなる賞金が出るが、一人あたりにすると大したことはない。街中大さわぎで、銀行や会社はもちろん休みで、ホテルなどもよほど早く予約しなければ部屋がとれぬ、などと彼は言った。

ところで、私はさっきの観光バスで市内のいろんな場所へ行ったのだが、その中でも、貧民の部落がそのルートに入れられていたのにはおどろいた。私はペルーの首都リマでも同じような光景を見たのだが、街はずれの丘の上に、貧民の小屋が点在している。頂上へゆくほど貧乏らしい。われわれなら、見晴らしのよい一等地と思うようなところに、粗末な小屋がへばりついている。以前、こういうリオの高台の風景を見た覚えがあるので考えていたら、それはカーニバルのリオを舞台とした映画「黒いオルフェ」であることを思い出した。私は74日間にわたる世界一周の旅を終えて9月半ばすぎに帰国したのだが、その数日後、ある晩テレビを見ていたら、その「黒いオルフェ」の場面がスクリーンにあらわれたのでびっくりした。そして私はあの紫にかすんでいたリオの特異な海岸線を思い起こしたのであった。

(東京教育大学教授)

国際的視野と「帰属意識」

YAMAOKA SEIJI

山岡清二

国際的視野でものを考えることの必要性がわが国で強調され始めてから久しいが、その“実効”が上がったという話はあまり聞かない。むしろ近年は“ugly Japanese”だの“economic animal”だのといった非国際的“実績”だけが、いたずらに目立つ。第一、「国際的視野」という概念自体、きわめてあいまいで、外国語をペラペラしゃべることぐらいにしか、一般には理解されていないのではなかろうか。

筆者にこの概念のはっきりした定義づけができるわけではないが、その一断面と思える identity の問題を取り上げて、外国人、とくにアメリカ人との関わり合いについて考えてみたい。

日本人の行動様式をアメリカ人のそれと比較するとき、最も強い印象を残す相違点の一つは、日本人が通常なんらかの帰属意識を背負っていて、相手を自分との“優劣関係”において把握するのに対し、アメリカ人にはそれがまず見られないことだろう。New York Times の極東移動特派員だった Drew Middleton は数年前、「日本人の対人関係は必ず身分の上下を前提とするため、西洋でいう partnership の実行は不可能に近い」として、日本の対米従属外交の“体質的原因”を論じたことがあった。

初対面の相手と名刺を交換し、そこに書いてある肩書きしだいではことば使いを選ぶ——というのは、われわれの日常茶飯事である。筆者自身、「Washington Post 記者」という肩書きをなくしてからわずかな期間に、肩書きのない名刺のため、相手を困惑させてしまう事態に何度出くわしたかわからない。名刺交換は“この人は(自分に比べて)どのくらいの(地位、身分、富裕度など)人なのか”を即座に見定めて、それ以後の会話、交渉、紹介その他の手続きを、円滑に進めるための、実に日本的な手段だともいえるだろう。

こうした日本人の対人関係にまつわる独特のクセは、外国人と接する場合にも抜け切らないことが多い。“外人慣れ”していない人だと、相手が白人ならへり下って見せ、有色人種には尊大になるといった態度が出てしま

いがちで、日本人の人種偏見をうんぬんされる原因にもなる。外国人との接触でも、われわれは相手をまず“外人”と規定してかからないと、安心できないところがある。そしてそれが例えばアメリカ人なら、“日本人より優れた”国に属する人、開発途上国の人だと“劣った”民族といった先入観で割り切ってしまう傾向がないとはいえない。つまり日本人の民族的 inferiority, superiority complex である。

これが日常的なレベルで現れるのが、外国人に“手加減”するという、平均的日本人の“特性”だと思われる。ガイジンが日本語をしゃべると、必ずといってよいほど日本人のだれかがクスクス笑う。道に迷っているのが(日本人でなく)ガイジンなら、聞かれもしないのに“May I help you?”と近づいてくる日本人がいる。そうかといって“ガイジンはガイジンだから”自分たちの本当の inner circle に、「仲間として」受け入れることは決してしない(この点は、長年日本に住んでいる多くの外国人が、異口同音に証言する悩みだ)。これら外国人を“手加減”する習慣の例は、おそらく数えきれないだろう。

国際的視野に立った国際人の要件を、日本人が十分に備えていないとする議論には、多種多様なものがあり、極端な場合、日本人の身体的特徴を“西洋人より劣等、醜悪”と決めつける自虐的な日本人論さえある。それらを個々に見ていくのは小稿の趣旨ではないが、ひとつだけ、上に述べた外国人を手加減する習慣が国際的視野の開拓にきわめて有害であることを、銘記しておきたい。

× × ×

さて、日本人になんらかの帰属意識が非常に強いことは、すでに見たとおりだが、筆者はこれを identity という英単語に結びつけて考えている。Identity の概念は本来、きわめて“非日本的”なもので、そのものズバリの訳語はない。「自分が何者であるか」の問いかけが、この概念の中核をなしているのだが、内向的な“自己探

究”ともニ＝アンスが違ふ。

しかしここでは仮りに identity を「帰属意識」という日本語に置き替えて、国際的視野との関わり合いを考えてみることにした。少なくとも帰属意識として捉えることのできる部分が、identity の中にあると思われるからだ。

“仲間うち”だけで固まる傾向は、海外に出た日本人にとくに著しいとして、“Japanese groupism”などと言われるのだが、こうした行動の根底に“日本人意識”が働いていることは疑う余地がない。問題はその意識の現れ方が、国際的には“奇異”に映るということだろう。

ではその種の日本人意識は、国際的視野の拡大にとってマイナス要因なのであろうか？

国際的視野、国際人、国際化、国際主義……といったいわば積極的な響きを持つことばも、考えてみれば、まことに内容のあいまいな表現でつかみどころがないのだが、それでも「二国以上の複数国（民）間の関係」という概念が、その前提になっていることは明らかである。言い換えれば“無国籍（者）”を初めから除外した考え方である。

何か国語も使いこなせて、世界各国を股にかけて歩き回るが、その動機が私利私欲のために国籍は問題にならない——といった、いわば「ジャッカル」のような人物は、ここでいう国際主義とは無縁の存在なのだ（たとえ彼の仕事が殺し屋でなく、合法的な職業であっても）。

われわれ日本人は第二次大戦に敗れていらい、ごく近年まで自分たちの「国」をあまり意識しないで生きてきたが、“経済大国”となっていやでも海外に出てゆく機会が多くなると、こんどはやたらに自らの“日本人性”が気になり始めた。しかし日本人の特殊性を“痛感”しているばかりでは、一步も前に進めない。世界に住んでいる無数の民族は、多かれ少なかれ、いずれも特殊性を持っているのであり、“他人と違う”ことに恐れをなしていたのでは、国際的視野はおろか、“島国根性”だけが発達するほかないだろう。

つまりたがいに「違う」国（者）同士の間でこそ、初めて国際主義は成り立つのである。ここで「違う」ことの裏づけとなるのが、帰属意識（identity）なのだが、これが意外に等閑視されているところに、一つの問題点がありそうだ。

× × ×

日本人の“同族意識”とは具体的な現れ方が違うにしても、ふつうの外国人ならおそらく相当顕著な帰属意識を持っているのが当然と見て、まず大きな誤りはない。

ことに自分と国籍や皮膚の色の違う人を相手にするとき、一種の“愛国心”が表面に出てくるのは、日本人と大差のない傾向である。

アメリカ人の場合、American way of life や democracy に対する信仰のようなものがあるため（ニクソン政権の権威失墜で、最近はずしも顕在化していないが）、それを他国（民）に“善意で押しつける”習性がある。対外 commitment を無制限に拡大して、軍事的にも経済的にも米国の力が激減した背景に、このお人好しいな“アメリカ第一主義”が作用したところは、決して小さくないだろう。

次に、これとは少し質の異なる例だが、現在東京には100人余りの常駐外国人特派員がいて、急激に“大國化”する日本を世界に報道している。しかしその大多数は一人で取材するだけの語学（日本語）力を持っていない。けれども米国をはじめ大部分の国の報道機関は、出先の東京支局を日本人に管理させることは、絶対にしない。本国の国籍を持っていないければ、ニュース報道の責任者には登用しないのである。このことは、日本の mass media が海外に出している支局でもまったく同様である。

ことの良し悪しはともかくとして、現在の journalism には「ニュースに国籍がある」という“定理”が、全世界を通じて生きている。取材能力や原稿作成技術がどんなに優れていても、その記者が賃金をもらう新聞なり放送局と同じ国籍を持っていないければ、full-fledged employee とは見なされないのが現実だ。

もうひとつ例を挙げれば、いま最大の国際問題の一つとなっている、石油資源をめぐる紛争である。産油国と石油消費国のかけひき、消費国同士の抗争の中には、“無色の”国際主義などひとかけらもない。すべて“国益”が優先していて、将来の見通しも決して明るくないが、もし本来の国際主義が現実のものになるとすれば、狭い nationalism を超越した「世界全人類の福祉」を前提とする、石油資源の公正な配分、そして石油以後の energy 源開発を多国的に進めることでしかないだろう。

× × ×

帰属意識は原始的な段階でまずエゴの形をとるが、それをそのまま放置しておくとも人類の明日が保証されないくらい、今日の国際社会は緊密化している。しかし自らの「存在基盤」（これも“identity”の重要な内容）を忘れてしまうと、たちまち“国際化”の波に呑み込まれてしまう。

(p.42 へつづく)

鼎 談 日本文化の国際性



国際交流プロジェクトにおける問題点

國弘 本日は「日本文化の国際性」というたいへん大きな題を与えられたわけですが、最初に日本文化というもの、文化ということばを広い意味で解釈するか、それとも狭義に解釈するかという問題があると思うのです。狭い意味で文化といいますとたとえば、茶の湯、純文学といったような higher culture に限定されると思うのです。他方、文化人類学や行動科学という文化、culture というのはもう少し広い意味で使われています。たとえば政治であるとか経済であるとか、そういったような分野、あるいは大衆芸術、民衆芸術といったようなものも文化の中に含まれるわけです。このディスカッションの目的としては、むしろ広義に解釈した方がいいのではないかと気がいたします。と申しますのは、あとでご自身からご紹介、ご説明をいただきたいと思いますが、山本さんは広い意味の文化交流の仕事をたいへん積極的に果敢にやってこられたという事情がありますし、また Butler 先生は『平家物語』で学位論文を書かれた、その意味においては狭義の日本文化の専門家でもいらっしゃるわけですが、今日では日本語教育というようなことを高度の政治、経済、あるいはさまざまな分野の日本専門家を対象にやっておられる。したがって狭義の日本文化のご出身ですが、いまやっておられるお仕事は必ずしも狭義の日本文化ということにこだわってはおられない。そういう意味でむしろ文化ということばを広範囲にとらえた方がいいのではないかと、これが第一点であります。

第二点は国際性ということばの意味ですが、いかにように定義をするにもせよ日本の文化というものが果たして国際通貨として通用し得るかどうかという意味の国際性という問題も一つあると思うのです。しかしそういう意味にとらえないで、むしろ広い意味における日本

國 弘 正 雄 国際商科大学教授
Kenneth D. Butler 日本研究センター所長
山 本 正 日本国際交流センター代表理事

文化が国際的にどのように理解をされ、あるいはどのようにわれわれの立場からいえば紹介をされ、そして広い意味での日本を理解してもらうためにはどのような仕事が必要とされなければならないか、あるいはそのためにはどのような組織なり心構えなり、人材なりが求められるであろうか。一応そういう意味で国際性ということばを考えてみたいと思います。

そこでまず山本さんから、いままでさまざまな国際交流の仕事をしてこられたわけですが、そのご体験、どういうことをどういう形でやってこられたかということをご簡単にご紹介をいただいて、そのお仕事の過程でどういう点を痛感されたか、ご感想などをお述べいただきたいと思います。

山本 ありがとうございます。私、日ごろ国際交流あるいは文化交流の裏方の仕事をしている者でありますから、こういう形でお話をするというのは決して得手ではないのですが、國弘先生が言われたとおり私の実際の経験についてお話し申し上げて多少なりとも参考にしていただければと思います。

私のやっている仕事は広い意味での文化交流ともいえると思うのですが、私は、文化ということばが比較的狭義にとられやすいので、一般的に国際交流プログラムをやっております、というふうに自分を紹介するわけです。私自身の団体、日本国際交流センターのやっております仕事の内容は簡単に申し上げますと、完全な民間ベースで、日本の、特に opinion leader の方々と海外の opinion leader の方々との対話をいろいろな形で推進するということです。これはいろいろな形をとるわけですが、たとえば下田会議とよくいわれております日米関係民間会議、あるいは日米議員交流プログラム、あるいは私どももいま事務局をやっている日米吹、3地域の民間リーダーによる会議、こういったようなものを通して対話をはかったり、あるいは教育者の交流プロジェクトを先生方の中でも相当リーダー格の方々のご協力を得

てやっているわけです。そのほかに出版物といたしまして、英字の機関誌の *The Japan Interpreter* なるものを出版したり、あるいは海外の教育事情について日本の先生方にご参考いただくための『国際教育』という雑誌を出している。あるいは米国における日本についてのいろいろの新聞の comment を日本のリーダーの方々にご紹介するための『U.S. モニター』こういったような出版物も出しているわけでございます。

私ども意図しておりますのは國弘先生がすでに多少触れられたのですけれども、日本というものが非常に外国の方々に理解されにくい。また同時に日本人が積極的に自分たちについて説明もしないし、またやろうとしてもできない。こういったものを放置していると日本という国がますます国際社会の中で取り残される傾向がどうしても出てしまう。ところが経済的には日本は大国になっているわけであって、好むと好まざるとにかかわらず日本は国際社会の中に出ていかざるを得ない。こういった2つの流れの中でおこり得ることは、国際社会の中で日本がうまく身を処していくことができない、あるいはいらざる摩擦をおこしていく、そういう危険性があるのではないかと思うわけです。私どもの仕事というものは、そういう望ましくないことがおこらないように多少とも日本を海外の方によりよく理解していただいたり、あるいは日本が国際社会の中でより健全な member として、ことばはちょっと問題があるかもしれませんが、full member として活動していけるような方向にもっていくためのささやかなる活動であるわけであります。

そこで、そういった仕事をやりながら感じるいくつかの問題点を申し上げて、これが場合によってはこのディスカッションの一つのたたきだいにもなるのではないかと思うわけですが、私どもプロジェクトをやるときにやはり一番感じるのは、どうしても言語の問題なのです。ことばの問題、これは國弘先生ご専門の問題ですけれども、たとえばいまやっている私どものプロジェクトは、日本、アメリカ、ヨーロッパの3地域の仕事ですけれども、この公用語は英語になるわけです。そうしますと、3地域でいろんな方が論文を書くとき、日本の論文は英語に訳さなくてはいけないし、海外の方の書かれた論文は日本語に訳さなければならぬのですが、日本の member で、ほんとうに英語をこなせる方はそうたくさんはいらっしゃらない。読めたとしてもものすごく時間がかかるからやはり日本語にしてくれというような希望が出てくる。そういったものを訳すためには、もちろん非常にいい訳でないといけないし、時間がかかるし、またコス

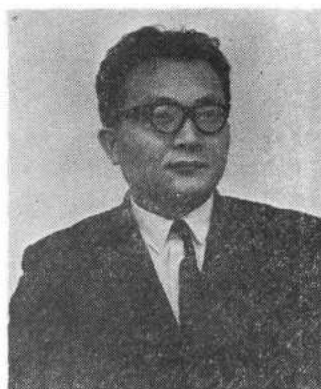
トもかかるわけです。非常に能力のある方をもってしてもなかなかほんとうにもとの論文にあるニュアンスをそのまま伝えるという訳は出てこない。こういう問題があるわけです。

実際会議の場合になりますとこの問題はより大きくなっ

て、國弘先生は同時通訳を前にやっておられたのでご理解なさっていると思うのですけれども、やはり同時通訳とかあるいは逐次通訳にしても、ほんとうの意味での心の通いというか、ほんとうに正確に意思が疎通するということはどうしてもできにくい。ここにまた問題が出てくる。さらにことばの問題は全く除いても、そういった交流プロジェクトに参加していただけるような talent、何といったらいいか、役者、そういう日本人が少ない。役者不足ということですね。やはりどうしても層が薄いわけです。どんなプロジェクトをやるにしても、私どもこういった方に参加していただいたらいいか大変に困るわけです。これは言語の問題ではなくて、繰り返して申し上げますけれども、海外の方とお話し合いなさったときに、海外の方がわかるような形で話ができるかどうかとか、あるいは海外の方のおっしゃることがよく理解できるかどうか、たとえば、海外の方に話がよくわかっていただけるというような方は、やはり海外の方がこういう考え方をしているから、こういう言い方をすればよくわかっていただけるということを心得ている方ではない、そういった問題が出てくる。

それから3つ目の問題点として、こういうプロジェクトをやる場合、日本におけるどのような組織をとっても、こういった国際的に活動するようなプロジェクトのできる団体というのが非常に少ない。日本では相当りっぱな団体であっても、早い話が英語のできる方、英語をりゅうちょうに話せる方、あるいは英語で手紙が書ける方がいないし、英語のタイピストを持っている団体というのが非常に限られている。速記者に至ってはほとんどゼロに近いんじゃないですか、日本のいわゆる著名な団体でも、その組織の問題ですね。

それからもう一つは、これは私どものやっているような仕事に入ってくるわけですから、こういったプロ



國弘 正雄



Kenneth D. Butler

ができるのではなからうか、と、これは相当の経験が必要です。そういった相当きめのこまかい配慮ができるような人たちがまだいない。

それからもう一つは、日本紹介プログラムの場合に当てはまるわけですが、たまたま私もいまアメリカのビジネスマンの方々に日本文化の紹介をするプログラムをやっている最中なのですけれども、やはり日本の文化、古来から現在に至るまでの文化をバランスを持った形で紹介するというシステムというか、program pattern というのでしょうか、がまだ十分準備されていない。で、往々にして日本文化紹介になるとどうしても禅とかお花とかお茶といったものが道具に出てしまう。ほんとうの意味でのバランスのとれた総合的な日本の紹介の仕方が十分研究されてない。國弘先生も関係されている東方学院、あるいは国際文化研究所ですか、村上兵衛さんがやってらっしゃる、私どもも微々としたものでやってるんですけども、やはりこういった団体がこれからますます出てきてそういったプログラムをつくっていく。そのためには当然先ほどの一番最初の言語の問題に戻って、その紹介のための書物等が充分整備されないといけないわけですが、一応それはおいたとしても、とにかくいろんな違った海外の方々に、いろんな違った紹介の仕方があると思うのです。たとえばビジネスマンのためにはこういったプログラムがいる、あるいは学生さんのためにはこういうものがある。あるいは向こうの特別の interest によってもプログラムの書き方が違うのではないのでしょうか。

そして一番大きな問題だと思うのは、やはりこういったものが民間ベースで行なわれないうちになかなかうまくいかないのではないのかということなのです。これは決して官僚が悪いとか何とかというのではなく、やはりこういったプログラムというものがきめのこまかさを要求され

プロジェクトをやるときに、やはりピットとあてはまるようなプロジェクトを組んで、それで実行するといったような、プログラムを書く人たちがいないわけです。このプログラムを書くためには、やはり両方の文化がわかっていてこういうふうにすればお互いの対話

るだけに、いわゆる官庁ベースという形ではなかなかうまく行なわれないうちにおもう。それと同時に実は一番大きな問題になるわけですが、こういったプログラムを効果的に行なうような財政的な裏づけが日本の場合甚だ少ない。現在、こういったプログラムをやるためのわずかの資金を捻出するためにいろんな会社をまわって金を集めなくては行けないという状況でありまして、やはりそういった資金的な裏づけをもって充分なスタッフを養っていった、communications infrastructures と申しましょうか、communication のための下部構造、こういうものをつくる努力が行なわれていかない限り、なかなか日本の社会、日本の文化というものを海外に紹介することはできないのではないかと。あるいは日本人と海外の方々との付き合いを増進させるようなプログラムはなかなかできないのではないかと、とこういうように考えているわけです。

何を海外に紹介すべきか

國弘 山本さんがいま非常に重要な問題点を全部あげて下さったと思うのです。その問題点に入る前に、冒頭おっしゃった点、つまり日本というのはなかなか外の人たちに充分理解されにくいのだという点。それからもう一つ、日本の特異性のようなものを外に向かって説明したり、解説したりする、あるいはできる人が非常に少ない。もしこのような事態をそのままに放置しておくとしたら、日本は遠からず国際社会の中で取り残されてしまうだろうという、非常に重大な指摘があったわけです。そのご指摘にまず関連して Butler 先生、外国人として、しかし日本のことを裏も表もよくご存じの一人としてどうお考えになるか、とりあえずその問題についてのご意見を承りたいと思います。

Butler まずその前に文化ということばをもう一度考えなければならぬと思うのです。特に日本の場合に文化というと、先ほど山本さんがおっしゃったようなお茶とかお花とか禅とかになってしまっても、実際に特色のある文化そのものよりも、文明とか、あるいは社会制度とか、そういう方面を海外に紹介しなければならないと思います。もちろんそれを世界中に理解してもらうにはいろいろ問題があるし、いろいろ方法もあると思いますが、いつも中心になっているのはやはりことばだと思うのです。そしてそのことばの利用の仕方とか、あるいはことばが文化の理解のためにどういう役割りを果たすとか、いろいろ考えられると思うのですが、いま一番必要なのは、国と国との間に立って、お互いに自分の

国民に相手の国のことを説明することができる人、それと自分の国のことを外国人に説明できるような人が非常に必要になったと思うのです。うちの日本研究センター、正式な名前はアメリカ・カナダ11大学連合日本研究センターですが、アメリカとカナダ、それにヨーロッパの学生もときどき来ます。この場合向こうで最低2年間大学で日本のことと日本語を勉強してから日本に来て、1年間うちのセンターで上級日本語コースと、広い意味で日本文化の紹介と、日本の国がどのような国か、自分の目でわかるためにできているプログラムに参加するのですが、歴史専攻の学生とか、日本文学専攻の学生とか、あるいは経済専攻とか、人類学専攻とか、いろいろ専攻があるわけですし、古代をやっている学生もいるし、現代をやっている学生もいる。

けれども、いくら専門がいわゆる学問的なものであっても、これから将来日本の専門家として活躍するためには、充分に日本人と communication ができないとだめだという原則に立ってやっているわけです。すでに彼等は日本の歴史とか文学とか、狭い意味でも広い意味でも日本の文化を大学で勉強したことがあるのですが、やはり日本人の心理とか国民性とか、実際に現在、日本は国として何を、どうやっているかとか、そういう方面を教えるのが一番大事だと思う。そして特にいま日本がこのようにいろんな方面で発達してきていますから、やはりいま日本人がやっていることがある程度わからないと、いくら古代を勉強しても間違った結果が出るのではないかと思います。つまり日本研究センターの目的は、アメリカあるいは西洋の国の学生が、将来自分の国と日本との間に立って自分の国を日本に、日本のことを自分の国の人に説明することができるような専門家をつくることです。

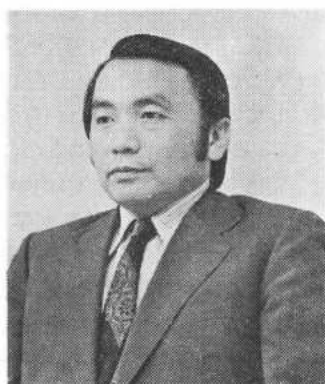
しかし、いまもうちょっと広い意味で文化あるいは文化交流、文化理解とか、それを考えてみると、10年ほど前は文化交流はやはり「フジヤマ」、「ゲイシャ」、「サクラ」、というような面に限られていました。そしてそれを見るには人はだいぶ苦労したわけです。10何年前まではジェット機もなかったし、日本に来るにはだいぶお金がかかったし、遠い国だと外国の人は思っていたと思うのです。しかしそういう時代は過ぎ去ったか、あるいは過ぎ去りつつあると思うのです。とにかくだれでも行きたい気さえあれば行けるような状態になった。そして自分の目で富士山とか芸者、桜…公害もあるんですが、(笑い)とにかく見れるのです。そして、「百聞は一見にしかず」で、「一見」だけである程度わかるのですけれども、それは非常に表面的、あるいは非常に独特な文化

だと思うのです。そして実際の日本の文化、あるいは日本の文明をわかるには、やはりもうちょっと深くやらないとだめだと思う。そしてそのためには、国と国との間の opinion leader とか指導者とか、あるいは一般ビジネスマンとか、何か実際に関係ある人たちの間にその理解を深めなければならない。

それをやるにはもちろんことばも非常に大事だし、それと同程度大事な仕事としては、専門的にそれが arrange できるような組織をつくることだと思います。そしていま日本が国際的な場に出るには何か問題があるとか、何か物足りないような感じが日本の国民の中にもあると思うのですが、一つは先ほど山本さんがおっしゃったように、アメリカの場合はフォード財団のような民間の組織があって、ずいぶん役に立つようになってます。日本ではいま政府が一生懸命文化交流などをやろうとしているのですが、まだ民間にそれがどうして必要か、それをやるためには何が必要か、というような理解が充分ではないのではないかと思います。

■ 國弘 そこで Butler 先生について伺って、提案することなんですが、やはり日本というのは外から見た場合に非常に理解しにくい存在だとお考えですか。また日本には日本を外に向かって説明し紹介するための人材、組織、あるいは資金の面にしても非常に不足しているというふうに思われますか。

Butler 先ず一つの具体的な例を申し上げます。以前 Yale 大学で、英訳された日本文学を1年間のコースで一般学生に教えた時の事です。まだ教えた経験がほとんどなかったし、どうやってやったらいいかずいぶん心配して、最初考えたことは、やはり古典の方が非常にむずかしい、だから古典の方を一生懸命教えた方がいいと考えて、『万葉集』とか『源氏物語』とか、その方面からやったところ、案外学生がすぐわかってくれたのです。それでその時はぼくの教え方がうまいと思ったけれども、今になって、そうでないことがわかったのです。というのは、学生はちょうど江戸時代まではわりと理解できた。けれども現代文学に入ったときにだんだん理解が落ちたのです。



山本 正

それはどういうことを意味するか。まあ学生ともいろいろ話をしたら、やはり現代小説を完全にわかるために日本人の心理と、現代日本人が何をやっているか、何を問題にしているか、それがわからないととても日本の現代小説がわからないということなのです。しかし古典の方は学生は少なくとも high school 時代から Shakespeare も勉強し、ギリシアの古典、哲学も勉強するのですから、慣れてるんです。だからまだ日本のことを勉強したことがなくても、少し苦勞すれば『源氏物語』など大体のことがわかる。しかし生きている人の文化になるともっともっとむずかしくなる。それが一つの具体的な例だと思いうのですが、一般的にも同じことがいえるのではないかと思います。

日本の茶の湯とか、禪とか、禪について数百冊の英語で書いた本もあるし、ドイツ語で書いた本もあるので、だれでもひととおりのわかることができると思うのです。しかし日本のサラリーマン制度とか、日本の結婚制度とか、家族制度、それをわかるには、あるいは一度自分がわかったと思ったときに、この特殊な家族制度がすでに変わってしまったのですから、その変わり方も理解しないとほんとうの日本がわからない。そういうようなことが問題じゃないかと思います。

國弘 いま Butler 先生がおっしゃった点、つまり古典の方がむしろわかりやすい。現代になるほどかえってわかりにくいのだということは、伺って実はびっくりしたんです。実はそういうことは考えてもみなかったものですから、いまでご発言伺ってたいへん勉強させられたという気がいたします。それにつけても思い出すのは、さっき山本さんが現代と過去とをうまく結びつけるような形で、これを外国人にわかるような term で紹介解説することのできる人材が非常に不足している、そこに問題があるのだということをおっしゃいましたがその点が非常によくわかったわけです。

それについて私自身の個人的な経験を申し上げますと、最近私外国人の各界各層の人に話をする機会が非常に多いのですけれども、彼らがほとんど異口同音に私に尋ねる一つの質問があるのです。それはこういうことなんです。日本人というのは伝統的に自然愛好家であった。ところが日本へ来てみると見るもむざんなまでに自然が破壊され、環境が汚染されている。かつての自然愛好家の日本人はどこへ行ってしまったのだ。一体自然愛好家としての日本人と環境破壊者としての現代の日本人とどこでどのように結びつけるのか。どうやって説明してくれるんだ。そういう種類の発言ないしは質問にぶつかることが非常に多いのです。

それにつけてもいま Butler さんがおっしゃり、またさっき山本さんがおっしゃった現代と過去とどううまく結びつけて、そしてバランスのとれた全き形で日本というものを外に向かって紹介するか、これは並み並みならない作業だと思うのです。ただそこで一つ問題になるのは、一体外国人が日本の何を知りたいがっているのか、日本のどういう側面を知りたいと思っているのでしょうか。

山本 やはりほんとうにまじめな、あるいは相当知的水準が高い方々の興味というのは「じゃあこれから日本はどこへ行くのだ」ということじゃないかと思います。結局その中では、いわゆる彼らの思っていた「古き善き日本」というものがどういう形で残されていくのか。あるいは日本は完全に西洋化あるいはアメリカ化してしまうのか。それからもう少し政治意識のある人は、ではそういった日本というものはこの国際社会の中でどういう形で生きていくのだ。いわゆる軍律強国にもう一ぺんなるのか。いままでのいわゆる経済成長の行き方でいきますと、一体原材料をどこから持ってくるのか、といったような具体的な問題になってくるわけです。私はやはり日本の将来、日本はどこに行くのか、というのが一番知りたいことじゃないかと思います。

Exotic Japan

Butler いままでのお話の中にずいぶん真剣に考えなければならぬ意見がたくさんあると思います。一つは外国人の日本に対する image が exotic だといわれていますが、なぜそういうようになっているかということを考えなければいけないと思う。そしてよく考えてみると、日本のことを外国人に説明することを専門的にやっている日本人が出てきたのはつい最近のことですから、そしてつい最近まで、外国人が日本にやってきて、あるいは日本人が外国へ行って、日本の文化という話が出てきたら、専門家ではないために、どうしても禪とか茶の湯とかがすぐ出てくる。

しかし実際に外国人が何を知りたいかということを考えると、全体的な一番広い意味の日本の文化を知りたいがっているのです。もちろんその中に日本の古典の伝統的なこともあるし、現代的なこともある。けれども、実際に日本のことを全然知らない人に短い間に能率的に説明ができる人は、日本人だけではなくて世の中にほとんどいないことはきまっていますのですから、問題はそこから出るのではないかと思います。

それからさっき環境破壊とか短い間に変化が多かったということですが、考えてみると、アメリカでも

ヨーロッパの国々でも同じように公害の問題が出てきているんですね。けれどもそれもこの100年で、100年前はアメリカは西部の開拓時代がちょうど終わったところから、そして、同じ100年の間にアメリカでもずいぶん変化が激しかったといえるのではないかと思います。しかし、ただ日本は全然世の中に知られていなかったし、ずいぶん長い伝統もあるし、そして短い間に一度に変化が起ったので、外国人にそれを説明するにもずいぶん苦労が多いし、問題があると思うのです。

國弘 そこでちょっと言わしていただきたいのですが、まず山本さんがさっきおっしゃったように、日本の将来について懸念というか、憂いのようなものが外国人の人たちにたくさんあるということは事実だと思うのです。これは非常に重要なポイントをおあげになったと思うのです。それから日本に対する exoticism の問題ですけれども、確かに Butler 先生がおっしゃったように、とかく日本のことについての専門家でない日本人が外国人に対した場合は、すぐ「フジヤマ」、「ゲイシャ」、「サクラ」、あるいは茶の湯、禪ということでお茶を濁そうとしたということは、これは事実だと思うのです。ただ、同時にここで反論になるのだけれども、全ての古い、彼らにとっては非常に exotic なものがさまざまなのかたちでいつまでも日本に存在することがわれわれ西洋人にとって楽しいんだというような、若干の condescension のようなものが彼らにもあったんじゃないか。つまり日本が西欧化してくれることはもうたまらん、と…。

山本 いやそれはそうです。ほんとうに、いわゆる古手の日本研究者というか、日本愛好家は、やはり現代の東京に来ると涙を流す感じだと思うのです。

國弘 感激で涙を流すんじゃないで…。

山本 感激じゃなくて、ほんとうにもういたたまれなくて…。

Butler ぼくはそれほど古手じゃないけれども、毎日涙流している。(笑い)

山本 ですからやはりいままでのアメリカにおける親日家グループは、決して見下すという意味ではないのだけれども、やはり exotic Japan でいてほしい強い願望があると思います。

Butler そういような親日派にもいろいろいると思うのですが、一つは、たとえば名前を持ち出すのも恐縮ですが、Donald Keene、彼が十何年の間に一番苦手でやりにくかったのは、日本が exotic な国ではなくて、日本文学が一流の文学で、もちろん伝統的な要素もあるけれども、文学そのものとして扱うべきだということをわかってもらうことでした。そして彼が最初 Columbia 大

学で日本文学を教えようとしたときに、日本に文学があるかと、一流の文学者に聞かれたことが何回もあったそうです。それは親日派の責任ではないと思うんですが、日本のことを扱っているか、あるいは日本について興味のある人達は初めて日本に来て自分の目で初めて日本のことを見ると、いろいろ自分のいままで経験したことがないことを経験するので非常におもしろ味を感じるわけです。

國弘 Butler さんが日本に来られて、そして住んでみてこんなことがあるとは、とびっくりしたということなどはたとえばなんですか。

Butler 最初日本に来たのは海軍に入ったときです。全然日本のことは知らなかった。そのときは自分の意思で来たわけではなくて軍の命令で来たわけですね。そして最初の1週間くらいの間何も仕事をしないでぐるぐる回って日本のことを見たわけです。それまでは日本がどういう国か、日本に住んでいる人がどのような人かほとんど考えたことがなかったわけですが、こんなに非常に複雑な社会とか、あるいは伝統のあるところとか、それを最初に知った時はすごい shock でした。そして一番最初頭に入ったのは、日本には完全にできた社会があるということ。言い方がちょっとまずいかもしれないけれども、完全に動いている社会組織とか文化がある。そしていまでも自分が全然それを何も知らなかったということ。そしてもう日本にいるんだから少し調べなければならぬ、というのが出発点ですね。

ぼくの場合は最初からお寺なんか調べるより、日本人が何を考えているとか、実際にどのように生活しているとか、そしてぼくだけじゃなくだれでもそうだと思うのですが、ある人はただ日本に来てお茶とかお花を教える人だけと会って、しょうがないからこれが日本だと思って帰る。けれどもいまはだいぶ変わりつつあるんじゃないですか。

「文化的通訳者」の養成

國弘 さっき Butler さんが日本のことを、アメリカ人ならアメリカ人に説明できる、アメリカのことを逆に日本に説明できる、そういう二方交通というか、対面交通のできる人が必要であるとおっしゃいましたが、これは私のことばでいえば「文化的通訳者」、あるいは「橋渡し者」とでもいうべきものだと思うのですが、そういう人がアメリカあたり、あるいは山本さん、日本国内でいま数は少ないけれども着実に育っていると思われませんか。

山本 私は非常にゆっくりではあるけれども育ちつつあるんじゃないかと思うんです。しかし、ただある意味ではこの仕事をやっているときは先ほど申し上げたようないろんな問題があるから、それこそ frustration の連続であるわけですね。ところがそれだけにおもしろい仕事でもあるわけです。問題は、こういったのをおもしろいと思う人間がふえつつあるかどうかということだと思いますが、私は若い優秀な方々の中で、特に海外などに留学されていたような方々の中で、こういった仕事にものすごく興味を持っている方が相当ふえてきたと思うのです。いわゆるいままでの日本を理解させなければいけないという needs をそういった若い方たちが感じているのではないかと。単に一部の親日家のために日本を紹介するというのではなくて、特に向こうで経験されてきて、やはり日本が知られてない、これはまずいんじゃないかという実感を持った人たちがこういう仕事をやりたいというふうに感じているのではないかと私は推察するのです。そういう意味では私は経済的な条件さえ整っていけば、また時間さえあれば、そういう人間は、もちろん絶対数としては決定的に足りないという状態が相当長く続くとは思いますが、傾向としてはふえていくのではないかという感じがします。

國弘 そうすると山本さんさっき staff work の欠除が非常に大きな問題だと言われたんですが、staff work は、確かに絶対量は不足しているけれども、まあ欠落もだんだんに埋められつつある。たとえば山本さんご自身の団体にられる、私も存じ上げている何人かの若くて優秀で、しかも理想に燃えた人たちが、実際の体験を通じてだんだんと一人前になりつつある。そこに希望をつなぐことはできる、こういうことですね。

山本 そうですね。もう一つだけつけ加えさせていただきますと、いわゆる海外とのお付き合いのいろんな機構とか組織とかプロジェクトが、この数年間相当数出てきた。ところが実際始めてみると staff work が必要だということ、経済界の方にしても政界の方にしても実感として感じ始めておられるのではないかという気はしますね。ですからそこでやはりそういった staff work の必要性がより多くの方に認識され始めているのではないかと。願わくば経済的な support その他の形で、こういった下部組織の整備に協力されることをぼくは望んでいるわけです。多少我田引水になりますけれども。

Butler 私もそういうように考えています。これも世の中の激しい変化の一つの現象だと思うのですが、5年前に比べるとこういうような役割りを果たせるような人間がわりと出てきているんですね。問題は社会そのもの

が充分にそれを利用して、世界の平和とか理解を深めるために使ってくれるかどうかということだと思います。

このことと直接関係があるのがやはりことばの教育だと思うのです。日本のことを勉強する学生を例にとると、10年前の学生、たとえばぼくの場合はただ自分の専門的な研究をやるのに手いっぱいだったんですね。ぼくが初めて日本に勉強しに来たのは大学院の学生ですからわりと年も上だし、日本人と充分に接触する chance もなかったし、時間もなかったと思うのです。ところがいまうちのセンターに来ている一番若い学生は18歳くらいです。けれども平均がこのごろは21か22歳になっています。そして一番年上の人が26歳くらいです。10年前は初めて日本に来るのは25歳くらいでもわりに若いと思った。30歳くらいになってから研究しに来たんですね。そしてこれは非常に意味のあることだと思うんです。

例をいうと、これは今年の学生じゃないけれども、2、3年前に、Princeton 大学の学部で、まだ18歳でもうすでに日本語を3年間勉強したことがある学生が来ました。彼は下宿をしたのですが、その下宿には自分と同じ年の子どもさんもいて、毎日毎日付き合っていて、一緒に遊びに行ったりもしました。そして1年日本で勉強して、また Princeton 大学に戻って卒業してからもう1度日本にやってきました。そしていま、日本の広告会社に勤めている。彼の仕事は、そこにいる外人の advertiser man と日本人の advertiser man の間に立ってお互いの意志の疎通を計ることですね。そういう仕事をやっている人があるということは5年前では考えられないことだと思うのです。だからずいぶんぼくは楽観的ですが、問題が大きいだけにまだまだやるべき仕事がいっぱいあると思いますね。

国際交流と言語学習

國弘 さっき山本さんが、個人であれ、あるいは組織であれ国際的な交流というような仕事をやるためにはどうしても仲介者が必要だということをいわれましたが、当然個人なり組織なりが育つためには、いまご指摘のように資金の問題が一つ大きいのしかかってくると思うのですが、今一つ山本さんも最初におあげになり、Butler さんも繰り返しおっしゃった言語の問題があると思います。これは英語に必ずしも限ることはないで、Butler 先生のご専門の、外国語としての日本語教育というふうに引くくめていいと思うのですが、言語の問題に少し触れたいと思うのです。

ちょっと話が前後するのですが、確かにわれわれの英語教育、あるいは英語への姿勢を振り返ってみると、要するに英語を初めて身につけて英米ないし欧米の文物を日本に持ってくる。紹介する。そのための手段としての英語学習という面が非常に大きかったと思うのです。ところが逆に、その中から覚えた英語で、日本なり日本のことを、外に向かって紹介するという意気込みなり、あるいは能力なりはたいへんに不足をしていた。つまりその意味においては片貿易というか、一方通行でしかなかったと思うのです。やはりこの片貿易というのはどうしても直していかなければならないと思うのです。

たとえば翻訳の問題にしましても、日本は外国のものを日本語に翻訳をするという量においてもまた質においても世界でも最も優秀な国の一つだと思うのです。さっきお話に出た Columbia 大学の Donald Keene 教授が学生に対して、「君たち日本語を覚えれば世界のどんな文学でも読めるよ」と言った話がありますけれども全くそうだと思う。ところが逆に日本語で書かれたものが外国語に翻訳される数というのは、ベンガル語から外国語に翻訳されるよりも数が少ないというのが現状なわけです。これはどう考えても片貿易ではないか。その片貿易にはさまざまな理由があるわけですが、やはり英語教育というものにも、一端の責任があるんじゃないか。英語というものは、とにかく向こうのものをこっちに紹介するための一つの手段であるんだという意識ばかりあって、英語というものを今度はこっちの方から能動的に、主体的に使いこなして、英語で日本のことを外に向かって必要に応じて紹介していく、そういう視点が非常に欠けていたと思うのです。こうなって参りますと、さっき山本さんもおっしゃったように、日本というのはとにかくだでさえ理解されにくいのだ。あるいは理解させようという努力が非常に不足している、欠けている、という現状を考えますと、何とかしなければいけないというふうに思うし、この雑誌の読者の先生方にもそういう視点をぜひともお持ちいただきたいと思います。

もう一つ、これは私事にわたってたいへん恐縮ですが、たとえば去年の9月の下田会議で私も英語で文章を書きまして論文として提出したのですが、おかげさまで私の当初の想像を絶するほどの反応、反響が日本の国内でもあったし、また外からもあったわけです。私自身願ひて非常にじくじたる思いなのは、いままで日本語でばかりものを書いて英語でものを書くなんてことはほとんどやってこなかった、外向けにものをいうという姿勢が私自身の中において非常に欠けていた。これはやは

り何とかしなくてはいかん、そういう思いを非常に強く抱くに至った一つのきっかけは下田論文への反響なのです。私はそれから心を入れかえまして、せいぜい英語でものを書いたり英語でものをいおう、それが日本がよく理解される一助にもなる、そういうふうに考えているわけです。

Butler 一つだけそれについて考えることがあるのですが、国際理解に非常に障害になっているのは、日本国内では、先ほどおっしゃったように日本人同士がお互いに論じて問題点を持ち出して、雑誌でも新聞でもテレビでも十分に論じて結論を出すんですね。けれどもその問題がまだ全然外国に紹介されてない場合があるとすごく食い違いが出るんですね。ですからぜひ活発に英語で論文をお書きになっていただきたいと思います。

英語は Communication の一手段

國弘 そこで国際理解の手段としてのことばの問題についてお2人からそれぞれご意見をいただきたいと思います。

Butler ことば、言語の教育の立場から一般的にこういう問題を考える時一つ必ず考えなければならないのが言語教育、それが英語教育にしろ日本語教育にしろ、それは機械的な教育ではなくて、そのことばの組織、いわゆる文型とか文法的な組織がある。それだけを master して、それでことばが使えるという考えがあるのでしたら大間違いだと思うのです。文化的な立場からことば教育をやらなければならない。特に自分の国がわからないで外国のことを勉強することはとても不可能だと思いますし、文化がどういうものかという最初からの問題に戻るのが、その文化はもちろん禅など伝統的なものも含んでいるけれども、自分の国の人たちが何を考えているか、何を問題にしているか、何を望んでいるか、そういう面を十分にわかった上で外国に向かって活躍しようとしなないといけないと思うのです。

國弘 おっしゃるとおりですね。

山本 いま Butler さんのおっしゃったことに賛成です。私ども教育の交流の仕事をやっていて経験したことですけれども、私どものプログラムの場合、日本の先生方に民泊していただくのですね、アメリカで。その場でたまたま私は何回か経験したことなのですが、英語の先生よりも英語の先生でない方が、こういうことをいうと差しさわりがあるかもしれませんが、向こうの人とより良く communication ができることが多いのです。

これはなぜかと考えますと、英語の先生というのは、非常に英語にこだわっているわけです。非常に美文をつくらうとされたり、間違いないことばを使おうとして、ややもすると内容に欠けてしまうわけです。ところがたとえば社会科の先生なんかの場合、ほんとうに話したいという人は手まねでも何でもして communication を持とうとするわけですね、相手と。ですからやはり私は英語を communication の道具というふうに認識することがまず第一だと思います。

Butler Communication が大事です。ぼくのような日本語でも communication ができるんでしたら、たいへんけっこうなことです。(笑)

山本 ですから私はやはりそういった場をつくることがほんとうに大事だと思うのです。場もつくらないで話せといってもそれは無理な話です。私はこのごろの中学生、高校生を見て、日本の文化の国際性について多少脈があるなと思いますのは、ああいった人たちは全然ものおじしない。私ども外国の方々からよくいわれるのですけれども、中学校や高校の修学旅行の生徒たちが旅行者のところにきて英語をしゃべりたがるというのです。前にももちろんありましたけれども、このごろ特にそうなのではないかという気がします。そういうものおじしないで向こうの人と話をしたいという基本的な姿勢が一番大事じゃないか。それがあつたら、あとは要するに自然に身につけ得る類いのものじゃないか。正しい先生について、正しい勉強の仕方さえすれば。

Butler いまおっしゃったことは非常に正しいと思います。両方が必要だと思うのです。そしてことばを使うときに、もちろん正しい教え方が必要だし、経験も必要ですが、一番必要なのは相手に向かって言うことがあることだと思います。

一つ非常にいい例を申し上げたいのですけれども、以前向こうの大学へ、版画をやっている棟方志功が版画のことを講演しに行ったことがありました。で、その大学の日本人で西洋美術史をやっている人に通訳を頼んだ。けれども途中で、その人があまり版画のことは知らなかったのので、通訳できなくなってしまった。棟方さんはそれを全然気にしないで後半の講義は全部日本語でやった。聞いている200人くらいの中で日本語をわかっているのは、特に彼の日本語がわかっている人は2、3人くらいしかいなかった。けれども、その聞いている人全部が完全に彼の言いたいことがわかった。それは彼が communication したいことが充分あって、そしてやった。それが禅の精神の非常にいい例でもあるし、芸術家の精神の例としても非常にりっぱだったし、そして人間

としての例でも非常に大切な例だと思うのです。そのつもりでことばを勉強して、そのつもりで外国人に向かって使おうとすると、世の中がよくなってくると思いますね。

山本 そうですね。ぼくはやはり自分を振り返ってみたり、まわりの方を見て、外国の方と communication を持ったという excitement というのは、ぼく自身非常に鮮明に覚えているし、多くの方がそうじゃないかと思うのです。だからやはりそういった外国の人たちと付き合えるということ自体、英語を学ぶための非常に大きな動機になり得るのではないかという気がします。その意味で、さっきの場を多く設けることがわれわれの一つの大きな仕事だと思います。

英語教育者への提言

國弘 さっき山本さんがおっしゃった、英語の先生は英語自体とにかくこだわりたいへんに憶病であるということですね、これはぼくはやっぱり読者の先生方に代って、若干弁じておかなければならないと思います。先生方は要するに英語というものがどうあるべきかという、あるべき姿をご存じであるが故に、かえって憶病になるということがあると思うのです。英語を専門としておられない方は、むしろ悪いことばでいえば「めくらへびにおじず」みたいなことがあって、あるべき姿をご存じないが故に、かえって自由闊達に英語でおっしゃれるということがあると思います。

ただお2人のお話非常に私も賛成でして、やはりことばというのは本居宣長なんぞをここで出すと専門のButler先生の前では恥ずかしいけれども、本居宣長が言うように、「ことば」と「事」と「心」、これはやはり三位一体なんですね。ことばというのはその背後に当然具体的な事物というか内容というか「事」がなければならぬし、またその「事」をことばを使って表現するに伴って当然そこには「心」というか情感、情念というものが横たわっているわけで、ことばだけを取り出して機械的に勉強してもそれには非常に大きな限界がある。やはり「ことば」と「心」と「事」との三位一体というものは守っていかなければならないということを痛感するのです。その点率直に申し上げますと、どうも英語を専門にしておられる先生方は、英語そのもの、あるいはことばそのものにはたいへん強い関心をお持ちだけれども、その背景をなす事ないしはその文脈、contextをなす心というものについてはあまり関心をお持ちでないのではないかと、こういう懸念が私にはあるのです。

一つの具体的な例ですが、かつて2年ほど前に、中国問題で世界的に有名な Owen Lattimore 教授が日本に見えて公開講演を3回ほどされたわけですが、私たまたま通訳をするはめになりまして、そのときに、知っている英語専門の先生方をお招きしたのだけれども、どなたもいらっしやらなかった。

ところがそれとほぼ同じ時期にあるアメリカの英語あるいは言語教育の専門家が見えた。これまた、たまたま私が通訳したのですが、そのときお招きしたら全部見えたのです。そこらへんに何か日本の英語の先生方の意識の中に、ことばそのもの、あるいはことばをどう教えるかということに対する関心は強烈にありながらも、そのことばの背景にある「心」あるいは「事」ということについてはどうも関心をお持ちでないのではないかと、非常にさびしい思いをしたんですね。そこを一つぜひとも申し上げておきたい。

Butler その問題についてやはり Keene さんの先ほどの話に戻りますが、外国人が日本語を勉強して世界文学を日本語で読めるような時代になったら問題がだいぶ減ってくるのではないかと思います。ことばを勉強しているといっても、自分のやっていることと非常に関係があることだけにそのことばを使うということは、とても間違っていると思うのです。ことばは communication をするためにあり、そして communication そのものに価値があると私は思っているんです。

國弘 そういう一つの言語観があると思います。ことば自身に非常に大きな価値を認める言語観もあるし…。

Butler それは学問的にはあるけれども。

國弘 それからいま Butler さんがおっしゃったように、ことばというのは communication の手段なんだ。そういう言語観は当然あると思うし、私もむしろそれに近いわけですが、最後にお2人のお話を伺った感想を、特に英語教育あるいは英語教育者に関連して2つだけ申し上げたいと思います。

一つは、自国のことを知ることが他国を知ることにつながるのだ。自国に深まらなければ他国にも深まれない。あるいは自国語に深まらなければ他国語に深まれないということです。その意味においてやはり日本の英語の先生が、これは私も含めてですが、英語に深まろうと思うならば、やはり日本語に深まらなければならない。あるいは英語ということばの背景をなすものに深まろうとするならば、やはり日本語の背景をなす日本の事物なり何なりに深まらなければならない。

第二点は、実はそういう自分にとって最も親しい最も身近なものを、どう英語で表現するかというような意

識を持つことが、英語の表現能力を最も伸ばすゆえんだと私は考えているのです。そのことは教育の場においても充分にあてはまると思うので一つの例を申し上げたいのですが、私の知っている高校生で英語のきらいな子がいたのです。親が心配しまして、何とか助けてやってくれ、と言われるのでその子に会って話を聞きますと、相撲が猛烈に好きなのです。そこでふと彼の相撲に対する知的興味と英語を何とかうまく結びつけることはできないだろうか、こう思いまして、高見山大五郎に関する英語の大きな本をその子に与えたわけですが、うまくいきまして、この実験は、いまでは英語は大好きだとはいえないけれども、昔ほどきらいではなくなったという点においてはその実験は成功だったと思うのです。

似たような例ですが、たとえば高知県の高等学校の先生方が、Marius Janssen さんの坂本竜馬についての有名な研究書の一部を抜粋して、それにことばの注釈、内容的な解説をつけて高知県の高校生にテキストとして読ませているわけです。また、ある長野県の高等学校の先生は長野県に伝わる民話を集めて、それを英語に直して、高等学校の学生にテキストとして与えた。これなども私は非常にいい実験だと思うのです。

いずれにしても、この間の愚かしい、そして悲惨な戦争でわれわれが身につけたはずのあるいは少なくともつけべきであった教訓というのは、やはり日本というのは絶対に孤立をしては生きてはいけないのだということだったと思うのです。

特に資源の問題一つを考えてみても、market の問題を考えてみても、あるいは経済以外、政治その他の面を考えてみても、世界中で日本ぐらい他の世界と孤立をしては生きていけない国、あるいは他に対する依存度が高い国というのはないと思うのです。にもかかわらず、どうやら方向としては国際社会の中で取り残されつつあると、もしそうならば、これはお互いにとって由々しいことだと思えますし、そのことは決して日本のみならず世界の平和にとっていいことだとは思いません。

そういうことを考えますと、きょうお2人にご討議いただいたポイントというのは非常に重大な意味を持ったポイントで、おそらくこの鼎談をお読みの先生方にもいろいろ示唆をお与えすることができるのではないかと思います。お忙しいところお時間をとって下さったことに対して心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(速記：林節子)



文化の国際化

TOYAMA SHIGEHICO

外山 滋比古

戦争に負けたから、アメリカに何をされるかわからない。そう思っていると、CIE ライブラリーというものができた。日本人にだれでも本を見せてやるという。すこし話がうますぎる。近よらないで様子を伺っているうちに、新しい本がいくらかもあるという話だから行ってみると、たいへんなにぎわいで、うかうかしていると、席がない。大学教授もノートをもって出入りした。新しい時代がやってきたという感じであった。

イギリスは、おなじみの Blunden さんを文化使節として送ってよこした。Blunden さんは日本中を講演して歩いた。人々は戦争がすんだことを心から喜び、詩人学者を温く迎えたのである。ついで、やはり文化使節として、若い Fraser さんがやってきた。するどい講義は若い人たちを興奮させたものである。

そのあとで、ブリティッシュ・カウンシル（英国文化振興会）の東京支部が再開された。これも要するに図書館である。Close さんが代表として来日し、その人柄はたちまち多くの人を魅了した。次席の McApline さんがまた人気者で、東京に沢山の友人をこしらえた。夫人が藤間流舞踊の名取りになって帰国したことをわれわれは何とも言えない気持ちで喜んだものである。ブリティッシュ・カウンシルは本だけでなく人もある感じだった。

戦争中、日本が占領地でやった宣撫工作のことはいくらか聞かされていたが、それはおよそ文化とは縁遠いものであったから、アメリカやイギリスがして見せた文化活動とはまるで結びつかなかった。CIE ライブラリーやブリティッシュ・カウンシルを宣撫工作的なものとして取った日本人はひとりもなかったであろう。

イギリスやアメリカが戦後の日本へ向けた「顔」とイメージは、この二つの図書館に負うところが意外に大きいように思われる。

*

文化の国際的普及は、だいたいにおいて、その国の総合的国力に比例するものである。文化の優秀さだけによるのではない。

放っておいても、強い国の文化は広まる。ちょうど、

水の低きにつくがごとし、などというたとえをもち出すまでもないくらいだ。逆に、たとえすぐれた文化をもっている、政治、経済のしっかりしていない国のものはほかの国から注目されることがすくない。その点では、文化は政治、経済からまだ完全に独立しているとは言にくい。つまり、それだけ野蛮な状態を脱し切っていないのである。

そういうわけで、国力と文化の国際普及力とはパラレルなものであるが、両者が完全に比例しているわけではないところが、またおもしろい。

最近のある新聞によると、各国が文化交流事業のために組んでいる予算は、フランス500億円、西ドイツ300億円、アメリカ100億円、イギリス100億円、日本20億円だそうである。

各国とも、自国文化の国際的進出を自然にまかせて放ってあるのではないことはこれでもはっきりしている。それぞれに金をつかっている。しかし、いわゆる国力とこの予算が比例していないのが目をひく。とくに目立つのはフランスがアメリカの5倍もの努力をしている点である。（日本は、などという話は、この際、しないことにしよう。）

国力では比べものにならないアメリカに対してフランスが見劣りしないのは、文化のゆえであるが、その文化を認めさせるために、実は陰で、これだけの身銭を切っているということを見落してはならない。

水は低きにつくが、ポンプで汲み上げれば、低いところの水が高いところへ上ってくる。そして、そういう水がおいしいのだ。

*

この夏田中首相がアメリカを訪問したとき、日本文化研究のためにといって1,000万ドルをプレゼントしたというニュースが報じられて、われわれの方がびっくりした。秋のヨーロッパ訪問でも、イギリス、フランス、ドイツの3か国に同じ趣旨の基金各100万ドルを贈った。これは俗に田中ファンドと呼ばれているが、海外でも、日本外交のニュー・ルックだとして評判になった。

日本の政治家が急に学問、芸術づいたと思う人はあまりいないようで、いや、外貨保有が多くなりすぎたからさ、とか、日本商品の排斥運動が広がるのを抑えるためだろう、とか、先進国に対する外交の手詰まりを打開する策だろう、とか、素人雀の政談は例によってうるさい。しかし、よいことはよいことだから、余計なケチはつけないことにしよう。ヒョウタンからコマの出るということもある。

明治以来、われわれの外国観は、軍事、政治、経済中心になっていた。この3つのつよい国が一等国であると思ってきた。軍事力をもっていないいまの日本でも、やはり、外国を見るときには、軍事力を重視しているのは皮肉である。

外交が、政治、経済中心になるのは当然であるし、外交官になるには法科、経済出身でなければ難しいのも常識である。これから本当に日本文化を国際的に広めて行こうとするのなら、まず、政経中心の外国観を改めることだ。そして、政経偏重の外交から人間的外交への切り換えも必要であろう。

外交官に限らず、法科、経済、理工系の人たちに、もっと文化への関心を高めてもらいたい。カネもモノも大切だけれども、人間らしさを忘れていては、長く栄える経済を維持することはできない。

先進文化国へ研究基金を贈ったくらいで日本が国際的文化国家になれるわけではないことは、くれぐれも忘れないようにしよう。

*

この100年間、せっせと外国に学んできたわが国の近代化の歴史をふり返ってみても、文化に国境を越えさせることはナマヤかしいことではないことがわかる。

文化の移動はまず形のあるものから始まるようである。芸術のうちでは絵画がもっとも早く外国人に理解される。建築もそうだ。音楽は絵画ほど容易ではないが、音楽も言葉を要しないから、国際性にすぐれている。映画もサイレント映画の方が国際性が高かったが、言語が入ると、どうしても通じのわるいところがでてくる。

これらに比べると、文学のように言語のおもしろさに依存しているものの移動はきわめて困難である。初期の文化摂取では、もっとも翻訳しやすい、実用知識のものか、さもないと、概念的な理解を許す思想的なものが注目されるのが普通である。

ついで、語学的関心が高まり、最後に文学への興味がおこってくるというわけだ。これによっても言葉がいかにつよい地方性を帯びているかがわかる。文化の移動の中では言葉の移動、翻訳、外国語学習ということがもっ

とも難しい。

文化の国際化を考える場合にも、したがって、言語の国際化が仕上がるはずである。この点で、わが国の文化外交とやらは、はっきりした認識を欠いているように思われる。もっと、外国人が日本語の勉強をしなくなるように仕向けなくてはならない。どうせ外国人には日本語は難しすぎてだめだろう、などとはじめから投げてかかっているのはおかしい。日本語はすこしも難しくないと断言し、すばらしい日本語を話す外国人がどんどんふえているではないか。

日本文化の国際化にとって、日本語の国際的普及がカナメであるとする、現状の日本語教育はいかにもお寒い状態だと言わなくてはならない。

早い話が、外国人が引いてわかるような日本語辞書がひとつもない。何も外人向けの特別の辞書がほしいというのではない。外国人にわかるようなものでなければ、本当の言葉の辞書とは言えないのである。本格的な国語辞書ができれば、外国人にも役立つはずである。

*

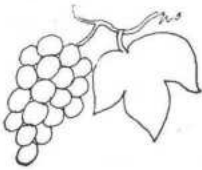
島国の人間であるせいか、われわれは何事によらず、潔癖で狭量なところがある。こまかいところまでキチンとしていないと気がすまない。翻訳をするときでも、原文忠実を最高の目標にする。原文の一行が抜けていても訳者の良心をうんぬんされる。これではうまい翻訳ができない道理だ。さらに言えば、日本人は翻訳には不向きな言語観をもっているのかも知れない。

翻訳ということを承認する以上、もうすこし誤差に対して寛大でなくてはならない。角を矯めて牛を殺すようなことがあってはこまるのだ。たとえば、Waleyの英訳源氏物語はみごとな翻訳であるが、国文学界では、いまだに、原文をあまりにも逸脱しているという批判が後を断たない。おかしなことである。正宗白鳥ではないが、日本人でも、よくわからないような源氏の原文を、あれだけわかりやすく、おもしろい「文学」にした手腕をこそ賞揚すべきであろう。

同じようなことは川端康成の英訳についてもおこっているが、川端氏がノーベル賞を受けたのは英訳によってだから、いくらか遠慮されているようだ。翻訳ではある程度の変化は避けられない。誤解もつきものである。それでもなお、翻訳はきわめて多くのことができる。

日本文化がほかの国で理解されるようになるには、こういう誤解、誤差にじっと耐える苦しさを経験しなければならぬ。その寛容さがないのなら、島国のものは島国のうちに留めておくことだ。

(お茶の水女子大学教授)



日本文化の国際性

SAITO

Jôji

齋藤 襄 治

上に掲げた題で何をとり上げるべきかを考えていた矢先、あのエサキ・ダイオードで知られる江崎玲於奈博士が本年度のノーベル物理学賞を受賞することになったことが報ぜられた。湯川秀樹、朝永振一郎博士について、わが国に於ける物理学の分野での輝かしい出来事である。明治100年に当たる1968年には文壇の最高峰としてひとしく認められていた川端康成氏がノーベル文学賞を獲得した。いずれも私たちにとってうれしいニュースであった。

川端氏の受賞は、ある意味では、現代日本作家の作品がはじめて公式に世界の人々にそのすぐれた価値を認められたという点で一層よろこぶべきことであった。だが川端氏にノーベル文学賞を与えることを決定したスウェーデン王立アカデミーは受賞の理由として、川端氏は「日本人のこころの機微をこまやかな感覚で表現した」からであると言明している。同アカデミー総裁の言葉によれば、川端氏は「卓越した芸術性を以て、道徳的・倫理的意識を表現し、ある点では東と西との間の精神的橋わたしをした」というのである。

これは以前にも指摘したことであるけれども、川端氏の受賞の対象となったといわれる『雪国』をアカデミーの審査員たちが日本語の原文で読んで、評価したということは考えられない。この作品のスウェーデン語訳にも同訳は Edward G. Seidensticker 氏の手になる英訳からの重訳であることが断わってある。翻訳不可能とまでいわれる川端氏の作品が、外ならぬ翻訳によって——厳密に言えば翻訳の翻訳によって——、評価されるという大変皮肉な出来事であった。

川端氏が受賞した年の暮に日本ペンクラブでは氏の受賞祝賀会を催した。その際当時の文芸家協会理事長であった丹羽文雄氏が、川端氏のかずかずの作品を英訳した Seidensticker 氏の功績をたたえ、さらに言葉をつづけて、自分たちはこれから Seidensticker 氏のような人をもっと捜して、日本の作家の作品をどしどし翻訳してもらいたいという意味の発言をした。一個人の発言ならばともかく、いやしくも日本文芸家協会を代表する氏の立

場からは、もっと思慮ある発言をして欲しかった。文学作品は人に頼んで翻訳してもらうべき性質のものではないはずである。もっとも重要なことは、いずれの国の読者の批判にも堪えるだけの内容の作品を書くことなのである。ドストエフスキーにせよ、トルストイにせよ、ゲーテにしても、またバルザックにしても、なにも原作者の依頼によって、その作品が書かれたもとの言語以外の外国語に移されたわけではない。

戦前の日本における日本文学作品の翻訳活動は、当局の要請にもとづく「国威宣揚」の意図が、時には余りに明白であり、翻訳の内容自体その影響をまぬがれなかったことがしばしばある。

文化の一つの面に対する関心は、さらに別の面に対する関心を呼ぶことがしばしばである。先に挙げた Seidensticker 氏がはじめて谷崎潤一郎の作品の英訳にとりかかろうという時に、私は氏にまず『蓼喰ふ蟲』に手をつけることをすすめた。そして中央公論社の嶋中鵬二氏を通じて谷崎氏に Seidensticker 氏に会っていただいた。翻訳がいよいよ出版された時私はこのアメリカの友から一本を贈られた。氏はその本に “With thanks for his services as a Nakôdo” と記して私に対する心持を表してくれた。私はこの作品を、第一にその構成はあくまで西洋の伝統的な小説の形式をとっていながら、そこにとり上げられる問題は、日本文化と異質的な文化との触れ合いから、日本的なものに回帰して行った私たちの、そして作者の姿であることに注目したのであった。果せるかな、この『蓼喰ふ蟲』の英訳を読んだアメリカ人の中には、大阪弁天座の文楽一行の使う人形の描写を求める人も出て来たのである。Seidensticker 氏は引きつづいて大作『細雪』の全訳も完成した。多分に自伝的であり、しかも風俗小説の形式をとりながら、谷崎はその耽美主義の最終的に到達する世界を見事に描いている。1930年に英訳され、ニューヨークの Alfred Knopf 社から刊行された大仏次郎氏の『帰郷』(Homecoming)の主人公、元海軍軍人である守屋恭吾は、他人の罪まで自ら着て、祖国を棄てて、異郷にさまよったあげく、終

戦と共に帰国する。かれが心の中で渴望していた祖国の美しい伝統は焦土の中にその片鱗も見せない。そしてかれは傷心の胸をいだいて再び日本を離れて行く。そこに招かれている世界は谷崎のそれとは似てもつかないものである。しかしこれもやはり日本の現実でもあったのである。

これまで数多くの日本文学作品が翻訳されて来ている。そして今後もさらに多くの作品が紹介されて行くことであろう。だがそうした作品は日本的なものを契機として、普遍的なものを指向するものが多いのではなからうか。勿論このようにのべる私も、たとえば近年次々にその作品の翻訳が発表されている安倍公房氏を無視しようなどとは思わない。安倍氏の作品はその舞台だけは一応日本であっても、その主題は、そして物語の展開は、さらに交される会話は、はじめから、英語なり、フランス語なり、ドイツ語で書かれていても何の不思議もない性質のものである。そこに上げられている疎外の問題は今や人類共通のものといつてよいのである。

鈴木大拙博士がその英文著書によって禅をひろく世界にひろめた功績を疑う人もいないであろう。禅に関連して戦前から日本の読者に知られている Eugen Herrigel の『弓と禅』が *Zen in the Art of Archery* と題して 1953 年に英訳され、イギリスで出版された。今日ではペーパーバックの一つとなって容易に手に入るようになっている。かつて日本に学んだドイツの哲学者によって書かれたこの名著が今では英訳によって英語国民の間にひろく知られているという状態である。たしかに私たちがその中に生まれ、その中に育った日本の文化が、戦前想像もつかなかったほどの憧憬と情熱を以て海外で研究され、吸収されている今日の姿に私たちは目をみはるのである。1545年に出版された Roger Ascham の *Toxophilus* はプラトンの対話篇に倣って問答体で話が進められている、弓術に関する本である。Izaak Walton の『釣魚大全』(*The Compleat Angler*, 1653) が釣りの醍醐味をのべながら人生を語るに似て、Ascham 卿の『弓術論』は余暇をいかに弓によってまぎらすかを論じている。Herrigel の『日本の弓術』も、弓道として発達したこの技の精神面を余すところなく説いて興味深い。

この一文の冒頭に触れた江崎博士のノーベル賞受賞のことであるが、私たちは日本人として大きな喜びと誇りを感じる反面、博士が開発されたダイオードが果して最初から日本で正当な評価を得たかどうかということを反省してみたい。日本物理学会誌に昭和32年の夏はじめて論文が発表されても余り注目されなく、翌年外国の学者によってその真価を指摘されたのち、やっと日本の学者

たちも気がついたと朝日新聞の1973年10月25日の社説はのべている。江崎博士の頭脳は結局海外に流出してしまった。映画の『羅生門』が封切りされた当時を思い出すのもよからう。私はがらんと空いた映画館の片隅でこの黒沢明の映画を見つめていた。1951年度のヴェニス国際映画祭大賞(グラン・プリ)が『羅生門』に与えられ、同映画には異常な関心が寄せられ、ひいては小説『羅生門』『藪の中』の作者芥川への関心が海外で深まったのも私たちの記憶に鮮かである。

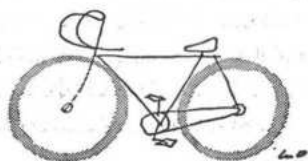
芥川に関しては、なお、塩尻清市氏の手になる『河童』の英訳が1947年6月に大阪で刊行され、同じ年の8月25日号の米誌『タイム』が1ページ全部をさいて、この作品のあらすじと批評を、作者のポートレートと内容を諷刺した漫画入りで紹介した事実をとり上げよう。『河童』は Swift や Butler のような諷刺作家をすでに持っている英語国民にとっては格別目新しいものではなかったはずである。『タイム』の記者は、それまで自分たちと全く異った世界にでも住んでいると考えていた日本人が、実は自分たちと共通な考え方乃至表わし方をしているのだという新しい発見のおどろきを代表したのではなからうか。

日本文化の国際性は考えてみれば、その特殊性故にかえって国際的関心の的となる点にかかっていることも多いのではなからうか。何のことはない。もしかしたら私たちは自分たちの国の文化のいずれの点が特殊であり、いずれが普遍的なものであるか、落ちついて考えないでいるのではなからうか。私たちはノーベル賞のような栄誉ある賞が同国人に与えられたことの意義をよくよく考えてみるべきではないだろうか。私たちはこのような機会を自らの研究の、そして自らの伝統の在り方を謙虚な心持で再検討してみる意義ある機会として受けとるべきであろう。他を知ってこそ自らの姿を理解できるのであり、自らの姿を直視してこそ、真に他を知ることではなからうか。

(茨城キリスト教大学教授)



日本論と日本人論の明暗



小市民の意見

内から見る日本人論も外から見る日本人論もとにかく高名な学者の意見や個人的体験に基づいた発言が多いので、まず小市民の平均的な意見の総和から日本と日本人が諸国でどのように評価されているかを考えてみよう。

インドのカルカッタ、ボンバー、デリー、マドラスの諸都市の読み書き能力のある人、1,000人を対象とした5年前の調査では日本を「非常によい国」と答えたのはわずか7%に過ぎなかった。ソ連の39%、アメリカの19%に比較すると、まさに大国と小国の相違にも等しい。かろうじて、西ドイツ4%、イギリス2%、フランス、中国それぞれ1%より高いとはいえ、日本がアジアという共通の文化圏でも、それほど人気のないことがよくわかる。「よい国」と答えた人々の割合を高い順に並べると、アメリカ52%、ソ連51%、アラブ連合43%、西ドイツ39%、日本38%、フランス25%、イギリス24%であった。「非常によい」と「よい」を合計してみても、日本の評価はそれほどよくない。長年イギリスの支配下に置かれていたインドの歴史を考えると、イギリスへの風当たりが強いことはわかるにしても、大東亜戦争の結果、アジアの諸国は独立の契機に恵まれたのだから、日本の戦争は徒勞でなかったというような甘い考え方は禁物である。インドの一般市民がソ連とアメリカに寄せる好感情こそむしろ偽わらざる世界文化の趨勢ではあるまいか。これらの両大国はそれだけの能力を備えていることを改めて認識し直しながら、日本の地位というものを再確認すべきであろう。

もう少し西へ進み、イランの首府テヘランで同じ頃調査した興味深いデータを吟味してみよう。対象は読み書き能力のある300人である。ここでは「1ヶ月間招待を受けたら訪問したい国はどこですか」という好悪を検査するのにまことにふさわしい質問が出されている。アメリカが25%とトップで、ドイツが22%、日本が12%、ソ連が11%と続いている。ただし、イランはソ連とは隣接しているので、かなりの人々がソ連に行く機会に恵まれ

TAKEDA KATSUHIKO

武田 勝彦

ていることを考慮しなくてはなるまい。ところが、同じ市民に「値段が同じならどの国の製品を買いますか」という質問をすると、ドイツが圧倒的に評判がよく、43%の人たちがドイツ製品を求めている。イギリス20%、アメリカ16%、日本7%、ソ連6%となり、日本製品はそれほど評判はよくない。一国のイメージというものは容易に定着するものではない。個人的趣味はもちろんのこと、政治的利害関係、地理的条件、歴史的因果関係などが入り組んでいるので、決して安易に結論を導くことはできない。文化交流政策はこれらのすべての諸条件を考慮した上で決定さるべきものであることを強調しておきたい。

第二次大戦後、政治的にも経済的にも、また文化的にも最も密度の高い交渉を持ったアメリカ人は日本人をどのように見ているのだろうか。ジャパノロジストたちの個々の意見を総合した限りでは、「日本よいとこ一度はお出で」とでもいいたいくなるが、果してこのマイノリティ・グループを多数のアメリカ人が支持しているのだろうか。日本人とわかっていて、日本人個人に「あなたの国は嫌いです」と直言するアメリカ人は少ない。いくらストレートだといっても、そこまではっきりと意見を出すことは稀である。それだけに平均的な意見なり評価を基礎として個人的な見解を判断するように心がけねばならない。また、日本人の個人的な体験に基づく意見も尊重しなくてはならないが、これもヴァイアスを除去するように慎重な態度で処理すべきであろう。

プラスの要素とでもいうべき項目をあげると、勤勉44%、知的33%、進歩的、芸術的がそれぞれ30%、宗教的20%、実践的と勇敢がそれぞれ18%というところだ。これと反対のマイナスの要素を見ると、陰険19%、変節12%、好戦的11%、残酷10%とかなり嫌悪される要素もアメリカ人の意識下に潜在していることがわかる。これは1966年のデータであるが、戦時中の穏健63%、変節72%、残酷56%、好戦的46%と比較すると、はるかに対日感情が好転していることも推察し得よう。

しかし、アメリカ人が日本人以外の他の国民をどう見

ているかも知れず考えていないと危険がある。例えば、日本人を勤勉な国民と思っているアメリカ人が44%もいるわけだが、ドイツ人については65%の人たちが勤勉だと答え、ソ連人については45%の人たちが同じような考えを持っている。また、知的という項目でもドイツ人は47%のアメリカ人からその特性を評価されているほどだ。進歩的の項目では2%の差でドイツ人が優位に立っている。こうなると、日本人はドイツ人に立ち打ち出来ないが、芸術的という特性では他国民をはるかに引き離していることを指摘しておかねばなるまい。これは非常にユニークな長所といえよう。このような基礎的な数字を充分考慮した上でこそ、アメリカのジャバノロジストたちが称賛する日本の文学や芸術がかなり正真正銘のものではないかという安心感も生じる。それにしても、同じ英語圏の国民でもひとたび大西洋を渡り、イギリスに入ると評価はまた異なる。イギリス人の意見は1967年とアメリカより1年おくれた調査であるが、芸術的はわずか8%と低い。俗問の諺に従い、「他人のことを気にするな！」といってしまうと、それだけのことに過ぎないが、すべてを内輪に見るイギリス人の意見も簡単に斥けることはできない。例えば、勤勉の順位を見ると、ドイツ人35%、ソ連人33%、日本人30%となっているからだ。勤勉ということではドイツ人はともかく評価が高い。

個人と個人の間でもその長所と短所の評価はかなり異なったものになる。組み合わせによっては、AとBの相互評価とAとC、ないしはBとCの間ではかなりの差があるからだ。この一例として西ヨーロッパ文化圏で互いにライバル同志として生き抜いて来たドイツとフランスの場合を参考までに考えてみよう。フランス人の38%が自分たち自身を勤勉だと見ているのに、ドイツ人でフランスを勤勉であると評価したのはわずかに9%に過ぎない。フランス人もドイツ人も自分たちのことを知的であるとみなした人々は60%の多数にのぼっているが、相手側をそれぞれ知的であると評価したのはフランス人は23%、ドイツ人は25%でしかなかった。

日本人が海外の日本論や日本人論を検討する場合にも、好評や不評の結果にとらわれず、その内的な原因をつきとめることを怠ってはならない。かくしてこそ、正しい日本のイメージを理解し得ることになるわけである。また、常に巨視的に一般市民の評価にも耳を傾ける余裕を持つことも忘れてはなるまい。

日本学の現状

本年に入ってからの日本文学のめばしい翻訳作品には
ELEC BULLETIN

フランス語訳の『伊豆の踊子・その他四篇』、スペイン語訳の『沈黙』、ロシア語訳『遅れて来た青年』、英語訳『海と毒薬』『奔馬』『暁の寺』などをあげることができよう。またユニークな研究書にはスペインで刊行されたフェルナンド・ロドリゲス・イスキエルド氏の『日本の俳句』、日系米人、ミナコ K・マイコウィッチ 女史の『日系米人のディレンマ』などがある。さらに固い翻訳物を通覧すると、デイヴィッド A・ディルワース氏とヴァルド H・ヴィリエルモ氏の共訳による西田幾太郎の『芸術と道徳』もある。雑誌の特集にまで目を向けると、『アラスカ評論』の日本特集号をはじめとし、メキシコの文芸誌『ブルラル』の謡曲小町ものの翻訳などと多彩である。

かかる記述をすると、いかにも日本学が全世界で花盛りの感を深めるが、現実にはそれほど手離して喜べるような状況ではない。その根本的な原因は日本学で学位を取得しても、せいぜい大学教員の就職口ぐらいしかないからである。学部卒業程度では日本の大使館か領事館、あるいは大手商社の現地採用がせいぜいいいのところであろう。それとて安定した就職口とはいえない。アメリカが好景気に恵まれ、各大学が東アジア学部の拡充をはかっていた頃は少なくとも日本学を専攻する学生にも希望はあった。しかし、アメリカもドル防衛に追いつめられ、緊縮財政を続ける以上、州立大学の教員の定員は削減されるし、奨学金は少なからざるを得ない。日本の英文科卒業生のように中学校、高等学校の語学教師の口もないとすると、日本学の専攻者は必然的に減少する。いくら日本学をやってみたところでメリットがないとすれば、だれでも尻込みしてしまうわけである。ヨーロッパ圏でも大した発展はない。質的な高まりを見せているのはドイツとソ連である。特にソ連の場合は基礎研究が進んでいる。とにかく東洋学という大きな枠組の中で日本の政治なり、歴史なり、文学なりを把握し、各自の専攻分野を徹底的に開拓させる仕組みになっている。これはソ連だけでなく、ヨーロッパやアメリカやカナダの外国文化へのアプローチの大きな特色といえよう。日本の大学のようにフランス語やドイツ語も知らない高校生がいきなりフランス文学科やドイツ文学科に入学するような無鉄砲な制度はない。ロマンス語系なりゲルマン語系、あるいはスラヴ語系などの専攻分野に属し、その中から細分化された一国の文化全体を眺め、さらに歴史、宗教、文学、芸術などへとピラミッド型に先細りに自己の専門を決定していくわけである。したがって、日本文学を専攻している学生でも政治機構や経済体制についてかなり高度な意見を述べることもできるのも不思議ではな

い、具体的な一例をあげると、日本文学を専攻している英語圏の学生であれば、必ずといってよいほどウェーラー訳の『源氏物語』を読み、『万葉集』の中の歌も翻訳で味わっている。これは日本史や日本の政治や経済を専門に学んでいる学生についてもいえることである。日本の大学生の場合、政治や経済を専攻している学生で『源氏物語』を現代語訳でよいから読み通したというケースはまことに稀であろう。このような巨視的な研究方法が日本のような微視的、ないしは純粋な研究方法とどちらがよいのかについてはここでは判定を下すことはさしひかえよう。要するに研究なり教育の体制が文化人類学、ないしは文化社会学的であるといえそうだ。

また、前に述べたように東洋学という意識も見落してはならない。仏教一つを例に取っても、日本の学生が輪廻を日本的輪廻としてしか見ようとししないのに、西欧諸国の学生はインドの輪廻思想の中からそれを把握しようとする。字義だけについても *samsāra* というサンスクリットを知っているわけである。日本学を修める学生の多くが中国語を学んだり、中国研究をしていることも見落してはなるまい。日本は昭和の現在でも中国や韓国の文化遺産がその文化の中に渗透しきっている。これを無視して日本人のものの見かたなり、日本人の意識を分析することは不可能であろう。日本の外国文化研究の水準は決して低くはないにしても、学生も研究者も狭い分野だけをコツコツと根掘り、葉掘りして研究している。そのために自己の専門領域のことに限っては西欧の学者より深い教養と知識を具備していても、とかくパースペクティブに対象を見る訓練に欠けている。これこそ「井の中の蛙」とでもいうべき諺の通りである。要するに、ある一国の研究ということ自体が地域研究の中で投射されるわけである。換言すれば比較文化的研究方法を取っているともいえようし、さらに文学のジャンルだけについていえば比較文学的ということになる。

この比較文化ないしは比較文学という学問はどちらかというと日本では軽視されて来た。そのために日本の知識人の教養が非常に狭くなっていったことはいえない。英文科の学生に現代語訳による『源氏物語』の講座などは考え及ばぬことであったし、ましてや翻訳による『フェウスト』の講座や、翻訳による『失なわれし時を求めて』の講座などが置かれたことはない。こういう事情が海外における日本学を批判する目を曇らせているのではなかろうか。元来、日本の外国研究は奈良朝、あるいは平安朝以来の中国文献の扱い方、また直接には江戸時代の訓古注釈的方法が大きな影響を及ぼしていたように思われる。一字一語を厳密に究めた上で全体を見ようとす

る態度である。この方法にはそれなりの長所があることはいうまでもないが、学際化現象の烈しい今日には反省を必要としよう。そのためか、日本の専門家は西欧の日本研究の成果が日本国内での成果を抜かないようだと、評価しようとししない傾向がある。時にはかかる研究を無視しようとするこすらある。これでは海外の日本研究にマイナスになってもプラスにはならない。例えば、『雪国』の場合、主人公の島村について、西欧の学者が19世紀後半以降の現代小説の性格描写なり人物造型の技法から判断して、かなりの不満を洩らした場合、日本文学がわからないと考えるのは早計であろう。強烈な光線なり明るい電気の光の下で主人公を身ぐるみ剥ぎ、詳細にその肉体を描き、心理の深層まで探らなくとも、日本人は満足する。むしろ直射の光線を障子でやわらげ、ややほの暗い床の間に置き、その人をおぼろに把握することで満足することができるからである。もし、西欧のジャパノロジストが島村の性格描写に不満を唱えたとすれば、リアリズムに徹した西欧の近代小説観をこちらが検討する契機とすればよいわけである。

やや脱線したようだが、西欧の日本学のわが国における評価を検討していると、日本の学問の基準で切り過ぎる傾向があるように思われてならない。思考過程なり方法論の相違は必ず異質の解釈をもたらす。その位相差を理解することこそ文化交流の目標ではなからうか。

微視的具体例

日本人が芸術的領域において高く評価されていることは前に記した通りである。その具体例として海外における俳句の普及状況を考えてみたい。一般に日本人は能とか俳句のような特に日本的なものは西欧人にはわからないのではないかという偏見を持つからでもある。ニュー・メキシコ大学でスペイン文学を担当しているゲイリー・ブラウワ氏は「スペイン系アメリカ人の詩に見られる俳句」という論文で学位を得た珍しい学者である。ブラウワ氏はアリゾナ大学のスペイン文学教授、デヴィッド・W・フォスター氏の協力を得て、『西欧語の俳句』(*Haiku in Western Languages*)と題する貴重な文献目録を刊行した。単行本、雑誌論文などを英語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、イタリア語の各国語別に網羅した労作である。しかも、単行本や主要論文については評価まで付してある。英語圏が最も多いことはいうまでもないが、500点以上もある。スペイン語圏がこれに次ぎ約170点に及んでいる。以下はドイツ語、フランス語、がほぼ100点、ポルトガル語30点、イタリア語20点となっている。しかも各論文に付した評

価の厳しさはこの上ない。日本にもその名を知られている有名なジャパノロジストの手になるものでも“poor”と烙印を押されているほどである。しかし、その半面きわめて良心的で、評価を下し難いものにはその旨を記すという方針を堅持している。

季語や切字の多い俳句が西欧人にわかるのかという問題を提起する日本人が多いことは想像に難くないが、その前に俳句がなぜ海外でこのように研究されたり翻訳されているかを考えなくてはなるまい。それは一言にしていふなら俳句の土着性という特質に尽きるのではあるまいか。土着性という言葉が唐突であるならば、日本らしさといってもよからう。

思はずもヒヨコ生れぬ冬薇蓄	碧梧桐
流れゆく大根の葉の早さかな	虚子
樺太の天ぞ垂れたり鯉群来	誓子

これらの俳句には日本人の生活の匂いがあふれている。日本という一地域のローカル・カラーが視覚的にも聴覚的にもさらに嗅覚的にも訴えるように息づいている。こういう傾向は現代のアメリカ詩にも濃いといったら過言であろうか。ランサム (John Crowe Ransom) やテイト (Allen Tate) の詩には南部の香りがする。フロスト (Robert Frost) はニュー・ハンプシャー州の農民の話し言葉を用いている。リンゼイ (Vachel Lindsay) やサンドバーグ (Carl Sandburg) は中西部の言葉を用いていた。これはパウンド (Ezra Pound) やエリオット (T.S. Eliot) とは異なる。日本の現代詩人はどちらかというところこれらの詩人の影響を受けた。それだけに現代詩から土着性を拾い出そうとしても無理なことが多い。俳句の場合には現代詩の洗礼を受けることが少なかった。そのためかなり土着性なり、生活の匂いがつきまとっている。それだからこそ日本的であるといってもよからう。この日本的なものに西欧人が惹かれるのは当然のことであろう。

日本人は俳句・短歌・詩と詩心をはめ込む韻文の手段が豊富である。それ故、土着性の強いものを織り込もうとする場合に俳句に走り、近代的なむしろ都会派の現代詩を学びそれを生かそうとしたときに、詩に向ったのではあるまいか。西欧のジャパノロジストたちの内心にもアンビバレンスはあろう。ローカル・カラーに興味を示した人たちは日本の俳句に憧れたのであるまいか。もちろん自分たちの都会的な難解な詩に寄せる愛着から日本の現代詩を高く評価したジャパノロジストもいる。このあたりに、海外の日本評価の難しさがあろう。

結びとして

海外の日本論ないしは日本人論を総合的にパースペクティブに研究することはまだ始まっていないといったらいふ過ぎであろうか。最近腰の重い政府もようやくこの方面にかなりの予算を計上する姿勢を示しているが、まだまだお祭り気分なところが見受けられる。著名人を招待したり、派遣したりしているが、世界のすべての地域で東洋学と日本学がどのようにかわり合い、また日本学がどういう現状になっているのかを具体的に調査することが必要ではあるまいか。このような基礎作業を綿密にしておかないと、数多いジャパノロジストの業績が常にゆがめられたまま日本に伝わって来ることが多い。いかにも多くの人々が日本に関心を払っているかの印象を与えるような記事が出たかと思うと、川端康成氏のノーベル賞受賞直後のように、青い目に日本文学の精髓がわかるはずはあるまいという意見が横行したりする。

現代文化は各国ともかなり複雑な様相を呈している。それだからこそ、その文化パタンの中で、固有なもの、すなわち垂直的な力が加わったものを見出すことは難しい。水平的な力が伝達される速度が加速しているからでもある。このような文化に内在する二十世紀後半の特殊性は異質文化圏からの光をあてることによって、意外に明瞭に浮き彫りにされよう。諸外国の日本学研究の現状を正しく認識し、そこから日本文化の特質を見きわめることこそ文化そのものへの大きな反省をもたらす。かかる反省を礎石として、固有な伝統を伸展させることも可能になるわけである。(早稲田大学助教授)





私の見たイギリスの日本語教育

KAISE CHIAKI

貝瀬 千章

最近6か月にわたりイギリスに滞在する機会がありこの間ロンドン大学での聴講、BBC 各放送局での放送業務研修のかたわら、イギリスにおける日本語教育の実情を視察した。NHK の国際放送 Radio Japan の語学講座「やさしい日本語」“Let's Learn Japanese”の講師として過去2年間日本語を教えていた私にとっては、イギリスの人々がどのように日本語を学んでいるかは大変に興味のあることだった。もっともイギリスにおける日本研究については、昭和47年11月に行なわれた日本文化国際会議における Richard Storry 氏 (Oxford 大学) の報告¹や、さらに最近では P.G. O'Neill 氏 (London 大学) の報告²があるが、いずれも大学における日本研究者側からの意見であり、大学以外で日本に関心をもつ人々の動きが全くふれられていない。そこで本稿では大学での研究状況のほか民間の日本語学校での授業実施のものについてもふれたいと思う。

今日イギリスの大学における日本語・日本文化研究は量的にはアメリカあるいは最近ではオーストラリアのそれに及ばないとしても、その歴史と伝統、さらに現在の教授陣と優秀な学生たちを考えれば、質的には十分比肩しうるのではなからうか。Aston, Chamberlain, Satow などの輩出した19世紀末にはイギリスが西欧における日本研究のチャンピオンであった。“There is undoubtedly a strong case for saying that in the Meiji era British scholars led the way in the field of Japanese Studies, so far as the Western world was concerned.”³しかしこの時代の日本研究は中国研究の副産物といった観があり、日本研究が独立のものとして認識されたのは近年のことにすぎない。“Until fairly recent years in the British academic world there was not always a very firm recognition that Japanese Studies could well

exist in their own right, linked with, but in no way subordinate to, the Sinological tradition.”³

もちろん今日のイギリスの大学では、中国研究と截然と区別された日本研究が行なわれているわけであるが、第一次大戦前から日本語教育を行なっていた London 大学 School of Oriental and African Studies (略称 S.O.A.S.)のほかに日本語教育が始められたのは Cambridge, Oxford の両大学で、第二次大戦後のことである。しかもこの両大学において日本語・日本文化が 3-year, single-subject degree course となったのは1964年であった。そして1963年には Sheffield 大学に Centre of Japanese Studies が開設され、日本語と社会科学とを組み合わせで専攻するコースが誕生した。この4か所が現在のイギリスにおける大学レベルでの日本研究の場である。それぞれについて若干の説明を試みよう。

まず文学・語学については最高のスタッフをもち、質・量ともに英国の日本研究の中心といえるロンドン大学アジア・アフリカ研究所 (S.O.A.S.) 日本語科では、6人の教授陣と3人の part-time lecturers とが学生の指導に当たっている。主任教授の Dr. O'Neill は中世文学と能の専門家、教授の Dr. Dunn は歌舞伎に造詣が深い。4人の lecturers のうち、Mr. Strong は近代文学、Mr. Clark は方言、Dr. 稲垣 (龍谷大) は仏教、Mr. 松平 (阪大出身) は江戸文学、をそれぞれ研究・講義している。3人の女性外来講師は、日常会話、習字などの指導に当たっている。学生数は1年生から4年生まで合計約40人、毎年10人内外が日本語コースに入る。最初の1年間は、ローマ字とカナ併用の intensive course で、口語文法のすべてを cover し、漢字も700字習得する。教科書は Dunn 教授の “Teach Yourself Japanese” と O'Neill 教授の “Introduction to Written Japanese” である。2年目には当用漢字すべての読み書きと、文庫本などの講読に入り、3年目にはさらに文語文法が紹介され、4年目には選択により歴史、文学、宗教、社会などから特殊課目を専攻することになる。4年間を通じて unseen translations や language laboratory (L.L.) を利

1. 詳細は『英語研究』(研究社、昭和48年3月号)参照。

2. 『日本語教育』(日本語教育学会、第19号、昭和48年5月)。

3. Richard Storry: 前掲報告書 (Japanese Studies: The British Approach)。

用した oral-aural practice も大に行なわれているものの、conversation の能力については読み書きに比べやや弱いという印象を受けた。見学を許された Dunn 教授の口語文法のクラスは1年生4人が出席していたが、テキストの読みはすらすらできるものの、私の日本語による質問にはなかなかうまく答えられなかった。一週間の授業内容がある3年生に聞いてみたところ、講読は堀辰雄の『風立ちぬ』が1時間、『玉勝間』が2時間、司馬遼太郎が1時間、英文和訳は2時間、和文英訳が1時間、自由作文が1時間、会話および L.L. が2時間、というもので、かなり予習復習に大へんだとのことであった。

図書館の日本語関係文献はかなり充実しているようで、S.O.A.S. 出身で現在 S.O.A.S. Library の司書をしている Mr. Hickman によれば、約5万冊の図書と300種の定期刊行物とがあり、とくに古い文献も数多いとのこと。ただ残念なのは日本の新聞がただ毎日新聞一種だけでしかも3週間おくれ位のものしか来ないこと、この点他のアジア・アフリカ諸国の新聞が充実しているのに比べ見劣りがすることである。

この S.O.A.S. の卒業生の進路は、日本研究家や外交関係にたずさわる者は少数で、多くは日本関連商社など一般のビジネスマンになるそうである。しかし在学中に日本に来て日本の実情を知っている学生は半数にも満たない由、これは何より費用がかかりすぎるために他ならない。

Cambridge 大学で日本語を学んでいる学生は1年生から3年生まで合計11人で、うち4人が女性である。ここでは Dr. Blacker が、『平家物語』、『今昔物語』、『福翁自伝』などを講じているほか、Dr. Mills が日本文学史、日本語史を、さらに Dr. Sheldon が日本文化史を扱っている。日本人教師としては Mr. & Mrs. 山内が日本文法、作文、会話を一手に受けもち、主として Jorden⁴ を教科書に用いている。ここでも L.L. の利用、さらに日本語関係の充実した図書室の利用はさかんに行なわれている。卒業生の進路はロンドン大学の場合とほぼ同じといえる。

次に Oxford 大学であるが、日本語コースの在學生は17人、うち女性5人である。ここでは ICU 出身の Miss 石田が、elementary, intermediate, advanced 各レベルの prose, colloquial 両 class を一人で担当するという活躍ぶりであるが、やはり Jorden の教科書によって授業を進めている。進度を質問してみたところ second term の終わりまでに Lesson 20 まで進んだとのことであ

った。このほか Dr. Powell と Dr. McMullen が中級および上級の unseen classes を担当している。口語文法を一通り終わると、post-war play (木下順二『夕鶴』)、pre-war novel (漱石『心』)、selections from Japanese literature (Daniels 編のもの) が必修、その後は古典、近代文学、演劇、歴史のうちから一つを専修することになっている。

以上の3大学に対し、1963年から始まった Sheffield 大学の日本研究センターは、日本語と社会科学、たとえば日本経済、政治、社会史などを組み合わせて専攻する新しい4年制の degree course で、Bowman 所長以下、Dr. Collik (Mod. Jap. Studies), Dr. Daniels (極東史)、その他講師陣に Mr. Anthony, Dr. Healey, Mr. Moran, Mr. Jelinek をそろえ、Visiting professor of Japanese political theory に Mr. Matsuzawa を加えている。たとえば経済史専攻の学生の場合、1~2年は modern colloquial Japanese の読み書き会話が中心になるが、3~4年になると、語学は続けながら専攻の課目、たとえば "Economic Development of Modern Japan" といったものが中心になる。これは Dual Subject Degree Course とよばれている。毎年数人の学生が enroll されており、中には日本に来る機会をもった学生もいる。

以上イギリスの4大学の実情を簡単に要約してみたが、一般的に言えることは、やはり文学中心、しかも古代、中世、近世までの文学がこれまで研究の主流をしめてきたこと、現代文学、現代文化は今後盛んにとりあげられる可能性をもっているものの現在はまだ少ないということであろう。過去20年間の doctor thesis の list からその titles を拾ってみると日本語・日本文化関係は全英で16件、万葉集、紫式部、宇治拾遺物語、能(2件)、浄瑠璃、日本永代蔵、荻生祖来、熊沢蕃山、福沢諭吉、内村鑑三それに外交関係の研究2件、その他、となっており前記の傾向をよく物語っている。学生の立場から言えば、日本の新刊書の入手難と定価の高いこと、日本に旅行することが難しいこと、音声ライブラリーにテープ、レコードなど最新の資料が完全にはそろっていないことが、など現代の日本に興味を向ける状況が作られていなかったことがあげられるかも知れない。

さて大学以外の日本語教育機関に話題をかえると、ロンドンには少なくとも7か所の日本語学校がある。ロンドン地域の evening classes および adult schools の guidebook である "Floodlight" というパンフレットを開いてみると、ほとんどあらゆる課目が大学以外でしかも安く習えることが分る。費用は学校によって異なるが

4. Eleanor Harz Jorden: Beginning Japanese, Part 1 & Part 2 (Yale Univ. Press).

1 session (9月から翌年6月まで)に週1回聴講すると
して2〜3ポンドという安さである。この小冊子には
206か所の学校のリストがあり、語学、文学、音楽、ス
ポーツ、など自分の興味に合った課目を何でも受講でき
るようになっている。これで「日本語」というところを
みると、7か所で教授されていることが分る。これを他
のアジア・アフリカ系の言語を教える学校数と比較して
みると、中国語が8校、マレー語が1校、インドネシア
語1校、スワヒリ語1校、といった具合で、日本語は中
国語について多く、東欧圏の言語にくらべても多い。さ
らに日本関連課目を拾うと、スポーツの面で柔道は70か
所、合気道は5か所、剣道は4か所、空手は1か所で習
える。

ところでこれら市中の日本語学校はどんなものなの
だろうか。私はロンドン大学の Institute of Education
で tutorial を受けたこともあって、その紹介で正式に
ロンドン市内7か所の日本語教室のもようを視察し、学
生たちとも親しく話し合う機会をもったので以下その模
様を記したいと思う。

最初に訪れたのは Drury Lane にあるかなり大きな
City Literary Institute で、ここには初級、中級2つの
クラスがあり、初級では6人が Jorden と Prof. Dunn の
textbooks による会話練習を熱心に続けていた。講師の
Miss 石附 (大谷大卒、ロンドン大学 S.O.A.S. 図書館
の librarian) によれば、漢字・かなは使用せずもっ
ぱらローマ字による初歩の会話のみで、それでも週1回90
分ではなかなか進歩しないとのことであった。教室での
応答も、先生の口まねはどうかできるものの、完全に
独立した文章で答えることはかなり困難の様子であっ
た。学習者には日本と取引きしているビジネスマンや家
庭の主婦もあり、年令も、まちまちである。授業の間の
tea break の時に話をしてみると、やはり日本語は大変
むづかしい、しかし魅力のあることばだという意見が多
い。この City Lit. では時に weekend course という、
泊り込みの小旅行を行ない total immersion method で
効果をあげている。

South Bank にある London Nautical School では週
3回日本語クラスが開講され、初級、中級、上級に分か
れている。上級のクラスにゆくと、6人の生徒が Jorden
を使って会話の練習をしているところであった。2時間
の授業の後半は国際学友会編の日本語読本で、「汽車の
旅」という漢字かなまじり文を読み、その翻訳を行な
っていた。この程度の文章がまがりなりにも読める生徒が
何人かいるのはロンドン市内の evening classes ではこ
こだけである。教科書の内容が古い(たとえば東京一大

阪間は「つばめ」で8時間という文章など)ことが気
にかかったが、意外とこの読本は人気があるとのこと
で、担当の Mrs. 重松 (青山学院大卒、アメリカに数年在住
していた由) もはり切って指導に当たっている様子であ
った。一方、Mr. 重松 (慶応大卒) は BBC 日本語課に勤
めるかわら初級を担当している。ロンドン郊外の重松
家では毎月日本語学習者のために open house の party
を開いて日英文化交流の一端をになっている。

次いで訪れた Chelsea-Westminster Institute では
Miss 田谷 (同志社大卒、Welsh language and literature
専攻) が、Vaccari の教科書⁵によって9人の生徒に会
話を教えていた。この日は「誰」と「どなた」の区別を中
心に、文章をくりかえし発音し、automatic response
が得られるまで練習していた。私も生徒たちに簡単な日
本語で話をし、質問はないかという、東京の交通状
況、pollution、政治問題などについて (これはもちろん
英語で) 質問が続出し、応答に困った程で、日本に対す
る関心はかなり深いことがよく分った。

この他に、Paddington Institute や Quintin Kynaston
School でも日本語クラスを見学したが、上記のものと
大差なく、人数は1クラス10人内外、もっぱら初歩の会
話の習得が目的の人々が多く、ほとんどローマ字の使用
のみにとどまっている。

珍らしいのは Polytechnic of the South Bank で行
なわれている self-tuition service of Japanese である。
責任者の Mr. Overy は大変美しい日本語を話す人で、
日本にきたこともなく、独力で日本語をマスターしたと
いうことであるが、3年前から、仏、独、西、伊の4か
国のほかに日本語の self-tuition service を始めた。こ
れは L.L. に似た設備で、あらかじめ学校に register し
た生徒はいつでも自由にそのテブ設備を利用し、自分
にあった進度で oral-aural practice を行なうことが
できる。これは多忙で学校に通えないビジネスマンのため
のもので、現在1,000人が登録しており、日本語コース
は6人とのこと。うち1人はすでに3年間学んでおりか
なり自由に日本語を話していた。市販の語学テブを買
って自宅で学習する場合とどう違うのか、という私の質
問に、Mr. Overy は、「このテブは単に model
reading だけでなく、文法の説明から必要な drill まで
すべてを含んでいることで、あたかも学校で先生から習
っている感じがすること、また質問があればすぐにきけ
るように先生が待機していることである。」と説明、実
際に聞かせてもらったところでは、語学テブというより
教室での講義をそっくり録音したものという感じがし

5. Oreste Vaccari: Japanese Conversation-Grammar

た。なお教科書は Vaccari であった。

Berlitz School of Languages はロンドンにも各所にあり盛況であるが、日本語も最近学べるようになった。現在のところ1年間に10名くらいの希望者があるだけとのことだが、完全な private tuition で、1 lesson 40分間 direct-method で授業を行なう。読み書きはやらない。校長の Mr. Harris の話によると、日本人女性3名ばかりを part-time tutors として雇っているが、経験の浅い人ばかりだとのこと。私の訪れた日にイギリスの中年ビジネスマンに教えていた日本人女性も、ある日本の大学を出てロンドンで英語学校に通っている人で teaching experience はないということだった。

上記のほかにもロンドンには1~2か所日本語学校があるが訪問の機会がなかったので省略する。英国全土には果して日本語・日本文化関係の学校が何校あるか不明だが、私の知る限り、Cambridge や Oxford にも大学以外にはないので、その他の都市にいくつかあるにせよ全英で数校にすぎないだろうし、何といってもロンドンに集中しすぎている感がある。

滞英中に感じたことは日本がまさに Far East の国であり、イギリス人一般の日本についての知識は驚くほど低く（日本が tropical area にあると考えている人々が多い）、日本についての情報も The Times など一流紙に経済記事としての位が関の山で、文化関係の記事はまれにしかなく誤った記述も多い。しかも The Times の読者は限られた少数でしかない。Yorkshire にあるビジネスマン用ホテルに滞在していた際、毎晩翌朝の新聞の希望をきくので私は The Times ときめていたが、約40人の申込者のうち The Times は私の分を含め2~3部しかなく驚いたことがある。しかしこのような状況の中でも、カラーテレビやカメラなど日本製品の進出に象徴される日本経済の発展は、イギリスの人々に日本に対する関心を徐々にではあるが植えつけていくようで、前述の数の日本語学校がロンドンに存在すること自体、数年前から比べると大へんな拡大ぶりといえよう。そしてこれらの学校が現在直面している問題は、何よりも experienced, professional teachers を確保することにある。一、二の例外を別として、現在日本語を教えている人々は part-time でしかも言語学、国語学を修めたこともなく、teaching method も知らない人々である。次に audio-lingual method にもとづいた新しい教科書が必要なこと。Vaccari の例文など古色蒼然たるものがある。さらに日本大使館の情報文化関係施設の一層の充実が利用者のために期待されるところである。図書室など現状ではかなり不備といってよい。

こうした問題が解決されてゆくとき、その裾野は若干拡がったもののその程度は大学に比べきわめて遜色のある民間の日本語学校のレベルも大いに高まってゆくものと考えられる。NHK の国際放送 "Let's Learn Japanese" は、その聴取状態が不安定であるにせよ、こうして日本に関心をもつ人々の語学習得の一助になっているのかも知れない。われわれはそれを期待しつつ日夜よりよい番組作りに努力している次第である。

(NHK 国際局英語アナウンサー)

(p. 7 よりつづき)

はバス付5部屋。1階から2階への階段は大理石。その代価は土地家屋もろともで \$75,000 (約2,000万円)。どうしてそんなに安いのだろうと聞くと、モロッコ独立以来、財産の海外持出禁止、その上税金は高くなるばかり。フランス人は機会があればこんな値段で土地家屋を手離して、本国へ引きあげるのでするという。

6. 英語はどのくらい通じるか

フランス本国でも英語は通じにくい、カサブランカはそれに輪をかけたよう。先に述べたユネスコの近代語教育に関する調査報告のアフリカに就ての記述は、それは目標であって現実にはほど遠いようである。私の泊ったホテルは案内書によると、四つ星(★★★★)がついているから第一級といってよい筈だが、十数名の従業員中、英語のわかるのはただひとり。ただ一つこの街で印象に残るのは私が市内のバス停で待っていた時のこと、私の後に女の子が立った。丸い大きな目をして私を見ている。そこで "Parlez-vous anglais?" と聞くと "Oui!" という返事。それから英語で問答する。年は15才。これから友達と Kon Tiki という海水浴場へ行くのだという。英語を習い始めてわずか1年だというが、よくわかる。私はこの少女の中に、この国の、いやアフリカの英語教育の将来を見たような気がした。

(東洋女子短期大学教授)

★ ★ ★ ★

Cultural Constraints on Communication



First, I must give you some clear idea of how I am using the terms "Cultural Constraints" and "Communication." To do that I find it necessary to distinguish between *cultural interference* and what seems to me a distinctly different matter which I have called *Cultural Constraints*. Cultural interference, then, refers to limits on performance and has to do with the necessity of allowances for cultural value differences in using the language. By cultural constraints, on the other hand, I refer not to limits on performance but, rather, to limits on acquisition, to those values and implementing institutions that prevent, inhibit, or at least influence acquisition of another language. As underlying or background phenomena, cultural constraints limit attainment by which performance becomes possible, by which cultural interference becomes observable. Cultural constraints, thus, tend to be much broader than any particular utterance which can be seen as evidence of cultural interference. In fact, of course, an inventory of cultural constraints would have to include all of those major, fundamental issues which have always engaged philosophers: what is man, society, beauty, truth, etc. However, some cultural constraints are more pertinent than others, of course, for language acquisition specifically. And although I certainly do not propose to deal with all such constraints even, I think that the Japanese culture's valuation of people, both singular and in terms of social relationships; of expression; of the "foreign"; of language; and of education must be of prime significance in any consid-

eration of constraints on acquisition of English.

Finally, as for my use of the term *Communication*, I intend it to refer to verbal (i.e. oral or written) exchange either between individuals sharing the same native language or between individuals having different native languages. That is, for purposes of simplicity here I omit consideration of the gamut of non-verbal communication devices which are at least supplementary to communication.

However, some examples may clarify my distinction between cultural interference and cultural constraints. A number of other linguists have, of course, provided us with many examples of cultural interference. Our observations of Japanese students of English show us, additionally, certain peculiarities of sequencing, for instance, which reflect cultural interference (i.e. Japanese order is translated directly into English):

- (1) directions: Japanese—west north
English—north west
- (2) numbers: Japanese—3 to 2 dollars per kilo
English—2 to 3 dollars per kilo
- (3) pronouns: Japanese—I and John went
English—John and I went
- (4) noun modifiers: Japanese—No prescribed order
English—size, shape, color, material etc.

We also find a contrast in verb selection with respect to speaker's location:

Japanese (speaker at school): I *go* to school by car.

English (speaker at school): I *come* to school

by car.

Yet, these are rather simple examples of cultural interference as contrasted with the perplexities stemming from the fact the Japanese language has a fairly elaborate honorific system which is reflected in the need for careful selection of nouns, pronouns, verb forms etc. according to the relative status of speaker and listener. And certainly the structure of the Japanese language makes it virtually impossible to avoid speaking either *keigo* (up) or *higo* (down) in Japanese. And although it is widely assumed that speakers of languages characterized by such complexities will find it easy to learn a language, such as English, which makes very few honorific and deferential distinctions, such naiveté is grounded on the fallacious assumption that the less complex will seem more reasonable. More likely, although difficult to establish, the Japanese will feel it necessary to make distinctions for which there are no forms available, and this may produce hesitation or even blocking.

Similarly, your language is loaded with homonyms which tend to force you to rely for meaning on either sentence or social contexts that are very difficult to determine in the foreign situation usually prevailing when you have to speak in a foreign language. In Japanese you may also rely on writing to separate homonyms, and this seems to be a major function of *kanji*, in fact. But it seems to me that *kanji* reading and certainly *hiragana/katakana* reading (and most Japanese tell me they read *kana* with a feeling of awkwardness) do not foster a sense of the flow of English. That is, you tend to read and think of each character separately and it seems to me this reading habit, carried over to English, produces what I call "typewriter English" of each word pronounced separately rather than in normal segments of three or four words. This kind of choppy pronunciation destroys the intonation contour and rhythm necessary for understanding English. Many

Japanese consequently speak English which although grammatically acceptable is not understandable by native English speakers.

Still another way in which the language of your culture interferes with your performance in English can be seen in your very common use in Japanese of what I call "conversation stoppers"—phrases such as *Ah, so desuka* or *So, desne*, which do not encourage continuation of conversational exchange. I find it almost impossible to continue a conversation with somebody who uses such expressions, either in Japanese or in their English translation. However, my point is that every time you stop conversation, by using such phrases in English, you lose a chance to practice your English.

Turning now to an examination of several cultural constraints, several aspects of Japanese culture which inhibit or block the learning of English—or, perhaps, any other foreign language—it seems to me that the most significant and most distinctive general feature of your society is *groupism*. Here in Japan we find all aspects of life carried on by tightly organized groups which exert strong psychological influence to bind the members.

As is evident from your widespread use of *meishi*, lapel pins, uniforms, excursions, and tourism, but as is even more apparent in your daily conversation generally, you are greatly concerned about relative status and group identification. Seemingly you are uneasy when you meet somebody whose group status you do not know and whose ideas or behavior may, therefore, be unpredictably individualistic, or at least not readily classifiable. Your culture discourages contact with strangers whether *gaijin* or Japanese. And, therefore, you are denied opportunities to practice and acquire the language you study.

Japanese groupism, moreover, reflects a tight hierarchical development to structure your society vertically, as Nakane Chie has illustrated. Groupism is also reflected in the *oyabun-kobun* relationship which can be found permeating all aspects of your society and

which insures that few Japanese will ever be alone in this world. My own attempts to teach the writing of Emerson have shown me the extreme difficulty—often the impossibility—of teaching my Japanese students the meaning of any of the various self-compounds, such as self-reliance, self-sufficiency, etc., for those students, completely dependent on group protection and group security from cradle to grave, have no need to depend on *self*. However, we may well wonder if cultural constraints that have inhibited my Japanese students' understanding of the concept of self have not also denied them real access to an understanding of such matters as:

(1) contract relationships, in which social/legal guarantees of individual rights and duties are either explicit or implicit.

(2) either the negro problem or women's liberation, both of which have to do with individual recognition apart from the group.

(3) Christianity as an extrasocial, extragroup, individual-God relationship.

In all of these instances cultural constraints grounded in Japanese thinking, customs, values etc. seem to prevent or inhibit the acquisition of both the underlying thought and its English expression. These constraints on acquisition are prior to the interference with performance.

Obviously, Japanese get great security from membership in groups. And certainly much efficiency in your commercial-industrial operations can also be attributed to your system of groupism. In fact, it seems clear that most Japanese become lonely when they are alone; tours and even honeymoons are quite often group affairs in Japan. All of the social control mechanisms of the group insure that you are given no opportunity for individual deviation, therefore. Companies and school faculties, for example, spend a great deal of time on meetings of staff members. Most of these meetings seem unnecessary for conveying and discussing information. But these numerous and time consuming meetings are very necessary to make sure that the group pressure is

constantly reinforced and never relaxes. In a group society, such as Japan's, individualism is a sin that is strongly discouraged. As many social scientists have pointed out, this groupism implements attainment of *wa* (or harmony), the dominant value in Japan.

However, from the standpoint of communication and language learning, groupism seems to me disastrous. The spirit of group loyalty and vertical-hierarchical control permeate your thinking so deeply that communication between yourselves—but, more importantly, between you and non-Japanese—is severely limited.

Odd as it seems to English speakers, although Japanese frequently express annoyance with the oppressiveness of what you call "human relations," you deliberately weave a web of complex human relations into all your activities. Japanese group members are absolutely dedicated to each other in a way which seems overwhelming to English speakers. Indoctrination or acculturation of a Japanese is very thorough and systematically arranged within his group, which totally absorbs him. And that tight group organization tends to make the members extremely well known to each other. Moreover, membership in a Japanese group also means acceptance of all views and opinions of that group.

Loyalty, personal loyalty, is basic to any relationship in Japan, therefore, and personal loyalty is basically emotional. Such emotional involvement is apparently very necessary for Japanese sense of security, perhaps because there is no clear notion of a contract relationship in Japanese society. Kunihiro Masao, in his article in the summer issue of the *ELEC Bulletin*, refers to the "community of emotion" among Japanese. This community of emotion, he says, makes words unnecessary, for those within a Japanese group can communicate wordlessly. He reminds us of the typical Japanese expression *ISHIN DEN SHIN* (If there is thought there is communication/Thought can be transmitted unspoken). Intensely personal, often intuitive, your responses are

indeed outside the communication patterns we ordinarily think of as language.

Most conversational exchanges in Japan are rigidly patterned and readily predictable. And communication between those in different groups is also highly patterned, requiring no invasion of unexplored territory. But the important point, I think, is that because of your highly patterned human relations there is no real need to become acquainted by exchange of ideas in genuine communication. To learn a foreign language, however, a student must be ready and willing to confront the unfamiliar. Thus, although in the language learning process there must be some amount of curiosity, few Japanese seem to have or feel any need to be curious about other people. And my point is that Japanese are not "at a loss" because their language fluency is inadequate for communication; instead, their fluency in English is often inadequate because Japanese social values do not foster communication outside the group and so fluency cannot develop, language acquisition is blocked. Indeed, Japanese show little spirit of social adventurousness.

Part of the difficulty Japanese have in learning English also stems from your culture's emphasis on ceremonialism and ritual. That is, everybody in your groups merely plays a part—a social role—rather than really expresses himself individually. In fact, very often you seem to invent elaborate ceremonial behavior to avoid becoming really acquainted with each other. Such patterned discourse does not encourage or give you practice in real communication, particularly since those involved are in the same group and are already well known to each other therefore.

Interestingly, it is very common for young Japanese to tell me that Japan is now less ceremonial, and I am sure that is true. However they are taken with surfaces, lack curiosity about the underlying structure of Japanese society. Very few of them have enough knowledge of Japanese history, more-

over, to know when and why the surfaces have been created to cover over the underlying structures which most trained observers find have in many ways really changed very little since Tokugawa.

Recently I have become aware, incidentally, that even Japanese students of English literature quite often do not have any clear idea of relative time and dates. Our Japanese students do not know that *Beowulf*, the Anglo-Saxon classic, existed a thousand years before Shakespear, who lived more than two hundred years after Chaucer. And part of the reason for our students' confusion about history lies in the fact Japanese society and culture continue to use the Japanese dating system or calendar. Japan is the only major modern industrial nation using a different dating system for history. It seems as anachronistic or old-fashioned as the American refusal to adopt the metric system of measurement.

Although your time measuring system seems to disorient you, I think your culturally constrained use of space is similarly inhibitory. That is, not only is your land small but your insistence on doing things in groups and crowds makes your land seem much smaller. Perhaps this is another measure of the insularity which is a product of your cultural constraints on communication. But, you have lived crowded together so long that you have learned to ignore people who are physically very close to you. You isolate yourself, perhaps defensively, against the masses of people around you. For you there appears to be no correlation between physical closeness and communication. You do not talk to people who happen to come near you. You do not become acquainted. What I am trying to suggest, however, is that a large part of foreign language learning inevitably requires practice through communication with foreigners, made extremely difficult by your cultural constraints.

However, another constraint which is part of Japanese culture may be seen in the fact that it is widely assumed by Japanese that

speaking and words mean little or nothing, that actions—usually quite rigidly prescribed behavior—are far more important. And this disdain for language apparently is well-grounded in the traditional culture of Japan, for consider the Japanese expression FU GEN JIKKO (Action rather than words) or another Japanese expression KAKU MOSUWA RIKUTSU (Words are just words). Thus conversation/communication is likely to be merely a ritual rather than genuine communication exchange. And in the beginning stages of language study, repetition of ritualistic expressions is very useful too. Later, however, there must be a real desire to talk about something, to express opinions.

And we easily find that for many Japanese, in fact, English study is not really seriously motivated, moreover. It is, instead, a kind of recreational activity. And such recreation is needed because your culture here in Japan does not provide many entertainment-recreation facilities for young people with a limited amount of money. This lack is obvious when we see how many Japanese object to the five day work week because they do not know what to do with the extra time off. But perhaps the most obvious evidence of lack of recreational facilities is the existence of pachinko, for if you look in through the doors of thousands of pachinko shops you will find the players standing, all doing the same thing, and silent as pitiful robots. This is not recreation but is more like an old-fashioned factory in which the only sound is the noise of the machines.

The truth is that many Japanese have nothing to do outside of their jobs. Even students are kept neither busy nor challenged in Japanese schools. So there are large numbers of young people who study English merely to fill up the free time. Many Japanese have no real, practical reason to learn English and they have no intention or expectation of really learning English. The hundreds of English conversation schools scattered throughout Japan

cater to this need by providing mainly an atmosphere for socializing rather than for much real, rigorous training in English conversation. And, incidentally, I would like to point out that if your cultural constraints did not prohibit the teaching of spoken English in the school system, most of these English conversation schools could not survive. Or we might go a step further and point out that if teachers were required to really teach—and were adequately rewarded so that they could teach—they would have neither the need nor the energy for “side job” teaching in commercial language mills allegedly teaching what the students should have been able to learn from these same teachers at their regular schools. There, again, we find the operation of cultural constraints on education generally and consequently on English acquisition specifically.

But, in any event, the desire to fill up the time means that a lot more time will be spent than is really necessary to learn anything—English included. There will also be little sense of real pressure/incentive to learn. In fact, many Japanese students who study English endlessly seem like those neurotics afflicted with the Don Juan personality—that is, they gain much more satisfaction from the courtship chase than they do from the capture or conquest.

Thus, the learning of English becomes another ritual, another ceremonial aspect of Japanese life. And there is no way to measure efficiency of such ritualistic behavior, of course. Efficient language learning, cannot be measured by how many hours are spent. The only measure of efficiency is in what is accomplished in the time spent. And by such measurement Japanese language study is grossly as well as notoriously inefficient.

Yet, another aspect of culture which seems an inherent inhibitor of communication is the romanticization, the idealization, by Japanese, of the unreasonable, the past, and the pastoral, of which we can find so much evidence in our daily life here. Now second or third in

industrialization in the world, Japan has for a long time been a highly urbanized society. Yet, many Japanese still insist on believing the quaint idea that Japanese are "by nature" illogical. They do not want to recognize that your accomplishment in electronics, petrochemicals, and shipbuilding—to name only three areas of technical sophistication in which Japanese industry has distinguished itself—can only be accomplishments of a very rational, clear thinking people. And while your culture seems to force you to believe that you are unreasonable you will have an acceptable alibi for your failure to undertake the hard job of systematic thought and study.

On the other hand, your daily newspapers are filled with real estate propaganda extolling the rural, pastoral, "nature" alleged to be available in the suburbs. But the suburbs soon become shabby slums and eventually they will be absorbed by urban life, as has been true everywhere. More importantly, the false, romantic values by which you attempt to escape reality also may account for student reluctance to learn to think and speak about the urban, industrial world which English speaking people have pretty much accepted. Judging at oratorical contests and debates, I am often struck by the unreality of what even quite intelligent and fluent Japanese students want to talk about. Many want to see Japan again become a rural, pastoral society of the past; many resent the existence of cities and urban convenience. I suggest that perhaps you are yourselves victims of your advertising propaganda by which you attract tourists.

Similarly, most foreigners are amazed at how many Japanese express sincere longing for a return to their childhood. It seems clear, in any case, that this longing for childhood, which is, of course, the period of incomplete and crude communication, shows they are quite anxious to escape the difficulties of communication. In encouraging you to look back into your personal past as well as into your national past, your cultural constraints foster inhibition

of communication.

In fact, paradoxically, your culture encourages you to believe nonsense about your culture. You are encouraged to ignore the fact, for instance, that although Japan is an urbanized, industrialized society dependent on information, there are virtually no organized library or information retrieval facilities. This, indeed, seems related to the obvious absence from your university campuses of any sense of community of ideas, of shared scholarship. From this observation, we may conclude that apparently your cultural constraints on communication prevent exchange between groups in space as well as between groups in time.

That most of the Japanese I have met cannot really discuss their rejection of urban, industrial society is quite understandable, on the other hand, for in Japan genuine criticism is commonly equated with negative, destructive criticism—often labeled "cynical" here—rather than with constructive criticism. Apparently, this is because disagreement of any sort is a threat to that primary insistence on *wa* or harmony which underlies your groupism. But certainly this cultural rejection of disagreement and criticism inhibits discussion and that communication by which language fluency is fostered and reinforced. Moreover, I find that Japanese identification with the group is so complete that any criticism of any aspect of the group or its activities, even when requested, is taken as a personal insult. Literary criticism, not only of English literature but of Japanese literature as well, is notoriously bland appreciation rather than analysis. My point is that Japanese culture discourages self-expression, opinion, and criticism. Commenting of any kind is very difficult for Japanese students, as a result, and they hesitate to use even such somewhat masked statements as can be found in English expressions such as *I think so*, *Not bad*, or *Pretty nice*.

In fact, until recently I did not fully realize that cultural constraints, rather than unfamiliarity with syntax patterns or other lin-

guistic features, also accounted for reluctance of Japanese students to use negation structures, expressions of opinion/criticism, to make requests, or to give orders in English. Once again, then, it is not the lack of language fluency, attributable to linguistic or cultural interference, which limits conversation in Japan; it is the operation of Japanese social/cultural values which limits conversation and thereby limits the possibility of acquiring fluency.

Truly, cultural constraints reduce the instances of cultural interference. However, I want to look for a moment at the specific cultural constraints reflected in your quite different ideas about the nature and function of language.

In Japan pachinko bells and the always present public address systems attack our ears in streetcars, trains, elevators, and almost every place else. They seem to indicate that you enjoy noise as well as like being told constantly what to do. Yet, Japan seems essentially a visual rather than an aural culture. That is, speaking is apparently thought inferior to writing in Japan, perhaps because speaking is not standardized and most Japanese are, of course, trained to write a standard Japanese. This visual emphasis, in any case, encourages respect for the act and product of writing itself—as in *shodo*—but it also reinforces a lot of old Japanese ideas about the superiority or dignity of silence. As Professor Kunihiro has pointed out, in his *ELEC Bulletin* article I have earlier referred to, in Japan verbalization is thought vulgar and Japanese Buddhism reinforces the notion that oral expression is superficial if not superfluous. I think, however, that your great respect for writing may also reinforce the Japanese suspicion of glib speakers. I wonder if you agree that *rakugo* and *manzai* artists are in Japan thought odd—and fascinating as ridiculous—because they speak easily and in a well-organized way, as most Japanese do not. I wonder too if you have ever thought that your cultural constraints on easy speaking may handicap the learning of spoken English,

the acquisition of true English fluency. My point is that this culturally approved gap between speaking and writing, and its underlying assumption that speaking is inferior, may make learning to speak a foreign language doubly difficult.

More disturbing to me as English teacher is the fact that since relative status of students and teachers is rigidly prescribed in Japan students cannot establish a casual, colloquial relationship with teachers. This means that Japanese students get little practice in use of more casual forms. My students, thus, tend to be serious, respectful, docile, passive, and somewhat grim. They speak only when spoken to and then they speak as briefly as possible. Normal shortening features of the colloquial expression are not easily learned in school, therefore.

Moreover, because of tight group organization, classes of Japanese students are extremely homogeneous or uniform. This homogeneity of the group and complete acceptance of its interior hierarchy may make class discussion easier in one sense, but also such homogeneity makes for very dull discussions. In fact, this dullness seems a common characteristic of Japanese society generally, for each group is extremely homogeneous and the group members really have little that is new or interestingly individual that they can express.

I find, on the other hand, that discussion with students is almost impossible if students from different class levels—different groups—are mixed. That is, your culture requires that upper classmen should monopolize any mixed group. Paradoxically, the E. S. S.—which apparently is supposed to teach the spoken English which the school system largely ignores—is also rigidly organized by age and class level. Conversation is, therefore, defeated. And because of cultural constraints once the teacher, the upperclassman, or the man has spoken, it is often virtually impossible to get the student, the lower classman, or the woman to disagree with their opinions.

On the other hand, it is difficult to teach spoken English in situational context in Japan. We cannot easily set up situational dialogues for conversation learning, because our Japanese students cannot really conceive of situations outside of their rather narrow limits of their culturally constrained group patterns. The contrast between *uchi* and *sotto*, which has been commented on by several social scientists, is very important. Therefore, it is, in fact, a significant social value which accounts for various cultural constraints on communication and language learning.

Yet, perhaps the most significant aspect of the influence of cultural constraints on your education system is the fact the system provides little if any experience with failure, with the *educational* experience of failure. Although the high school and university entrance examinations are perfect examples of the possibility of failure to gain entrance *into* a group, it is almost impossible to fail once you are accepted into a school, which represents a group. In fact, your culture does not permit your education system to prepare people for failure, perhaps because your groupistic society minimizes individual failure. And apparently you feel that there is really no need to train Japanese for exposure to the world outside of Japan in which you are so carefully protected and made completely dependent. But you should recognize that individual failure is not only possible but is a major preoccupation of most English speakers whose language Japanese students are trying to learn. I wonder, therefore, if in denying you the knowledge of what failure is like, your cultural constraints limit your ability to understand the motivations of English speakers.

However, your society's attitude toward education also tends to discourage development of habits of regular study. Not only is studying quite inefficient in Japan—since it depends far more on sheer memory for exam passing than on learning by relationships which will be retained—but few Japanese students study

daily

In fact, your culture does not require individual student effort, since he will move up with his group and really cannot fail. On the other hand, the bloc or group organization of Japanese school classes means that good students cannot move ahead according to individual ability but can only move ahead *en masse*, with their sometimes dull groups. Student incentive to learn is very low as a result. And once again we must wonder whether there can be much value to learning a foreign language if there is nothing that the student wants to say in that language.

Moreover, cultural constraints have limited the learning incentive of Japanese girls even more severely than that of boys. Here the roles of women are very narrowly limited; for all practical purposes we may say they can be reduced to a single role: wife and mother. In fact, if asked to mention some aspect of your modern society which is uniquely Japanese, I would immediately answer the restriction of Japanese women to such a narrow role, frustrating any intellectual challenge. I think Japan is the only major, modern industrial nation which denies women the possibility of using their intellects. Many stupid Japanese boys have thus been able to hold positions largely because they have been protected from competing with more clever girls.

The point is not that the job of wife and mother is not important. That job is very important. The point is, however, that your cultural constraints deny women any other way by which they can earn a respectable, satisfying living and a worthwhile career. It is true that thousands of Japanese women are employed; about half of the women employed are married, it is said. Yet, Japan is a manufacturing and exporting country and there is no real opportunity for women in either of those business activities. In Japanese factories women are used only for the most tedious and monotonous work and certainly they are not in policy making positions. In Japanese business

offices every year hundreds of women college graduates are hired to become *ocha kumi* essentially. Japanese women are not *unemployed*; they are grossly *underemployed*.

But of direct concern to me as foreign English teacher in a women's college, is the fact that most Japanese girls and women are, as a consequence, essentially goalless, that girls have no motivation, in terms of realistic goals, for using the English they study. Most college women know they will get no jobs in companies which will really utilize the English fluency that these young women might acquire. Many of them, in fact, study only as a means to escape recognition of their narrow fate, their dismal future. Most women's colleges obligingly provide a tragi-comically inadequate training or education which prepare graduates to do nothing by which they could make a living or a career. Most significantly, women graduates of four year colleges have much more difficulty in finding jobs than do graduates of two year *tandai*. In other words, a girl who seeks a fuller education is punished by your culture. Thus, your cultural constraints inhibit language learning.

In conclusion, I hope you will recognize that your efforts to teach English are not hand-

icapped mainly by the contrastive aspects of either linguistic structural differences or cultural interference with student performance. The problem is more basic: some of those values which I have called *cultural constraints* make it very difficult—sometimes impossible, it seems to me—for you to teach the English language and the culture of English speaking people. I hope, however, that as you struggle to teach English under such a handicap you will be aware that you are a means to challenging your students' cultural background. By showing them how cultures differ you may also show them that their culture can change. Perhaps they can be made to see that insistent preservation of such cultural constraints may be dysfunctional in terms of Japan's changed position in the modern world, that those traditional cultural constraints are in need of alteration to fit the new communication conditions Japan faces. Finally, then, your English teaching will be effective only to the extent that you do not support or encourage your students' acquisition of those cultural constraints on communication which seem to have handicapped communication and, therefore, language learning in Japan.

(p. 11 よりつづき)

国際的視野とはなにかという初めの設問に改めて答えるとすれば、なによりもまず現実の“国家(民族)エゴ”を正確に識別できる視座の設定だといえよう。それには自分が日本人であるという動かすことのできない事実を、座標軸にする以外にない。国際問題を日本(人)との関連で捉える態度は、国際人の第一条件と言ってよい。

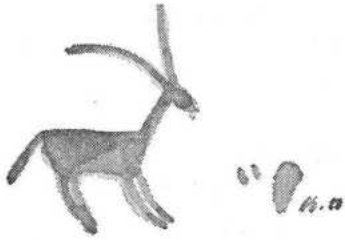
語学が国際的視野の拡大に重要な武器となるのは間違いないが、ガイジンと見たら英語で話しかける(英会話練習という実用目的は別として)“習性”は、かえって非国際的な“卑屈さ”を伴っているのかもしれないのだ。むしろ(相手も日本にいるのだから)日本語で *communication* をはかるくらいの方が、本当の国際理解につながるのではあるまいか。現に英語をしゃべれない国際人の数は、少なくないのである。

(国際問題評論家・前「ワシントン・ポスト」記者)

Solution to the Crossword Puzzle on page

57

C	H	R	I	S	T	M	A	S	D	A	Y
L	E	A	R	N	E	D		T		M	E
A		B		E	A		S	R	O		A
R	O	B	B	E	R		C	E	D	A	R
I		I		Z	E	B	R	A			L
F	A	T	H	E	R		E	M	P	T	Y
Y	E	S					B	E			
	S		S	T	R	A	N	G	E	R	S
B	O	T	H	E	R			R	A	I	N
A	P	R	O	N		A		E	D	G	E
T		A	R	T	I	C	L	E			E
H	O	P	E			F	E	A	T	H	E



焦点と前提

OTA AKIRA
太田 朗

変形文法の英語教育への応用については、*ELEC Bulletin* No. 23 (1968) に「変形文法の理論と応用」と題して私見を述べたことがある。その冒頭で、変形文法は、能力 (competence) と運用 (performance) の区別をし、それまでの所主として能力の解明に力を注いでおり、とりわけ文脈から独立して、文を最大の単位として、その文法性をもっぱら問題とするという抽象化を行なっているが、英語教育では、文脈を無視することはできないから、変形文法のような抽象的理論を英語教育に応用するには慎重な配慮が必要であることを述べた。変形文法が文脈を考慮しないのはよくないという批判は、変形文法が世に出た当初から Reichling などによってなされているが、しかし批判した人達自身も文脈を組織的に扱うプログラムを提出していなかったもので、その批判には力がなかった。文の意味解釈に文脈が必要であることはふわれなくても分っていることで、これをお題目のように唱えても説得力に欠けるわけである。しかし英語教育では、たとえ理論的、組織的研究は欠けていても、文脈に対する考慮を抜きにはできないというのが前記論文で私のいいたかったことの一つである。

しかしその後、文とそれが用いられる文脈との関係を組織的に扱えるような研究方向がいくつか出て来ている。本稿では、その中で英語教育で考慮に値すると思われる「焦点」(focus) と「前提」(presupposition) の問題を取りあげたいと思う。

変形というとき引き合いに出されるのは受動変形である。たとえば (1) から (2) を導くような変形である。

(1) The cat killed the rat.

(2) The rat was killed by the cat.

この変形をどう定式化するかについては、色々の意見があるが、今はそれにふれない。主語の NP に by をつけて後にまわし、目的語の NP を主語の位置にうつし、「be+過去分詞」にするとといった教室で普通行なっている操作であると大ざっぱに考えても、これからの議論に差支えはないからである。

「変形は意味を変えない」ということがよくいわれる。(1) と (2) の文を比較すると確かにある意味においてこの2つの文は同じ事柄をあらわしている。殺したものが the cat であり、殺されたものが the rat であり、殺した時が過去であるということはどちらの文も同様である。従って (1) の文が真であるならば (2) の文も真であり、(2) の文が真であれば (1) の文も真である。その意味においてはこの2つの文は同意表現である。多少の例外はあるが、一般的に能動態の文とそれに対応する受動態の文とは上に述べたような意味において同意表現である¹。

次の (3), (4) は (1) の文に分裂文 (cleft sentence) の変形を加え、(5) は (2) の文に同じ変形を加えてできたものである。

(3) It was the cat that killed the rat.

(4) It was the rat that the cat killed.

(5) It was the rat that was killed by the cat.

また次の (6), (7), (9) の文は、(1) の文に擬似分裂文 (pseudo-cleft sentence) の変形を加え、(8) の文は (2) の文に同じ変形を加えてできたものである。

(6) What killed the rat was the cat.

(7) What the cat killed was the rat.

(8) What was killed by the cat was rat.

(9) What the cat did was kill the rat.

この場合も、分裂文、擬似分裂文の変形をどう定式化するかという問題は論じないことにする。興味のある方は Akmajian 1970 などを見て頂きたい。ただ注意すべきことは、(3)―(5) のような分裂文も、それに相応す

1. 多少の例外というのは、たとえば下記 (i) の文では各々が異なる2言語を知っている場合がありうるが、(ii) の文では同じ2言語を皆が知っているという意味になる。

(i) Everybody in this room knows two languages.

(ii) Two languages are known by everybody in this room.

また (iii) の文では診察を拒否しているのは the doctor であるが、(iv) の文では John であるという違いがある。

(iii) The doctor won't examine John.

(iv) John won't be examined by the doctor.

る(6)―(8)のような擬似分裂文も同じ深層構造から出ているということである。また(9)のように VP (kill the rat) を was のあとに置く構造は擬似分裂文の場合にのみ許されることで、分裂文の場合に It was—that... の一の位置に VP は来られない。

受動変形の場合と同様、分裂文、擬似分裂文の変形はある意味において意味をかえないといえる。すなわち殺したものが the cat であり、殺されたものが the rat であり、殺した時が過去であるといった関係は同じである。その意味においては、(1)から(9)までの文はすべて同意表現であって、真理価値を同じくする。

次の(11)の文は(1)の文と勿論意味が違う。しかしその中には(1)の文と共通の構造が埋め込まれていて、その限りにおいて(1)の文と同じ意味内容(殺したものが the cat であり、殺されたものが the rat であるという)がその一部をなしている。

(10) It was easy for the cat to kill the rat.

(10)のように easy, difficult, hard, tough などの形容詞を主文に有する構造には、tough-movement という変形が適用できる。それは(10)の例でいえば、補文の目的語である the rat を主文の it におきかえて、(11)のような文を導く変形である。

(11) The rat was easy for the cat to kill.

(11)の文に分裂文変形を加えると(12)ができ、(11)に擬似分裂文変形を加えると(13)、(14)の文ができる。

(12) It was the rat that was easy for the cat to kill.

(13) What was easy for the cat to kill was the rat.

(14) What was easy for the cat (to do) was kill the rat.

(10)から(14)までの文は、その真理価値を同じくするという意味において同意表現である。

以上(1)から(14)までの文は二、三の変形を例にとって、「変形は意味をかえない」という主張がどういう意味であるかを検討したものである。一般的にいえば、何が動作主(主語)であり、何がその動作をうける目的語であるかといった関係(文法関係)は、変形によってかわらない、従ってこの限りの意味は深層構造によって規定されているということである。

それでは(1)から(9)までの文、(10)から(14)までの文は意味が全く同一であろうか。換言すれば変形は意味に関し、何の機能も果さないであろうか。

今 What happened to the rat? の答えとして、(1)の文(The cat killed the rat.)と(2)の文(The rat

was killed by the cat.)を比較すると、明らかに(2)の文の方が適当であることが分る。この場合適当か否かは、その文の真理価値の問題ではない。(1)と(2)は真理価値は同じなのだから、答えとして(2)が真なら(1)も真なのである。問題はこの特定の文脈では、(1)の文は不適当ということである。

一般的に、文の意味内容は、その真理価値と別にある特定の文脈で、ある部分は話者、聴者の共有する旧情報(old information)、残りの部分は話者がそれにつけ加える新情報(new information)というように分けて考えることができる。そして平叙文は、旧情報を主題(topic, theme)として主語の位置におき、新情報を主題に対する評言(comment, rheme)として述部の位置におくというのがノーマルな、無標の(unmarked)形である。日本語の「は」と「が」の用法は、上述のような考慮を抜きにしては論じられない。「は」と「が」については、久野 1973)。受動文というのは、能動文の目的語を主題として主語の位置におき、能動文の主語である動作主を by をつけて文尾におくことによって、これを無標の焦点とする構造である。What happened to the rat? という問いの答えとしては、the rat は話者、聴者共有の旧情報であるからこれを主題として主語の位置におき、残りは新情報であるから、これを評言として述部の位置におくのがノーマルな形となる。つまり(2)の文が適当な答えで、(1)の文が不適当ということになる。同じような説明は(10)の文に tough-movement を適用してできた(11)の文についてもいえる。(11)の文は the rat が主題で、残りがその評言となるような文脈で用いるのが適当である²。

所で新情報―旧情報という点から見ると、文強勢、音調という道具がこれと密接な関係がある。今(1)の文を rat に文強勢をおき、そこに音調の山をおいて(1)'のようになると、それは少なくとも、次の(15)―(17)の3つの問いに対する答えとなり得る。

2. 同一文中でも、次のような文では受動態と能動態とで文法関係が異なる。eating supper の意味上の主語になるのは (i) では the farmer であり、(ii) では the cows である。

(i) The farmer milked the cows before eating supper.

(ii) The cows were milked by the farmer before eating supper.

同様に (iv) では antiquatedなのは the violin であるが、(iii) では antiquated が後続の部分とうまく結びつかないので不適格な文となる。

(iii) Though antiquated, it is easy to play sonatas on the violin.

(iv) Though antiquated, the violin is easy to play sonatas on.

(1)' The cat killed the rat.

(15) What did the cat kill?

(16) What did the cat do?

(17) What happened?

(15)の問いは、話者、聴者が The cat killed something という共通の理解（前提）の上にたって、その something が何であるかを問うており、(16)は The cat did something という前提のもとに did something が何であるかを問うており、(17)は Something happened という前提の上にその something が何であるかを問うている。(15)の文が The cat killed something という前提をもつということは、もしこの前提が満たされない時（たとえば、猫が何も殺していないような時）、(15)の問いを発すると、“Why, it didn't kill anything.” といった答えが期待される所から分る。“Why” というのは、問いの前提そのものが満たされない時、自然に出て来る応答である。

上の説明で用いた something を X で置きかえ、その X が A であるということを示す X=A で示すと、上述(1)' の 3通りの意味は次のように示すことができる。

前提 焦点

(18) The cat killed X. X=the rat

(19) The cat did X. X=kill the rat

(20) X happened. X=The cat killed the rat

(18)―(20)の左欄は話者、聴者が共有する情報でこれを前提といい、右欄は新情報であり、この文の焦点をなす。

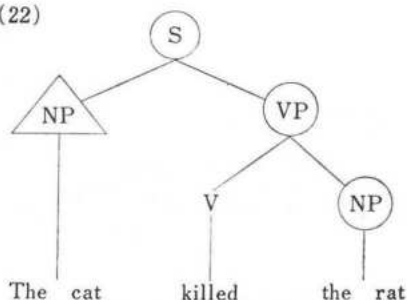
下記(1)'のように文強勢と音調の山をおくと、それは(21)のような前提と焦点をもつものと理解され、(1)'のようにいくつもの意味にはならない。

(1)" The cat killed the rat.

(21) X killed the rat. X=the cat

一般的にある文の焦点は、その文の表層構造で文強勢をうける構成素か、文強勢をうける構成素とその前に来る構成素があわさって一つの構成素を形成する時その全体となる。(1)の文は(22)のような表層構造を有する。そして(1)'のように the rat に文強勢がある時は、○で囲まれた節点に支配されている部分、すなわち the rat, killed the rat, the cat killed the rat が焦点となって、それぞれ(18), (19), (20)のような分析を許す。cat に文強勢がある時は(22)で△に支配されているもののみが焦点になりうるので、その前に来ているものは何もないのであるからこれは当然である。(1)'''のように

(22)



killed に文強勢があると、killed の前に the cat はあるが、the cat と killed はあわさって一つの構成素を形成しない(the cat と killed だけを支配する共通の単一の節点はない)から、この場合も解釈は1つしかない。(1)'''は(23)のように分析され、What did the cat do to the rat? の答えとして適当である。

(1)''' The cat killed the rat.

(23) The cat did X to the rat. X=kill

以上では(1)のような文が文強勢のおき所によって前提と焦点の関係がかわって来ることを見て来たのであるが、その中で、(20)のような解釈は文全体が焦点になっているので、前提がないわけである。一般的にいって強勢を普通にうけうる語の中で最後の語に文強勢があると、その文の一つの解釈として、文全体が焦点となって前提なしというケースが出て来る。前提がない文が典型的にあらわれるのは会話のはじめの部分であって、それは文脈を予想しないですむからである。強勢をうけうる最後の語に文強勢があるような文をノーマルな無標の強勢、音調の文というのは、(前提なしという意味で)文脈から独立している文の強勢、音調という意味であって、使用度数が多いか少ないかという問題ではない。いずれにしても、適当な所に文強勢をおくというのは、英語教育では大切なことである。

所で(3)―(5)の分裂文で It was—that... の一の所に来るのは焦点、that 以下の部分は前提である。従って、分裂文で文強勢をうけ、音調の山になるのは It was—that... の一の位置に来る要素である。(3)の文の意味は(1)'と同じく、(21)のようになり、(4)の文の意味は(1)'の3通りの意味の中の(18)の意味と同じである。(6)―(9)の擬似分裂文の役割りも分裂文と同じく焦点と前提の関係を示すことにある。擬似分裂文の場合は what...was—の一の位置に来るのが焦点、what...の位置に来るのが前提である。そしてこの場合には上述の意味でのノーマルな、無標の文強勢、音調によって焦

(p. 50 へつづく)

英語になった日本語 (1)

—ウェブスター第3改訂版の日本語—



HASEGAWA KIYOSHI

長谷川 潔

日本語には、英語を中心とするヨーロッパ諸国語から日本にはいりこみ国語化して一般に使われるようになった外来語がかなり多い。外来語辞典として最大の内容を誇る『角川外来語辞典』(荒川惣兵衛著、角川書店、1967年)の収録語数は2万5千余語になるという。しかも、このうちの約80%が英語から来たもので、他のヨーロッパ語を起源とする外来語と比較すると、その数は圧倒的に多い。

一方、英語の中にはいり込んだ日本語は、どの程度あるのだろうか。ひと昔前の、Skeatの語源辞典にはharakiri, soy(しょうゆ)の2語しかでていないが、その後bonze(坊主), tychoon(大君), typhoon(台風)などが戦前の辞書にも記載されるようになった。

しかし、現代の辞典になると、英語化した日本語の数もぐっとふえて、Websterの第3改訂版には、200語あまりがはいっている。これらの日本語が、どのような基準によって選ばれたのか定かでないが、amanori(あまのり), akebi(あけび)のように、現代の日本人には比較的なじみのうすくなった天然自然物をはじめ、baka bomb(特攻機), banzai attack [charge](決死の突撃)のような、戦争の名残をとどめる単語もみられる。

このように英語の中に入りこんだ日本語を起源とする単語の定義について、筆者はかねがね疑義をいだいていたが、今般、たまたまフルブライト客員教授として、アメリカ人学生に日本語を教える機会を得たので、これらの単語と、Websterの定義をとうしゃ印刷してアメリカ人学生に配布し、どのような意味に受けとめるか調査してみた。

調査対象となった約20人の学生は、イリノイ大学大学院、学部(3, 4年生)に在籍していて、その半数は、アジア研究、日本史、文化人類学、比較文学など、なんらかの形で日本に強い関心をもつ学生であるが、残りは、生化学、数学、音楽、演劇、アメリカ文明など、日本とまったく関連のない学科を専攻している学生である。

また、日本とは地理的になじみのうすいアメリカ中西

部に在住しているためもあるが、日本を訪問した経験のある学生は4人にすぎない。したがって、彼等がWebsterの語義から受けたイメージは、きわめてアメリカ的であるといえるだろう。

Aの項から、Webster第3改訂版に記載されている英語になった日本語と、その語義をまずあげて、それに対して、アメリカ人学生がどのように理解したかにつき、具体例をあげながらの、筆者の見解をまとめてみたい。

Aの項

A-1 akebi

An eastern Asiatic vine (Akebia quinata), valued for its oily seeds and as material for basketmaking.

(東アジアのつる植物の1種。油分の多い種子と、かご作りの材料として尊重されている。)

あけびのつるに関する記述はともかくとして、“valued for its oily seeds”という説明は、日本人が「あけび」を植物油をとるために栽培しているという誤解をまねきやすい。

次のように多くの学生が、果実としての「あけび」よりも、「ごま」、「なたね」のように食用油をとるための植物として理解したものが多かった。

[例1] A plant, vine to be specific, that probably grows in China or Japan. When harvested the seeds are probably pressed to get the oil out which might be used in the same way we use vegetable oil. The body of the vine when dried can be woven making it quite suitable for such constructions as basketweaving.

[例2] The oily seeds sound like goma.

[例3] A strong vine plant whose stalks are used to weave basket containers, and the seeds of which are probably used as a cooking oil.

「あけび」を知っている日本人ならば、まっ先に頭に浮かぶのは、紫がかったゼラチンのような果肉であろう。都会育ちの人ならば、「あけび」なんか見たことも

ないと言う人も多いだろう。数多い日本の植物の中からなぜ「あけび」が特に選ばれて Webster に記載されているのか疑問に思われる。

A-2 amanori

An alga or a product prepared from algae of the genus *Porphyra* comprising purple gelatinous seaweeds that are dried and pressed and are important as food in Japan—called also laver, nori.

(藻の一種。あるいは、紫色の、ゼラチンを含む藻から作られる産物。乾燥され、圧縮されたもので、食物として日本では重要。)

「あまのり」という、現代の日本ではほとんど使われていない単語が、Websterにこうして記載されていること自体に、驚かされた。たまたま、日本語の「甘い」ということばを知っているため、次のように想像をたくましくした生物学専攻の学生もいる。

[例1] This species of nori is probably used much in the same way as *porphyra laciniata*. The difference being that as the name refers this type is probably sweet. It would thereby make a good substitute for our sugar.

「あまのり」というのだから、多少の「あまみ」があるのかもしれない。しかし、「のり」から「あまみ」を連想する日本人はまずないだろう。まして、砂糖の代替物として用いることなど、想像外のことである。

日本に2年在住し、上智大学の国際部を卒業してきた大学院生は、次のように述べている。

[例2] My view of nori is presented under *nori*, a purple seaweed. I am not at all familiar with the particular term *amanori*.

Aの項ではないが、「あまのり」の関連として *nori* をみても、次のように定義されている。

A-2 (amanori の関連) nori

a) An alga or a product prepared from algae.

b) Specif., a purple seaweed (*Porphyra laciniata*), in Japan dried and pressed into sheets and used, crumbled, to sprinkle on food.

(a) 藻の一種。あるいは、藻から作られる産物。b) 特に、紫色の海藻のひとつで、日本では乾かされ、薄く紙のように圧縮され、こなごなにして食物の上にふりかけて用いられる。) 或る学生は、「この a) の説明はあまりにも一般的すぎて、すべての海藻や海草から作られる産物を「のり」と呼ぶような印象を与える」と次のように述べている。

[例1] This definition is very general. It seems to

classify all algae products as *nori*. I would say that this definition is too vague and is inadequate in the description. I can not acquire any more of an understanding of algae than I had before.

Webster には“specific”として、紫色の海藻とあるが、ふつう日本人が生のにに対してもつ色のイメージは緑または黒緑ではなかろうか。もっとも、アメリカの大きな食料品のスーパー・マーケットには紫がかった安い「のり」を売っているのだから、こういうところから紫という連想が生じたのかもしれない。

しかし、「こなごなにして食物にふりかけて用いる」という説明は、「ふりかけのり」は別として、「のり」の一般的な用途の説明としては、不十分であろう。また、ただ単に「食物」にふりかけるとしてあるため、「のり」を調味料、または、香料のようなものと考えた学生が多かった。

[例2] I think *nori* would be used in Japan much as we here in America would use salt or pepper.

[例3] A bright colored plant substance used as a herb in Japanese food preparation.

このように「のり」を薬草、または香料として用いる考え方も日本人にはないものである。しかし、日本在住の経験のある学生は、「のり」を次のように、ほとんど正確に定義している。

[例4] *Nori* is known by me through *norimaki* or cooked rice sprinkled with *shoyu* wrapped with burnt rice and ground green tea (like that used in *Chado*) and all this is mixed with rice and tea for *ochazuke* after Japanese meals. *Nori* is used to wrap *sushi* to give the rice cake the beautiful shape. A small piece of sheet-*nori* is often used to garnish *nigiri*, a simple outdoor rice cake. *Nori* is found almost anywhere rice is found in Japan to add color and flavor to a staple of the Japanese diet.

A-3 ansu

a) Apricot.

b) A variety (*Prunus armeniaca ansu*) of the apricot, native to Korea but cultivated also in Japan.

(a) アプリコット b) アプリコットの変種。韓国原産だが、日本でも栽培されている。)

「あんず」という、これも日本人が特に一般に広く食用としていない単語が、日本語の外来語として選ばれて、ウェブスターに記載されていることが不思議に思わ

れる。AFS の学生として日本の高校で1年勉強してきた女子学生も、「あんず」は日本で見たことも、食べたこともないと述べている。

[例1] *I have never seen nor eaten an anzu in Japan, but from the above description I gather that an anzu is a small orange colored fruit with a rather sweet taste.*

ところが、日本に在住したことの無い学生は、アメリカ人が「アブリコット」をよく食べるように、日本人も「あんず」を一般的に広く食用としている果物と解釈する。

[例2] *This fruit was probably imported to Japan a long time ago. Since then it has been used as commonly as we use apricots.*

A-4 ayu also ai

A small salmonlike fish (*Plecoglossus altivelis*) of Japan. It lives in fresh water but goes to the sea to spawn. Called also sweetfish.

(小さな鮭に似た、日本の魚の一種。淡水に棲息するが、産卵のため海に行く。sweetfish と呼ばれる。)

Webster 2 版の「鮎」の説明文は簡潔でよいと思ったが、第3 版では事実と全く反対の事を書いている。鮎は、淡水魚ではあるが、産卵してから川を下り、海で死ぬのである。

川端康成の名作『山の音』の最後の章にも次のような一節がある。

「昔、田舎で、保子の姉さんにすすめられて、ちょっと、俳句をひねったことがあったが、秋の鮎とか、落鮎とか、鯖鮎とかいう季題があるね。」と信吾は話し出して、ふと保子の顔を見たが、後をつづけた。

「卵を産んで、疲れ切って、見る影もなく容色が衰えて、ひょろひょろ海にくだる鮎のことだ。」

このように鮎は「卵を産んで海にくだと、死んでしまう」のであるが、Webster の事実と誤った定義を読んだ、生物学専攻の学生は次のように述べている。

[例1] *This fish unlike the salmon of America lives in fresh water and spawns in the sea whereas American salmon live in the sea and returns to its tributaries to spawn. The fish is no doubt captured and eaten. As the name implies it has a sweet taste to it.*

どの和英辞書をひいても、「鮎」の項には、sweetfish という訳語が書かれている。それで、Webster でも“Called also sweetfish”と説明しているが、“sweetfish”という訳語から、一般のアメリカ人が受けるイメージ

は、「甘い味」のする魚である。

[例2] *By this description I would picture ayu to be small and have a reddish color. Since ayu is also called sweetfish, I would think that this type of fish would have a sweeter taste than salmon. Since the Japanese eat a lot of fish I would imagine ayu is a very popular food.*

英語には salmon pink ということばがあるのだから、a salmonlike fish という Webster の定義から、この学生は「鮎」の肉も鮭のように赤味がかったものと連想したのであろう。

A-5 awabi

An abalone (*Haliotis gigantea*) (あわび)

abalone という英語のことばがあるのに、awabi が記載されている。しかし、abalone は一般的なことばではないらしく、Webster のこの定義だけでは、植物か動物かわからないという音楽科の学生がいた。

[例1] *I don't know what an abalone is. Is it a plant or an animal? It must be something large.*

これが、生物学科の学生となると、次のように正確に定義している。

[例2] *A shell from the mollusk class that is probably used for food in Japan as it has soft interior.*

また、日本人を両親にもつ、二世の学生は「あわび」を実際に食べたことがあるらしく、食用としての「あわび」、さらに、女子学生らしく装身具として用いられる「あわび」の具がらについても述べている。

[例3] *Abalone is a type of shell fish. It looks like a large clam or oyster. The flesh or inside of the shell is eaten and the shell itself is used as an ornament. The shell is a source of mother-of-pearl. Abalone is expensive here in the U.S and is quite good to eat if fresh.*

B の項

B の項には、bai-u, baka bomb, bancha, banzai, banzai attack など、10語以上もの日本語が記載されているが、baka bomb, banzai attack のように日・英混合語が2語もある。

B-1 bai-u

Relating to the spring or early summer rainy season in China and Japan.

(中国および日本の春から初夏にかけての雨の季節)

「つゆ」という一般的な表現でなく、「梅雨」(bai-u)として記載されているのはどういうわけであろうか。「つゆ」ということばは、日本語の初級のクラスで習ったが、bai-u は知らないという学生が多かった。

【例1】 *Bai-u is a term I've never heard of. From this explanation, the term still remains vague to me. Whether it is because the term is general or because it is a poor definition, I don't know.*

「中国および日本」という広大な地域をひとまとめにしているので、一般的な定義とうけとめられたのであろう。日本のつゆを、インドや東南アジア諸国の雨季と混同して、“seems to refer somewhat to the monsoon season”と考えた学生が多かった。このような連想から、しとしとと雨が降り続く日本の「つゆ」よりも、突然にざあっと降る夏や秋の豪雨と解釈したようである。

【例2】 *This is the part of the year when sudden torrential downpours are not uncommon. When it rains it prevents much outdoor work.*

「つゆ」のような自然現象は、日本に在住したことのある学生には、ほぼ的確に理解することができる。

【例3】 *This is usually during the month of June in Japan. During this period of time it rains every single day. It is often quite humid during this period also. Bai-u season is very important to the Japanese because this is the time they plant their rice plant.*

この“...it rains every single day.”というのは、やや大げさな表現かもしれないが、田植のためには、梅雨が大切だというのは、かなり具体的に「つゆ」の意義を理解していると考えてよいだろう。

B-2 baka bomb also baka

(Jap. baka, lit., fool, fr. ba horse+ka deer): A Japanese rocket-propelled bomb-carrying airplane guided by a suicide pilot and used in World War II.

(「文字通りの意味は「ばか」馬+鹿」爆弾を積んだロケット推進式の日本の飛行機。飛行機と共に自爆しようとするパイロットによって操縦され、第2次世界大戦において使われた。)

これは、いわゆる日本の「特攻機」のことであるのはいうまでもないが、どういうことから「馬鹿爆弾」なんということばができたのであろうか。この定義は正しいと思うが、このことばの由来について興味がある。

戦後に生まれたアメリカ人学生が、はたして特攻機のことなど知っているかと思ったが、テレビなどで、今だ

に放映されている戦争映画を見ているらしく、“We call it kamikaze plane.”と答えた学生が何人かいた。また、次のようにさらに具体的に説明した例もあった。

【例1】 *This was a cheaply built airplane in which a pilot intent on serving his emperor to the best of his abilities would fly his plane into an enemy ship in an attempt to sink or destroy it.*

日本在住の経験のある学生は、「ばか」ということばは、日本人の日常語としてよく使われているが、なぜこのことばが「飛行機」と結びつけて使われているのかわからないと述べている。

【例2】 *Baka in Japanese means fool or stupid and is found in common everyday language. From the description I would be safe to guess that a baka bomb is a fairly old type of plane and is probably no longer in use. I was wondering why this kind of airplane would be called “stupid.”*

爆弾と馬鹿とのことばの結びつきについて疑問をもった学生は多く、“Although the meaning is not funny, the word itself is very funny to me.”と答えた学生もいた。

英語でも、「愚かな人」のことを“a silly goose”のように、動物と結びつけて連想することがあっても、baka bombのようなコンビネーションは不自然と思われる。

B-3 bancha

A coarse Japanese tea that is usually not exported. (日本の粗茶で、輸出されていない。)

番茶のように一般的に広く日本の家庭で使われている語が、外来語として Webster に記載されているのはよいことだと思う。ただ、“coarse”という語の与えるイメージによって、日本人がよく飲んでいる番茶とは異なった連想をアメリカ人に与えるらしい。

【例1】 *I would think that bancha is more common with the country peasants than urbanites. Probably it is not served in restaurants nor in tea ceremonies.*

「粗悪な茶で、輸出されていない」という解説によって、このような印象を受けるのであろう。多くの学生が、“a low grade inexpensive tea probably used only by poor people”と考えていた。しかし、実際には番茶にもビンからキリまであって、かならずしも安いものとは限らない。輸出されて、アメリカのスーパーマーケットでも売られている。したがって、“It's a kind of tea which Japanese people often drink after meals.”とでも定義

すべきであろう。次の学生の説明は、「番茶」と「ほうじ茶」とを混同しているが、ある程度、「日本茶」に対する知識があることを示している。

[例2] Bancha is among the less expensive brands of the available in Japan. It is widely drunk as a tea for everyday. *It's flavor is improved by a slight toasting in an oven before preparing it.* Unlike *gyokuro* teas one must use boiling water to bring out the flavor of this tea.

B-4 banzai attack or banzai charge

A reckless desperate mass attack originated by Japanese soldiers and accompanied by yells of "banzai" and insulting taunts.

(日本軍によってはじめられたむこうみずで死にもの狂いの総攻撃で、「万歳」という叫び声と、侮辱的なあざけりの声をとまう)

これはあきらかに第2次世界大戦からきた表現であるが、今だに Webster の第3版に記載されていることは、日本人として考えさせられてしまう。しかも、映画で「万歳」という叫び声をあげて死んでいった日本兵士の姿を見た学生がかなり多く、次のようなコメントを書いてきた。

[例1] A banzai attack was popularly known in America during and after World War II. It became characteristic of *Japanese soldiers portrayed in movies about World War II.*

This was used as a last-ditch effort when almost everything else would fail (and reminds me of the flying suicidal attempts used). It was a mass attack originated by Japanese soldiers.

It became known as a banzai attack since it was accompanied by yells of "banzai" and jeering taunts.

このような定義のしかたは、第2次大戦の「日本兵士の攻撃」のきまり文句として「万歳アタック」という表現を定着させてしまうおそれがあると指摘した親日派の学生もいる。

[例2] I've only heard of *banzai attacks* in books and films. This definition strengthens the stereotype as it has always been portrayed "a reckless desperate mass attack." It overlooks other motivations.

Webster のこの語の定義で、もうひとつ問題になることは、「万歳」という表現が、日本人の用いる "insulting taunts" のひとつとしてとられるおそれがあること

である。そこで、日本在住の経験のある学生は、次のようなコメントを書いてきた。

[例3] Banzai is a Japanese idiom meaning, "may you live ten thousand years!" It is not an insult or a taunt but a toast to encourage brave action in a moment of peril. It is often spoken as a toast when drinking.

(次号に続く)

(イリノイ大学フルブライト客員教授)

(p.45 よりつづき)

点が示される。(6)は(3)と同じく(21)のように解釈され、(7)は(4)と同じく(18)のように解され、(9)(19)のように解釈される。音声言語では、文強勢や音調の山による区別ができるが、文字言語では(斜字体を使うなどの手段によらなければ)それができないので、分裂文や擬似分裂文が有効な手段となる。

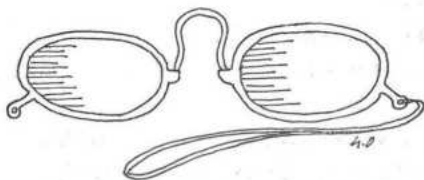
以上のような問題は、冒頭に述べたように文脈から独立して、文を最大の単位として、その文法性のみを論じている時には出て来ない問題である。しかし、はじめから「意味」という名のもとに何もかも一緒にして扱っていたら、真理価値にかかわる知的意味と焦点-前提の区別も、それにからまる深層構造、表層構造の役割りも、はっきりしないまま終わったであろう。言語理論研究のためには、一時期ある問題に集中するということは、避けられないことであろう。しかし英語教育のためには、常に全体を頭に描いていないといけない。

(東京教育大学教授)

引用文献

Akmajian, Adrian. 1970. Aspects of the grammar of focus in English. MIT dissertation.

久野 暉 1973. 「日本文法研究」大修館。



SILENCE IS NOT ALWAYS GOLDEN (5)



David Hale

Lecturer

Harrow College of Technology and Art

4. Some Polite Phrases: A few suggestions for various occasions

e) Favours

It can seem grasping if you ask someone to help you and you do not take the trouble to put it politely. In Japan everyone always seems extremely kind, and most foreigners will also go out of their way to help, but feel happier if it sounds as if you do not automatically expect them to. In this context the time-factor is rather important. Please give as much notice as possible when you want something done. The average foreigner in Japan, if he's anything like me, has to work very hard and can sometimes barely find the time to eat. Give him plenty of notice if you want him to write something for you, or judge a competition. On many occasions I have been genuinely disappointed that it was a physical impossibility for me to do what was required in the time suggested (though sometimes, admittedly, I was relieved!) Some phrases like:

"Would you mind reading through this script for me?"

"I hate to trouble you but, is it possible for you to...?"

"I wonder if you would be so kind as to (write a short encyclopaedia by tomorrow) for me?"

"Could you possibly find time to...?"

"I know how busy you are, but we happen to need (a judge for our ten-hour non-stop debating contest) and we thought perhaps you might oblige us?"

"We'd be very grateful if you could..."

and so on.

In a similar vein, should you need to ask

someone to repeat themselves, or to speak more slowly, do not hesitate to ask them. You will benefit by it, but so will they, since no one wants to feel that all his little pearls of wisdom or wit are being wasted on the desert air. All you have to do is use some polite phrase (after all it is not his fault if he speaks fast) such as:

"I'm sorry, would you mind repeating that, I didn't quite catch it?"

"Sorry, could you please repeat that, I'm afraid I missed it?"

"Do you think you could speak just a little more slowly for me, please?"

"Would you mind speaking a bit slower, please?"

N.B. The form "Would you ___ing" is very common and of great practical use.

Or if a word or phrase is recurring in a speech and you do not know it, ask:

"What is an enzyme?" (repeating it as closely as possible)

or *"What does 'darn your eyes' mean?"*

f) Thanks

Japanese itself is a language with a marvelous fund of polite and very delightful phrases for almost all occasions. The foreigner is lost if he tries to follow some of their complexities. English, I think, is simpler at least in this respect, that although a variety is available, a number of basic phrases will do for many occasions. And the sentence patterns have much in common. At the end of this section I'll list some of the most functional ones.

In thanking someone for something of course the tone of conviction is necessary. Otherwise, English being a language of irony, (and the

least pleasant level of irony being sarcasm,) you may find yourself antagonising someone if they should definitely be made to feel that you didn't like that pair of bright red socks, or that hideous glass flower-vase! Again the facial expression and general appearance are involved, and your real sincerity will, I'm sure, shine through. But a few common expressions will be useful.

"Oh! How very kind of you." (for practically anything)

"Thank you very much indeed." (for a present etc.)

"That was very kind of you." (for a present etc.)

"But that's very generous of you..." (for a present or favour)

"Thank you so much. But you really shouldn't take so much trouble." (for a present or favour)

"That's extremely good of you." (for a favour)

"I enjoyed myself tremendously the other day." (for a party)

"That was really fun." (some shared occasion at the other person's expense)

If food was concerned then any remark, suitably convincing, as to the fine taste, general deliciousness, or astonishing variety and so on of the delicacies eaten, will be quite in keeping, though not the quality as it is tacitly assumed that that was first-class!

There may be a tendency for some people to feel very grateful, for help or advice and so on, but to keep it very much to themselves. In fact of course if they do not acknowledge that someone has gone to some trouble for them, they can make a rather poor impression. Try not to take it for granted that the foreigner is available at all times and for everything unless you do let him know you appreciate it! Certainly, though, most people do.

g) Appointments and Invitations

Often people need to make some kind of appointment and one or two suggestions might be useful as guide-lines. Even at extremes of

social disparity it might be fair to say that people speak, in English, with almost the same degree of politeness.

If you, the Company President, are virtually commanding the boot-boy to be at a certain place on a certain day at a certain time, you would show your position, perhaps not by being curt or giving sharp orders, but by being 'polite'.

The conversation might go like this:

President: "Well, my boy, and do you think Tuesday is alright?" (actually a rhetorical question)

Boot-boy: "Yes, Sir, very fine!"

President: "And, Ah! About three o'clock?"

Boot-boy: "Oh, yes, Sir. Very good, Sir."

President: "Let me see, at the top of the Eiffel Tower, eh?"

Boot-boy: "Certainly, Sir. I'll make sure not to be late."

One thing to be very careful about in Japan, of course, is that you get the place, time and day exactly right. I needn't refer to those mysterious occasions on my arrival in Japan, when I still trusted people's ability to translate the days of the week, or the time of day. I spent many hours on magical mystery tours looking for the person I knew I had arranged to meet. He, however, was still in bed, or playing pachinko, or something, quite oblivious that instead he had himself made a magical mirage of mistakes.

You must check your facts. Day of the week, and month for good measure sometimes; time of day and exact place (remembering that few 'gaijin' in Japan can read the *kanji* that would make a lot of things clear for them). If you feel the slightest bit doubtful as to whether you have come to an agreement or not, or whether you have really got all the details correct, check again. Then write them down somewhere or something, but don't forget them!

Some phrases useful for making a date might be:

Proposer: "*How would Tuesday 14th May*

do for you? At six o'clock?"

Receiver: "Let me see... Yes the 14th will be alright. Of May, isn't it? Yes, *that will be quite all right with me.*"

Proposer: "Oh, good!"

Receiver: And *it was six o'clock you mentioned, wasn't it? That will be just fine. Where do you suggest we meet?"*

Proposer: "*How about that big underwear shop on West 3rd Street?"*

Receiver: "Ah, yes. *I know the one you mean. It has the nude models in the window modestly covered in brown paper when they aren't in use! That's fine, see you there on the 14th at six. Goodbye.*"

or if some changes have to be made:

Proposer: "*Can you manage Wednesday 26th? I'm afraid I'm awfully busy 'til then.*"

Receiver: "Oh, I'm very sorry, *actually I believe I shall still be away in Outer Mongolia on the 26th. But would the 30th be any good for you? I'll certainly be back by then.*"

Proposer: "Yes, the 30th is O.K. for me too. *Could you make it around four?"*

Receiver: "Oh, *I really am sorry to keep changing everything*, but four is a bit early for me. I'm usually only just getting out of bed. *But six would certainly be alright.*"

Proposer: "Oh, that's alright, *six will suit me just as well. Can I see you at the Hotel Kon Kureto Nitomeah in the foyer at six?"*

Receiver: "*Now let me see...* The Kon Kureto Nitomeah, which one is that? There are so many hotels here and they all look the same to me. *Couldn't we meet just inside the Mental Hospital as that's on my way?"*

Proposer: "*Certainly, that's alright. Thank you very much.*"

Receiver: "*Is that really alright? That's very kind of you. You're sure I'm not*

taking you out of your way?"

Proposer: "*No, that will suit me fine, I'm a regular patient there anyway!*"

Then, just before parting, you should check all the details once more to make sure you have both understood and agreed on them:

Receiver: "So, then; it's the 30th, isn't it?

At six o'clock just inside the Mental Hospital? Alright then, that's fine for me too. See you then. Goodbye!"

Some other connected phrases for proposing something are:

"Could we perhaps meet at...?"

"Would you be free on...?"

"Are you available for a party on Friday this week?"

In this case it is advisable to state immediately what particular thing it is you have in mind. If you are suggesting that you need a proof-reader for that encyclopaedia you can hardly expect the same enthusiasm as if you are offering free beer in vast quantities.

"*Would you be able to baby-sit for me on Saturday?"*

"*Is there any chance that you could come for...?"*

"*I suppose you're not free on Monday, by any chance?"*

and for accepting:

"Yes, that'll be alright."

"Certainly, I'd be delighted."

"Well, yes, I do happen to be free then."

"Let me see... (looking into your diary)... Thursday is it?... Ah, yes, it's quite alright as far as I'm concerned."

or for refusing:

"Oh! I'm very sorry, I've already made an appointment for that evening."

"That's a pity, I'd love to; but I'm afraid I'll be busy just then."

"I wish I could but..."

"I'd like to be able to, but, wretched meetings, you know..."

I might just mention again that if you are proposing something, you should state *exactly* what it is, what is involved, and who is

involved. Is it to be a beer-only party, no food? Will your invitee arrive already fed and be promptly served with masses of delicious eats which it will be impolite for him to refuse? Or conversely will he come expecting refreshments, having eaten nothing since the previous evening in anticipation, only to find that you are offering him cups of green-tea for the next five hours? Will he bring his wife, as most social invitations in the west include that hard-working individual, only to find a marvellous stag-party in full swing? A little bit of thought will enable you to realise that what you take for granted as understood by everyone of your own culture-pattern may be a complete mystery to the outsider. And embarrassment is contagious!

It might also be useful to make some suggestions on one aspect of different cultures to suggest lines of difference which might affect others. The *time-factor* in a nation's life is peculiarly its own. In Japan, for example, you may almost count on everyone having lunched by 12.30, but frequently in the west people may still be taking lunch at 1.30 or even 2.30. When you invite people, or meet them off a plane, for example, you should consider whether they know the general time-scale and act accordingly, e.g.

"By the way, have you had lunch yet?" As I mentioned before, letting people know what they are in for, is also a social obligation, and this could come under the heading of 'conversational phenomena.'

Useful, too, might be a section on etiquette at meals, the different reactions to the 'slurping' of soup, and so on, but this verges on that other book about contrastive culture patterns in social life. Conversationally speaking, however, some phrases might be useful to stop your host from pouring milk, which you may detest anyway, into your green-tea. One large problem is of course that of the negative question:

- i. Q. "*You don't take milk, do you?*" (implying that the host thinks you don't)

- A. "*No, I don't*, thank you." (if you don't)
or "*Actually I do*, please!" (if you do)
ii. Q. "*Wouldn't you like* a little more potato?"
A. "*Oh, no thank you*: I really couldn't." (if you are full)
or "Well, since you ask, *I think I will* try a little more. It's so delicious." (if you like the taste!)

With this kind of question the thing to remember is that the negative of the answer restates the whole verb of the question:

- Q. "*Won't you have* another glass of lukewarm milk?"
A. "*No, I won't have* a fifteenth one, thank you all the same."

In Japanese the answer would be "Yes, I won't have one." But this apparently contradictory 'Yes-no' is impossible in English and will confuse your host, to say the least, if you carry the pattern over.

Also the 'Yes' of the answer qualifies *your* verb of reply and not that of the negative question:

- Q. "*Wouldn't you like* to go to Mars?"
A. "*Yes, I would*, if I could get o-sushi there."

But I'm afraid these questions have to be learned the hard way, though it is not as difficult as it may seem at first sight. Practically it can be learnt best by the guest who finds himself going hungry when he wants more to eat, or discovers the third glass of beer by his chair when he is teetotal. Necessity is the mother of invention, they say!

To return to invitations: more formal ones require more formal phraseology, but the same general points mentioned above also count: date, time, place and reason. It is often considered polite to mention who else will also be invited, and usually what the exact nature of the event is. Some people are embarrassed to discover, too late to bring a gift, that it is their host's 114th. birthday, or the 33rd. anniversary of his divorce. Asking someone to a function is not really so difficult, and accepting

such an invitation is also easy. The difficulty might perhaps come in trying to refuse something politely. Many of the above phrases are good for this, and the general principle might be to make your would-be host feel that you are sure you are missing a great thing! Some of the following might also help:

"I'm so disappointed I can't come, but it really is impossible, I'm afraid."

"I would so have enjoyed that, but I just can't manage it."

"It's a shame, but I'll just not be able to come for your party, I'm afraid. (The cat has to have an operation and I'll just have to take care of him.)"

Or, if you have to cancel a previously arranged affair:

"I'm so sorry, but I'll just have to cancel our dinner party; (the baby has caught measles, and I'd hate her to give it to my guests.)"

"And I was so looking forward to having you here, but I'm sorry, this business has cropped up unexpectedly, and I'll just have to go away."

In the above instances some reason or excuse is usually polite, and one relatively important to allow you to go against the previous plan. To say that the baby wasn't asleep and so you couldn't come, is not usually strong enough! Often, of course, the reason is not particularly honest, but it must sound both strong and convincing. In India the death of a relative is often offered as a reason for cancelling something, but make sure too many relatives don't die, and not the same one twice for the same person!

h) Polite Forms

Though I have mentioned many of these above, I'd like just to list some of the polite ways of *questioning* someone. It is very easy to make the 'gaijin' feel like the prime suspect in a murder case if you continually fire abrupt questions at him. The extended form of question is usually more padded and therefore less abrupt. Also here I'd like to put down some

useful phrases of a general kind with some comment on their function. It is of course completely impossible to be comprehensive, and I am simply limiting myself, as I do everywhere in these pages, to a few more common and useful phrases, in the hope that where a long list would swamp the reader, a short one will actually help him.

"Do you happen to know the time of (the next train to Little Widdlington?)"

"Do you know, by any chance, the price of (a pound of flesh?)"

"Do you remember the date when (Fred won the four-mile crawl?)"

"You don't know offhand the size of (a sumo-wrestler's waist,) do you?"

"You wouldn't be able to tell me how (this Japanese telephone directory works,) would you?"

"I wonder if/what/whether..."

Instead of *blunt statement* you could use:

"It seems to be (a man from Mars.)"

"I think it is (the best way to die.)"

"I would say it's a (greater-spotted gaijin.)"

"It might possibly be the quickest way to (go bankrupt.)"

In being unable to help someone you may find useful:

"I'm afraid not, this is the first time I've (been on the moon,) too."

"I'm sorry, but I just don't know (the population of Lithuania.)"

"I really can't tell, but it looks to me like a (lesser spotted Nihonjin.)"

There are in addition many words which can pad out a blunt statement to respectable proportions:

Maybe, perhaps, possibly; often, sometimes, never, rarely... etc. etc.

and in this connection, refer again to the section on 'length'.

Conversation becomes largely a matter of *habit*. Good habits are much more effective than bad ones. If you get into a set of wrong habits, using phrases which no one has heard of, or behaving in a way which is conversa-

tionally bad, it is very difficult to change. It's better to try to use good habits from the beginning, otherwise you have to work hard to erase them. When the expressions I have outlined here become habit to you there is no longer any need to worry about them and you can bend your mind to greater things, like the subtle thoughts you want to express. Native speakers often think on to what they are going to say later while they are politely playing the habit game of the opening. It can save time there and elsewhere, and time is important.

An example of habit might be found in the friend who is always offering to 'take you for a ride', or the one who persists in replying to the initial 'Hello!' on the phone with 'I'm fine thank you.' In the first case:

"Can I give you a lift?"

might narrow the range of possibilities in mind, and in the second, he could wait until asked to volunteer the no doubt very pleasing information on his state of health! Both friends I think may never manage to change because these reactions have become habit. Though we might do without mistakes, the charm of some of them is delightful nevertheless. I like particularly the student who asked:

"What can I do you in for?"

5. The Telephone

Much of what I have said above is pertinent to that perhaps most difficult of all experiences, trying to use English on the phone. Now you will realise how much more than the voice is responsible for communicating the meaning of words—by its absence. But, relaxation is maybe the key here, and use that by no means humiliating suggestion made several times before, that if you don't understand, ask for a repetition, if necessary, a slow one.

One interesting language phenomena here is, of course, the difference between 'hai' and 'yes.' 'Hai' in Japanese means sometimes 'Yes' but also 'I hear you' and it need not necessarily mean 'I understand you' or 'I agree with you.' So you must be careful not to say 'Yes' when

you don't mean it!

On the telephone some identifications are clearly necessary: who you are, if you are the caller, and to whom you wish to speak: if you are the receiver, your name or the family name.

A: "Hello!"

B: "Hello! This is Mr. Montgomery Smythe-Smythe's house. Can I help you?"

A: "Oh, hello! This is Mrs. Peach-Blossom speaking. May I speak to Mr. Smythe, please?"

B: "Certainly, I'll get him for you."

When you get hold of whoever it is you want, you usually greet them in some simple way, and, having stated who you are, you can then get down to business. Here again, factual details are important, and should be accurate and corroborated before you ring off, to check that you agree on them.

C: "Hello! Smythe speaking."

A: "Ah, good afternoon Mr. Smythe. This is Mrs. Peach-Blossom. How are you?"

C: "Ah, hello Mrs. P-B, I'm fine thank-you. I was hoping you'd ring this afternoon."

A: "Yes, I remembered you said you would like to know the result of the 3.30 at Cheltenham, so I..."

You must check and countercheck as fortunes, I understand, may be lost or won on a phone call. Mr. Smythe might continue:

C: "You did say, didn't you, that 'Green Pelvis' won the 3.30? And it was definitely at Cheltenham, wasn't it? And the price you mentioned really was ten thousand to one, eh?"

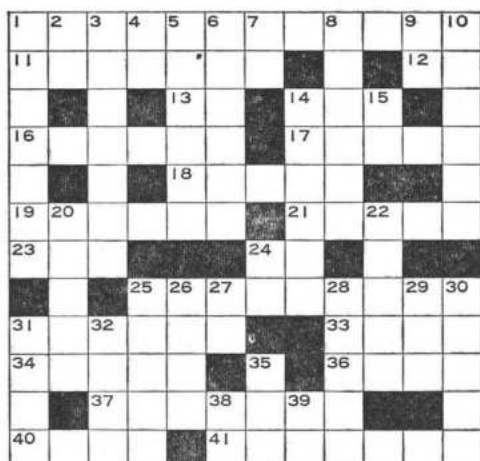
And, on confirmation of these details:

C: "Wonderful! I'm glad I put the family silver on it then, I might be able to pay off the mortgage now!"

To sign off, something 'closing' will be needed, though more or less anything will do in conjunction with the word 'goodbye.'

(Continued to p. 63)

CROSSWORD PUZZLE



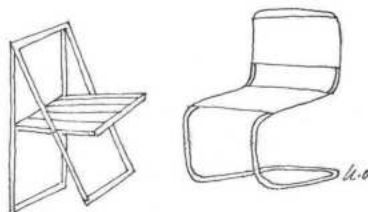
ACROSS

1. American winter holiday (2 words)
11. Gained knowledge
12. Opposite of *YOU*
13. Abbreviation for *EACH*
14. Abbreviation for *STANDING ROOM ONLY*
16. Person who steals from bank
17. Kind of tree
18. African animal with black and white stripes
19. Male parent
21. Opposite of *FULL*
23. Opposite of *NO*
24. To exist or live
25. People you do not know
31. Annoy
33. Water from sky
34. Women often wear one in the kitchen
36. Border or margin
37. *A*, *AN*, or *THE*
40. Wish for something with some possibility of getting it
41. Birds of a _____ flock together.

DOWN

1. Make clear
2. Not *SHE*
3. Animals with long ears
4. Abbreviation for *IRISH*
5. You may do this when you catch cold.
6. Someone who tears things
7. Abbreviation for *DOCTOR OF MEDICINE*
8. Small river
9. Not *P. M.*
10. Annually
14. You may show movies on this
15. Abbreviation for *DOCTOR OF OPTOMETRY*
20. Greek writer of fables
22. To appeal earnestly
24. Abbreviation for *BACHELOR OF ARTS*
25. Edge of the ocean
26. Used when camping
27. Abbreviation for *RAILROAD*
28. To say "Hello" or "Good Morning"
29. To equip a ship with ropes, etc.
30. Show contempt
31. Place to wash yourself
32. You may use one to catch an animal
35. Playing card with one spot
38. Whether
39. DO, RE, MI, FA, SO, _____

The solution to this puzzle may be found on page 42.



C. V. Harrington

『アメリカの南部』

井出義光・本間長世・大橋健三郎編

研究社刊, 372pp., ¥2,000

KUNIHIRO MASAO

國弘正雄

もう10年も前になるうか、たしか倉敷のホテルで南部史の大家でイエール大学のC.V.ウッドワード教授と話していたときのことである。この南部はアーカンサス州出身の中老の紳士は、南部人独特の柔らかい口調で、「われわれもまた近い過去において戦敗の経験をもつだけに、日本人が沖縄問題について抱く悼みの念や屈辱の思いは、他人事ではなく身にしみて理解できる」と述べ、私をはっとさせたことがある。すでに私はいわゆる南部全州をつぶさに歩き、その一部——ヴァージニア州リッチモンド市——ではかなり長期にわたって住んだことがあったが、このウッドワード発言は、南部の背負ってきた歴史の重みと苦難のゆくたてとを、一言にして表しえて妙であった。たしかに南部が、4年の余にわたる大血戦の末に武運つたなく敗れ去り、その後も悲惨と退廃、貧困と停頓とを経験してきたことはまぎれもない事実であるが、それが南部人の魂や心情に、百年後の今日なお、どれほど暗鬱な蔭をやどしているかをいまさらのように思い知らされたからである。

南部に遊ぶわれわれは、明らかな経済的社会的停滯や、黒人に対する偏見の執拗なまでの残渣にとまどいを覚え、義憤をすら感じさせられる。ところが一方、しばらく移り住んでみると、Southern hospitality の慣用語そのままに、南部人独特の人情の篤朴さや、風土習俗の魅力に惹かれる自分を見出して、おどろくことがある。諸事ゆるやかで大らかさをもち、人間のもつ衰れさと度しがたさが、窺のうちにただよっているのに心を動かされるのである。それは心のやさしいものにとっては、あやしい吸引力をすらもって知らず知らずのうちに侵透してくる。より自然な湿度と温度とを彼に与え、彼の精神活動を、東北部や西部におけるときよりは安定させるのもあろうか。たとえば安岡章太郎氏の南部紀行は、その秀れた一例であらうし、さいきんベトナム人について、いかなる政治学者や国際関係論の専門家にも増して深い洞察を示した『人間の集団について』の著者——司馬遼太郎氏——に、ぜひ折をえて南部人を描いてもらいたいと願うのも、同じ理由による。

とはいえ、南部や南部人がわれわれアメリカを知ろうとするものにとって、大きなパラドックスであることは否めない。荒々しさと優しさ、粗放と洗練とが奇妙にないまぜになり、しかもその何れもがまがうかたなき南部であることを教えられるからである。アメリカ文学においても、フォークナーやコールドウェルの描く小宇宙は、この種の矛盾が満ち溢れる世界であり、ときにわれわれを不快にし、ときにわれわれの涙を誘う。

ただこの矛盾に満ち、その故に知的刺激をもたらす南部は、なかなかわれわれの視座に入ってこなかった。総論で井出義光博士もいうように「日本人があまり南部には行かなかったこと、またアメリカに関する情報が従来は主に東部や西部を通じて入りこんできたこと」などがその原因であらう。しかし、阿部育教授がその「変貌する一党制支配(第二章)」有賀貞教授がその「南部の対外態度(第六章)」の中で明快に示唆しているように、南部と日本とのかかわりはこんごむする増大していくであらうし、それでなくてもいままでとかく一大独立国の観を呈してきた南部が、アメリカの政策決定過程その他で、その比重を伸ばしていくであろうことは、容易に予想されることである。すでにわが国の財界もこの点を察知し、数年前に日本カリフォルニア会、日本中西部会と並んで、日本南部会という地域別組織を設け、毎年会合を重ねている位である。

この知的分野での欠落を埋めるものが本書であり、その意味において本書の出現は、どれほど評価されてもされすぎることではない。南部は人間的に面白いのみならず、日本にとっても今後は重要な存在なのである。しかも本書は、それぞれ専門の分野からアメリカを地域研究的にとり上げてきた専門家が、その専門分野の見識をタテ糸に、アメリカへの幅広い理解をヨコ糸にして、地理的区分であると同時に、巨大な sub-culture でもある南部という存在を、プロジェクト・チームを結成してまとめ上げた報告書である。評者はたまたまアメリカへの短期旅行に本書を持参、一晚に一章の割合で10日をかけて読了したが、次章が楽しみに待たれるほどで、裨益

されるところがまことに多かった。

総論で南部を概観したのちに、第二章では正井泰夫教授による「南部の地理」に進む。自然地理にとどまらず、経済地理、都市化現象という点から捉えている点が斬新である。変貌しつつある南部を、静態的ではなく動態として把握しようと思うならば、このアングルは欠かせない。第三章は南部の政治機構に関するものだが、ニクソンの南部戦略の記述——とくにそのさいごの部分——がとくに興味深かった。

「南部の経済」を担当しているのはアメリカ経済の秀れた専門家、嘉治元郎教授である。『現代のアメリカ経済』でその識見と学殖は夙に知られており、日本の経済界にも少なからぬ影響力をもつ経済学者だが、坦々とした筆致の中に、リベラルな目が光っているのが印象に残った。「南部と黒人革命」は本誌でもおなじみの猿谷要教授、そのアメリカ黒人論には定評があるが、自ら南部に仮住してその柔やかな心で南部黒人をみているのに共感する。とくに南部のもつ光と闇りについての記事は、豊富なデータ——ただ一部やや古いのがおしまれる——と相俟って評者には親しみがあつた。

第六章はいままで日本ではあまりとり扱われなかった主題で、評者にはもっとも興味があつた。とくにヴェトナム論議における南部タカ派の行動、南部における尚武の伝統は、D. リースマン教授らもアメリカの対外関係を考える上での重要な視点として、かねて強調していた点だが、日本人にはなじみの薄いきらいがあつた。南部にかなり固有な一党制支配もあって連邦議会の有力委員長のポストが、とかく先任権の高い南部議員によって占められていることを思うと、われわれにとっても無縁無関心ではありえない。有賀論文の意味はこの点でもすこぶる大きいとせねばならない。

第七章から第九章までは、いずれもアメリカ文学に特異な地位を占める南部文学を扱ったもので、大浦曉生助教授の「南部文学の成立」、大橋健三郎教授の「南部文学のジレンマ」、須山静夫教授の「南部文学の現代の状況」と続く。アメリカ文学にひどく昏い評者は、ただただ教えられるばかりであつたが、須山論文の「リージョナリズムとコスモポリタニズム」との対比は興味深かった。そしてその結論に心打たれた。人間の存在そのものを凝視するときには、南部と北部とのあいだにも、そのほかのどこにも「万里の長城」は存在しない、というのだが、まさに人間そのものをみつめようという姿勢と、それを容易にするような条件とが南部には豊かに存在するのである。ただその点に関連して、どなたかに南部人、とくに庶民に独特のヒューモアをもう少し論じていた

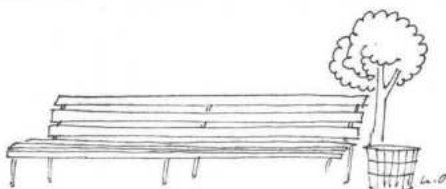
きたかった。評者の感想では、南部の地下人には「門松の数を多くくぐったもののみの知る」人間の哀歎を踏まえた、独特なヒューモアの感覚がある。この点は評者もかつて『国際英語のすすめ』でとりあげたことがあるが、ぜひアメリカ文学専門家の手で、秀れて人間的な問題として論じていただけたらと願うものである。

さいごにこの舞いを、めでたく舞いおさめているのが本間長世助教授の「アメリカの中の南部」である。総論と照応しつつ、各論にも触れて、巻をおこうとする者にみごとなしめくりを与えてくれる。冷静きわまりない同氏の結語を得てわれわれの南部理解に一つのけじめがつくといっても、決して過言ではあるまい。なお、南部にかなり固有な宗教的ファンダメンタリズムが政治的ファンダメンタリズムに取って代われ、過激右翼の精神構造の中に反進化論の反主知主義との共通点を認めるホッフスタッター説を引いているのは、評者の個人的関心から大いに興味があつた。深南部で、いまだに宇宙の誕生が紀元前4004年というアッシャー暦を信じこんでいる大学生や、異教徒は必ず地獄の業火に焼かれるという説教を行なう牧師——南部では普通 preacher という——に会い、彼らがその敬虔さ (piety) をよそに、対外的にはひどくタカ的であることに一驚したことを生々しく思いおこす評者にとっては、この関連はいまだに知的関心事であることを失っていないからである。

とまれ、地域研究としての日本のアメリカ学が、ついにこれほどの重厚さと幅の広さを身につけたことを、われ人とともに喜びたい。そして、日本にとって同様に重要なソ連や中国や東北・東南アジアの諸国についても、これだけふところの深い地域研究が行なわれることを心から期待したい。同時にアメリカ英語の研鑽や教育にたずさわる多くの人々が、その背景をなす重要な一部について、本書を通じその知見を広くかつ深いものにしていられることを切に望みたい。ことばと文化の両立を志すことこそが、真にことばを身につける所以であることは、いまさういふまでもないからである。あわせて、本書の編者らが、アメリカの他の地域もしくは subculture について、同種の研究を手がけられることを切望したい。さしあたり、ニューヨークとか西部とかは、その恰好な対象になるであろう。むしろ、日本との関連、日本人としての視点に立ったものをである。

(国際商科大学教授)

新刊紹介



■『翻訳—理論と実際』

ユージン A. ナイダ

チャールズ R. テイパー 共著

ノア S. ブランネン

升川潔／沢登春仁 共訳

言語そのものが、あまりに身近なものであるために、かえって一般にはこれを、改めて考えてみるということが、できにくいというのと同断で、翻訳ということも、こと自体はほとんど、人類と共に古いほどの営みでありながら、これを思考の対象とすることは、なんと遅れたことであろう。

翻訳の歴史にあって、時間、訳者、対象の言語など、あらゆる面からみて、もっとも実績のあるのが聖書の翻訳であるが、その聖書の翻訳ということでは、実際面でも理論面でも、まさに世界の第一人者であるのがナイダ氏であるが、その *The Theory and Practice of Translation* が、日本語に訳されて、より身近になったのは、おおげさに言えば、日本の文化にとってありがたいことである。

「訳された」と言っただけでも、それはいい意味で当たっていない。本書は「訳された」以上の結実を見ているからである。ブランネン氏という、ねがってもない才能が、日本の翻訳の実情に合わせて、貴重な日本語、日本文学の翻訳例を加え、練習問題までゆきとどいた用意をしているからである。

翻訳は結局は芸であるけれども、

その芸を言語学という理論を道具に検討することによって、その芸の正体を明らかにしようというのが、本書の主要なねらいである。ナイダ氏の柔軟な考えは、*Bible Translating, God's Word in Man's Language, Toward a Science of Translating* と氏自身が学問の進歩に歩調を合わせてきた実績に裏打ちされている。

本書を読了して気持がよかったのは、「訳すときに読んだのが初めて」という乱棒な翻訳すら見受けられる今日の日本に、この訳者たちの周到な勉強ぶりが光っていることである。参考書目などは手本にすべきものである。訳文もよくできている (p.56 の原注下4行が一番読みとりにくい例)。おや、と首をかしげたのは、Do you have color T.V. in Japan? の答えは、Yes, I have. でなくて Yes, we have. であるところ。

多くのことを教わった。俳句の訳のところは、とくに著者の実例に即座にはうなづけなかったが、それはまさにこちらが、なにがし俳句を知っていて、英訳の評価を正しくする立場にないことを指摘されたようなところがあって苦笑した。日本の翻訳家たちに本書を読んでほしいと思う。学生に読ませたいと思う。ついでに、ブランネン氏に一書、翻訳みちるべ、を書かせたいものである。

(研究社 A5判 282頁 ¥1,700)

(明治学院大学教授 郡司利男)

■『これからの英語教育』

池永 勝雅著

著者は1956年度のパーマ賞受賞者で、H.E. Palmer を完全に digest し、教材作成のために Fries と長期にわたり仕事をされた英語教育30年のヴェテランである。本書は、「私のいままでにたどりついた記録であり、今後の礎石である」とはしがきで述べられている通り、全篇にわたって、実践の上に立つ著者の信念が感じられる。読者は著者の批判精神の旺盛なことに感銘を受けるであろう。これから教師になる人、現場で壁にぶつかっている人により指針を与えるものとして心からすすめたい本である。

全体は6章にわかれ、I. 言語学習と語学教育の目的 II. 指導法(とくに The Oral Method と The Oral Approach のちがいは力をこめて書かれている) III. 語学教育の変遷の3章は IV 章以下を論述するための布石であり、先人の残した業績を正しく伝えるという著者の考えを満たすものである。IV. 指導計画は本書の約半分を占める力作であり、著者の経験と抱負を遺憾なくもりこんでいる。即ち IV. は 1. 教科書分析 2. 指導過程 3. Hearing の指導 4. Speaking の指導 5. Reading の指導 6. Writing の指導 7. 文法の指導 8. Pattern Practice 9. Dialogue Practice (著者は「Pattern Practice によって練習された Pattern に dialogue によって生気を与えることは絶対に必要なことである」(p.146) との信念からこの項を入れて、その作り方、留意事項を具体的に説いている) 10. 評価 (subjective test は言語テストとして適しているとはいえないことは明かである (p.150) と断言しているが反論もある

う) V. 指導能率を高めるための機器 (OHP, シンクロファックスなどの視聴覚教具がこれからの英語教育の形態を変えることを読者は予測できよう。) VI. 英語科の諸問題は、1. 学習活動と言語活動 2. 授業のシステム化 3. 入門期の指導 4. 個人差に応ずる指導 5. 教科書の選定にわかれ、とくに「授業のシステム化」の基本的な考え方に啓発されるところが多い。

大部分の著者の説には読者も賛意を表するであろう。しかし「文字を見せない期間を少なくとも夏休までの線に近づけるのが望ましい」(p. 203)といった大胆な説には、授業時間削減の今日、どうであろうか？

また高校の英語教育についての記述が少ないことも高校教師には不満が残ろう。

(開拓社 B 6判 232頁 ¥1,000)
(奈良教育大学助教授 佐藤秀志)

■『意味論と外国語教育』

片桐ユズル著

従来の英語教育は、英語の語学的な側面ばかりをとりえていて、英語でどんな教育が出来るのか、どんな人間に育てようとするのかという視点が欠けていたことを指摘するところから、この本は始まる。

片桐氏の文を始めて読む人にとってこの本は、類書の書き方とちがうのでやや読みづらいかも知れない。がそれは、平素われわれが、英語教育に対して固定的な視点をもっていて、もっと広い立場——意味とか認識とか、日本語を含めた言語教育とか——から、ものを見ないくせのようなものがついてしまっているせいである。その点 この本は読むのに抽象力を必要とする。つまり、自由に開かれた状態で読む必要がある。そ

うしないと、マクルーハンやハクスレーが、英語教育と結びつかない。(第II章)その点で、この本には、片桐氏の詩人としての要素と教育家としての哲学が一つになって飛び跳ねている。だから読みようによっては一見つかみどころのない外国語教育論のように見えるが、われわれが自分の問題として外国語教育をとりまくものを考えれば、一種の興奮をもって迫ってくる。

第III章では、現在の英語教育がもっている問題点を指摘している。言語活動、言語と認識、視聴覚教材の考え方、パーマー流の方式の問題点などを、氏一流の角度と知識を自由に使って論じている。

そして最後に、頭——認識、認知——を通した外国語教育を説いて、その教材の意味論的配慮、考え方を広げるための方法論などが第IV章に述べられている。

全体として流れている考え方は、反言葉主義、反受身主義、反完全主義にまとめることができよう。それが何を意味し、生徒をどのように楽しく言語に意識を向けさせるかは、この本を自分自身の問題として読みこむ人に始めて与えられる解答であろう。

(くろしお出版 A 5判 226頁 ¥1,200)
(東京女子大学短大助教授 升川潔)

■『放送英語』

長谷川 潔 著
関根 応之

本書は、お茶の水女子大の長谷川潔助教授と大東文化大の関根応之助教授が、すでに発表した放送英語に関する論文に加筆して、一冊の本にまとめたものである。第1章から第8章まで、放送英語一般、その特徴、ニュース英語文の構造、語法、文型、米英放送英語の発音の差など

具体的な例をあげ詳細に説明している。全体を通じて言えることだが、豊富な例文は、これまであまり放送英語に接したことのない読者にも役立つことであろう。

本書が他の放送英語関係の解説書、参考書に比べてすぐれているのは、このほか、最後の2章(第9・10章)で英語ニュースの聴き方について適確な advice を与えていることである。たとえば、第9章の「英語ニュース聴取上の留意点」で、比較的とらえにくい音の連鎖のひとつとして [d]-[t] (e.g. It was learned today... [lɔ:ndtədeɪ]) をあげ、[d] は先行の子音 [n] と後続の [t] にはさまれているため破裂音とはならず、無声音 [t] の影響をうけ無声化して [t] となるため [tt] が [t] 1音となる。そして learn today のように聞こえるが、実際はほんの一時 [n] と [t] の間で呼気が止まるので、learn today と learned today の識別は出来る。また意味上、ここでは当然受身形となるべきで過去分詞 learned に気付くはずであると述べているが、このような経験上からの advice は、特に放送英語の初心者には、非常に有益である。

放送英語の解説書として本書ほど comprehensive なものはない。それだけに放送英語——聞く英語——の性格からも、本書に即した放送テープをつけて欲しかった。また補章の英語の参考文献が up-to-date でないのも残念である。たとえば、Edward Bliss Jr. と John M. Patterson の *Writing News for Broadcast* (Columbia University Press, New York, 1971) など放送英語に関するすぐれた文献は最近もいろいろ出版されている。

(朝日出版 四六判 248頁 ¥780)
(東京理科大学助教授 木塚晴夫)

■The Japan Interpreter

経済大国に成長したわが国が、今後諸外国との協調のもとに成長発展を続け、国際社会で建設的な役割を果たしていくためには、日本と諸外国とのコミュニケーションをより円滑にすることが肝要である。

この国際間のコミュニケーションの向上という仕事を効果的に進めるためには、これまでしばしば見られたように、その場しのぎの片手間のやり方では全く不十分であることはいうまでもない。

いわゆる交流プログラムを実施する当事者に、インターナショナル・コミュニケーションの機微を理解する繊細な神経と使命感が欠けている時、これらのプログラムは意味の少ないものになってしまうのみならず、時には逆効果をもたらすことすらある。

当センターは、このような反省をふまえ、国際交流を専門的効果的に推進する目的を似て設立された団体であるが、その多面的な活動の一環として、海外における日本理解を深めるべく英文季刊誌 *The Japan Interpreter* を出版している。

この雑誌は、現代日本の政治・経済・社会・文化等の諸分野におけるすぐれた論文を中心に構成され、世界各国において、とくに日本研究所、比較研究学者の間で高く評価されており、研究資料・教材としても広く利用されている。

Fulbright Scholars を含む数名のアメリカ人日本研究者と日本人との協同作業を通じておこなわれる翻訳は、日本語の論文の wording ではなく、meaning を読みやすく、しかも格調の高い英文で表現することを

目標としている。

内容を具体的に説明すると...

ESSAYS: 現在出版されている各種の新聞・雑誌より外国に紹介するに適当と思われる論文を選択する。

最近号では、China problem (7巻3・4号), US-Japan relations (8巻1号), What is it to be Japanese? (8巻2号) 等々を特集している。

REVIEWS: 日本での最近のベスト・セラー、日本研究のための図書などの書評と紹介等。

CONTEMPORARY JAPANESE IDIOMS: 日本で流行していることばを解説しつつ、現代の日本社会の世相を分析した小論。天下り・カギツキ・マイホーム主義・村八分・昭和元禄(7巻3・4号)、蒸発・金の卵・ノーカー運動・トーゴサン(8巻1号)、ウーマンリブ・ボルノ(8巻2号) 等がある。

ONLY YESTERDAY: 昭和史、特に戦前の社会・経済に関する論文が連載されている。Prewar popular culture (7巻3・4号), beginnings of the auto industry (7巻2号), Koreans in Japan during the war (7巻1号) 等。

GROUPS and PERSONALITIES: 現代日本を動かす様々な集団や指導者のプロフィールを軽快なタッチで紹介する。Leaders of "Japan, Inc." (7巻1号), The agricultural cooperatives (7巻3・4号) 等がある。

(日本国際交流センター A5判

¥1,200 季刊誌 年間購読料 ¥3,000)

(国際商科大学教授 國弘正雄)

■『アメリカの風俗文化史』

青木英夫著

本書は植民の時代からジョンソン大統領の時代までのアメリカを、政治・経済的視点からだけでなく、文化・風俗をも視野にとらえてアメリカの全体像を概説している。

アメリカ史におけるピューリタニズムの果たした役割や「独立宣言」の背景、「ニュー・ディール政策」等にも適当なページをさいているが、特に本書を興味深いものにしてゐるのは自動車の発達、禁酒法、プロ・スポーツの発展といったアメリカを特色づけ、またその産物ともいえるテーマを種々のエピソードをまじえて述べている点である。たとえばミシンの代名詞ともいえるシンガーの事業家としての手腕と、ミシンの普及が女性に職場を与え、社会へ進出させた事を述べた章などはおもしろい。随所に各時代の生活をうかがわせる写真が多数挿入されているのも楽しい。

しかしアメリカを特色づけているものは本書ですべてふれているわけではなく、アメリカ人の銃器観とか、セールスマンによって広い西部の各戸に普及した grandfather's clock と興味深いテーマは尽きない。その意味で参考文献が政治・経済・思想の標準的著作に偏しているのは片手落ちといえよう。なお英語のスペリングに誤植が多く読者は注意が必要である。

アメリカについての書物の多くがアメリカを「告発」する姿勢で書かれているが、本書はそのアメリカを「擁護」する立場で書かれていることも付け加えておく。

(新樹社 A5判 180頁 ¥1,300)

(ELEC 出版部 寺村 繁)

ELEC BULLETIN

＝新 刊 案 内＝

『アメリカの人種と文化』 マリオ・ベイ著、大島良行訳
B6判 175頁 760円、中央大学出版部

アメリカが「人種のるつぼ」でないと言われて久しいが、本書ではアメリカ人を構成している人種を、14のグループに分類して紹介している。各人種の母国語とそれぞれに特有の語法のアメリカ英語に与えた影響や、各人種の代表的人物を政治家から女優まで多数あげ、よく知られている人種の特徴を平行的に述べると同時に、時代によってピークの違う各人種の移民の事情とその時代のアメリカとの関連を述べてアメリカ史の一断面を浮き彫りにしている。

『アメリカ合衆国の地理』 ビエール・ジョルジュ著、野田早苗訳 137頁350円、文庫クセジュ 白水社

広大で多様なアメリカとアメリカ人を理解するために、自然地理と人文地理の両面から手際よく解明したアメリカ研究の基本図書。第一部では地形、気候、風土、農業、鉱物資源について、第二部では人種と気質、人口問題から社会的構造、農村と都市の問題そして環境保全と自然保護について多数の資料を提示しながら簡潔にしかも問題の核心をとらえて述べている。

『アメリカは有罪だ(上・下)』 I. ストーン著、小鷹信光訳 四六判全495頁、各850円 サイマル出版会

クラレンス・ダロウといえば、ダーウィンの進化論を否定しようとした聖書偏重主義者との「モンキー裁判」の弁護士として有名だが、その他二十世紀初頭のアメリカの卑劣な謀略に単身困難な戦いを挑んだ彼の人間像を適当に家庭生活、私生活をもまじえて感動的に描いた伝記。

『英語討論のスキル How to Debate in English』(英

文) W. C. マナバック、トミー・植松 共著、A5判 157頁680円、研究社

本書は英語討論全般について体系的に述べた恰好の手引書。単なる技術論に終始することなく、説得力ある英語の表現のための論理的構成と展開にも多くの頁を費し、英語表現をめざす人に便利で有益。

『FEN ニュースの聴き方——その背景とアメリカ英語』 渡辺千秋著 B5判孔版印刷 86頁500円、時事英語放送研究会(東京都西多摩郡羽村町羽3900-9-207 電話 0425-54-2964)

FEN (Far East Network) に勤務し、学生・社会人に放送英語を指導している著者が実際の経験から述べたアメリカ英語、放送英語の入門書。

『海外旅行・英会話の公式 正編』 田崎清忠著 B6判 207頁500円、ジャパンタイムズ出版部

『英語のしゃれ』 広永周三郎著 B6判218頁580円、太陽出版

『新英和笑辞典』 郡司利男編 新書版273頁720円、研究社

『英文手紙表現辞典』 北川大憲著 B6判239頁1,000円、ジャパンタイムズ出版部

Studies in English Linguistics (『英語学研究』) 第2号 太田朗編集 B5判148頁1,200円、朝日出版社

『動詞叙法の研究(新版)』 細江逸記著 A5判356頁1,600円、篠崎書林

『続クエスチョン・ボックスシリーズ 第16巻 名詞・代名詞』 編著者代表渡辺登士 A5判114頁650円、大修館書店

『新・英文学史入門』 ビーター・ミルワード著、安西徹雄訳 新書版189頁300円、三省堂

『イギリス教養小説の系譜』 川本静子著 四六判 290頁1,100円、研究社

(Continued from p. 56)

Mrs. P-B might say:

A: "Well, goodbye! I'm so glad you were lucky. I just thought I'd let you know about it."

and Mr. Smythe might sign off with:

C: "Yes, thanks for calling! It was kind of you. Remind me to buy you a cup of tea sometime! Goodbye!"

On the telephone you are relying on your

sense of intonation and it is vitally important to catch exactly what is said, or who is talking. Mistakes can be serious, or at least embarrassing:

Wife, telephoning her husband at the office:

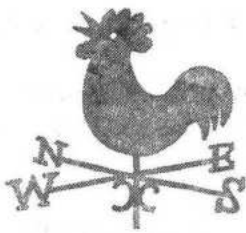
"Hello, is that Bliggens and Bliggens?"

Secretary: "Yes, can I help you?"

Wife: "This is Mrs. Witherington."

Secretary: "No, I'm afraid he's busy..."

(To be continued)



展 望 通 信

◆第9回 ELEC 英語教育研究大会

第9回 ELEC 英語教育研究大会は11月10日(土)約300名の参加者をえて盛況のもとに ELEC 会館において開催された。

会は、高橋専務理事のあいさつに始まり、Mr. A. Jean-Jacques Dunn (Language Education Officer, The British Council) による講演 "Problems and Attitudes in the Teaching of English in Japan", および黒田巖氏(大妻女子大学教授)による講演「英語教育50年の回顧」、東京都立神代高等学校大橋菊子教諭による実演授業、専門部会等があり成功裡に終了した。

◆1973年度 ELEC 賞授与

本年度の ELEC 賞応募論文のうち ELEC 賞に該当する論文はなかったが、つぎの3氏の提出論文に対し、ELEC 奨励賞が授与された。

研究論文「再び多読・速読の指導について」

群馬県立富岡東高等学校 青木富太郎氏

実践記録「Oral Approach の実践研究」

新潟県大和町立大和中学校 横溝昌市氏

研究論文「Oral Approach のシステム化」

新潟県立小針中学校 吉田正保氏

◆ELEC 月例研究会

ELEC 会館において毎月行われている月例研究会の1月以降の予定はつぎの通りである。いずれも入場無料。

第68回 1月26日(土) 2:30-4:30

「辞書の発音」

東京外国語大学教授 竹林 滋氏

第69回 2月23日(土) 2:30-4:30

「英語教育の論理」

お茶の水女子大学教授 外山滋比古氏

第70回 3月30日(土)

「一般成人対象英語教育と語い」

ELEC 研修部長 山本庄三郎氏

◆ELEC 海外留学英語試験

海外留学希望者、TOEFL 受験者、海外出張者を対象とする英語能力検定・診断・指導のための試験が2月22日(金)午後1時から ELEC 会館で開催される。受験

希望者は「ELEC 海外留学英語試験」係宛、願書を請求されたい。申込受付は先着順で定員に満ち次第締切。

◆ELEC 英語研修所「海外留学試験科」

米国留学英語検定試験 (TOEFL) 受験のための短期集中準備コース。Listening Comprehension, Structure, Vocabulary, Reading Comprehension, Writing の5領域に関して、テスト、解説、練習、討議の順で準備の総仕上げをするもの。週2回(火、木)、1日4時間、週計8時間。研修期間は6週間。

第5期 1月17日(木)～2月26日(火)

第6期 2月28日(木)～4月11日(木)

◆ELEC 海外英語研修

ELEC では今夏「ミシガン州立大学英語研修旅行」を下記の通り実施する。

1. 旅行期間 7月29日(月)～8月27日(木)30日間
2. 英語研修 ミシガン州立大学英語研修センターで7月31日から8月19日まで。
3. 旅行経費 ￥480,000
4. 募集人員 40名
5. 申込書 「募集要項」および「申込書」は、ELEC まで請求する。

◆English Teaching Forum の配布

ELEC では USIA 発行の英語教育専門誌 *English Teaching Forum* の配布を行なっているので、購読を希望される方は ELEC 出版部宛申し込まれたい。購読料年額1,000円(含送料)。

■本誌の年間予約購読をおすすめします。購読料は年額1,400円、送料は当出版部で負担いたします。なお、本誌の合本第2巻(第13号～第24号)および第3巻(第25号～第36号)の在庫が若干部あります。ご希望の方は当出版部へお申し込み下さい。定価は各3,000円です。

英 語 展 望 (ELEC Bulletin) 第 44 号

定価 350 円 (送料85円)

昭和 49 年 1 月 1 日 発行

◎編集人 中 島 文 雄

発行人 竹 内 俊 一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12
電話 (269) 1111 (大代表)

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8
電話 (265) 8911～8916
振替・東京 11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC